

あるいは
傷

としての短編

その集合
そして



熱帯の町に、雪が降ったら。

4月30日は、いわゆる《サイゴン陥落》の日だった。

1974年生まれ、というわたしが世代論的に言うと、歴史の教科書の最後のページが、この《サイゴン陥落》、つまりベトナム戦争終結だったので、嫌でも知っている。

時系列を書くと、こうなる。

1973年1月23日、当時のいわゆる《北ベトナム》の、特別顧問レ・ドック・トと、キンジャー大統領補佐官の間で、和平協定案の仮調印がされる。

同年、1月27日、《パリ協定》正式調印。

同年、1月29日、ニクソン大統領はベトナム戦争終結を宣言。

以上で、いわゆる北ベトナム軍と南ベトナム軍の休戦が一応成立する。もちろん、このまま放っておけば、今の北朝鮮と韓国のようになっていた、可能性もないでもない。

この功績によって、上記レ・ドゥク・トとキッシンジャーにはノーベル平和賞が授与される。

しかし、レ・ドゥク・トは、ベトナムにまだ真の平和は訪れていないということを理由に、受賞を拒否する。多くの人々は、そのストイックさに共感した。

とはいえ、これはある意味で正論である。一方的に軍事介入してきたアメリカが、もう戦争やめる、と言っただけで、実質、南ベトナムと北ベトナムの戦争が終わったわけではない。統一されたわけでもない。二つの《国》が、お互いに国家承認しあい、共存共生を誓ったわけでもない。いまだに、南ベトナムとは、実質アメリカの傀儡政権に過ぎないのだ。

あるいは、これはあくまで私見だが、レ・ドゥク・トは、最初から、こんな調印、まともに守るつもりなど無かった、のかもしれない。だったら、もらえるわけがない。

休戦？形だけだよ、と。おれたちは、統一するまで、戦うよ、アメリカに一時、手を引かせたいだけだ、と。

是非はともかく、いずれにせよ、彼らの決断こそが、ベトナムが第二の朝鮮半島にならないですんだ理由である、とも、言えなくもない。

その後、1974年、年頭、北ベトナム側がなし崩し的に戦争を再開する。

同年、ウォーターゲート事件でニクソン失脚。アメリカ側、戦闘再開にほぼ手出しせず。南ベトナム、…《サイゴン政府》は、その後ろ盾に見放されたことになる。

南ベトナム側は、防戦一方。

1975年3月、北ベトナム軍の総攻撃開始。ちなみに、これを《ホー・チ・ミン》作戦、と言う。

同年、4月20日あたりには、南ベトナム首都《サイゴン》を北ベトナムが包囲。

同年、4月30日、南ベトナム高官および、残りの米軍兵士、軍高官等の一斉撤退が始まる。

このときの完全撤退のシグナルは、米兵用ラジオ・チャンネルから流れる、《ホワイト・クリスマス》だった、らしい。

ビング・クロスビーの歌ったものだ。

格好つけていえば、4月、熱帯の町《サイゴン》に、雪が降った、ということになる。

撤退開始の通知を受けた北ベトナム軍は、その完全終了まで待機。撤退終了後、北ベトナム軍、サイゴン突入。

米軍は、海に軍用ヘリや武器を投げ捨てて、海の向こうに帰って行った。

ここに、サイゴン政府は崩壊し、旧都《サイゴン》は、現在の《ホー・チ・ミン》市へと、名前を変えることになる。

この日のことを、アメリカ人は Fall of Saigon と呼び、日本人はその直訳で、《サイゴン陥落》と言い、ベトナム人はもちろん、《南部解放 Giải phóng Miền Nam 》あるいは、《サイゴン解放 Giải phóng Sài Gòn 》と讃える。

南部発音だと、ヤイフォンミエンナム、ヤイフォンサイゴーン…と言う感じの発音。北部だと、ザイフォンミエンナム、ザイフォンサイゴーン、だ。…と想う。

北部言葉は、実は、あまりよく知らない。

南部、中部では、どちらかという、《南部解放》と呼ぶのが一般的だ。

ベトナムに来た当初、どこに行きたい？そうベトナム人スタッフに問われて、是非、サイゴンに行きたい、と言った。

会社はホー・チ・ミン市にあった。ここが、その《サイゴン》であることを、わたしは、知らなかったのだ。

…ここですよ。

当然だが、スタッフはそう言った。

「ここが？」

「そう。」

「そうか。」

「ええ。」それだけ。ココナッツの街路樹が、風に揺れる。

小学生の頃だ。若い、30代の男の先生が、かなり気合を入れて、《サイゴン陥落》のことを教えてくれた。それもそのはずだ。彼にとっては、ちょうど多感な十代の頃に起きた、記憶にも鮮明な大事件だったのだから。

4月30日、サイゴン政府及び米軍の、撤退のシグナルは、米軍用ラジオ・チャンネルから流れる、ビング・クロスビーの《ホワイト・クリスマス》だったという。

その日、一日中、熱帯の町に、その曲は流れ続けた。

春、4月、熱帯の町、灼熱の《サイゴン》に、雪が降る。

それは、幼いわたしにとって、鮮烈過ぎるイメージだった。この地上のどこか、熱帯雨林の林の向こうに、幻と消えてしまった町、《サイゴン》に、いまもずっと、人知れず雪が降り続けている、そんな映像が、頭の中から離れなかった。

だから、《サイゴン》と言い、《サイゴン陥落》と言えば、わたしにとって、まっさきに思い浮かぶのは、見渡す限り一面の、雪化粧、である。

*

* *

南部の町のカフェに行くと、ハンモックを吊り下げている店が多い。安っぽい、ほこりっぽい店に限って、だ。家族だけで運営されているような、すぐ横の席でその家の子どもが宿題をやっているような、そういう店である。

ホテルの近所にあった、そんな店で、昼下がり、ハンモックに寝転がっていると、いつの間にか寝てしまう。

休日だった。

心地よい。眠りは浅いが、ちょうどよい。日陰の風の中で、うとうとするくらいが、ちょうど気持ちいいのだ。

なんとなく人の気配がして、眼を開けると、覗き込むようにしてわたしを見ている顔があった。女の子だ。十五、六歳なのではないか。うつくしいとも、かわいいともいえない。とはいえ、醜いともいえない。よくもわるくも、個性的な、といってお茶を濁すしかない、そんな、ありふれた顔立ちの少女だった。

この店の女の子であることは知っている。

何度か、顔を合わせたことがあった。カフェは、ホテルのすぐ向かいだったから、わたしは、ほぼ毎日のように、ここに来ていたのだった。

微笑みながら、くるくるした眼差しで、隣のハンモックに腰掛けたまま、かぶさるようにして、わたしを見つめていた。

髪の毛が、わたしの首筋に触れそうになる。

わたしは、微笑むしかない。

彼女が、なにを想っているのか、もちろん、わたしだって感じていた。

…恋、というもの。

万葉集に、《孤悲》と書いて《恋》と読ませる当て字があるが、それほど想いつめた感じではない。

もっとあけすけで、あ、この子、おれのこと好きなんだな、と、想わず笑い出してしまいそうな、そんな、明るくて、素直な表情だ。

とはいえ、笑ってばかりもいられない。

そこには今、彼女のほかに、父親と母親と、歳のはなれた弟なのだろう、十歳くらいの少年と、そして、何人かの客がいた。もちろん、みんなベトナム人だったが、…どうだろう？

彼女は明らかに未成年なのだし、わたしの立場としては、どうだろう？

周りの人間が、彼女のそのむちゃくちゃな積極性に、なにも言わないのが、不思議だった。

それから、店に行くたびに、彼女の強烈な眼差しを、かならず意識しないではいられなくなった。

スタッフに言ったら、なにをいまさら、という顔をされた。最初に一緒に行きましたよね、あなたをホテルに連れて行ったときに。あの時からですよ。

…そうか、と、つぶやくしかない。気付かなかっただけ、らしい。

「で、どうしたんですか？」

「どうって？」

「恋人にしましたか？」

「…まさか。」

言葉が通じないのだから、身振り手振りのやりとりの中で、わたしのコーヒーを一杯くれ、のジャスチャーが、わたしの妻になってくれ、のジャエスチャーとして解釈されない可能性も、ないわけでもないかもしれない。なら、それは、わたしの責任でもあるのだろうか？

さすがに、誤解を解くなり、彼女に遠まわしに断るなり、なにかしないと、いくらなんでも無責任だ、という気がした。

スタッフはなかなか取り合ってくれなかったが、面倒くさがる彼を無理やり引き連れて、カフェに行った。

わたしはあなたの恋人になることはできません。いつ、日本に帰らなければならないか、わからないのだから、と、婉曲に断るよう、スタッフに頼んだ。

二人は、わたしの目の前で、ニヤニヤしながら、なかなか話し終わらない。ときに、意味ありげな流し目をわたしにくれながら。

やがて、スタッフは声を立てて笑い、わたしに言った。

「無理ですね。彼女、結婚したいと言ってます。」

そこを何とか説得するのがお前の仕事だ、と言ったが、スタッフは肩をすくめ、「いつ恋人になってくれるんだ、と言っていますよ」そう答える。

When pigs will fly… 豚が空を飛んだらね。その言葉をもじって、わたしは彼に言った。

「サイゴンに雪が降ったら。」スタッフは笑う。…いいね、それ。いい。とてもいい、すてきな振り方です。

… When snow will fall in Sai Gon.

そう、ここが、雪に埋もれる日に、わたしたちは恋人同士になれる。美しいイメージだ、と想った。

幻の、《サイゴン》に降る雪の、純白のイメージを想起する。…熱帯の雪。

スタッフに言われて、少女は、声を立てて笑った。わたしを振り向く。そして、これまで以上ににこにこ微笑み、わたしに親指を立てた。

…Good !、あるいは、O.K. ! だろうか？

一瞬、意味がわからなかった。

カフェを出た後、スタッフに言った。

「なんて、言った？彼女。」…うーん、と唸って、「たぶんね、彼女、結婚の約束をしてくれた、と想ったみたい。」

「なんで？」

「だって、言ったじゃないですか。サイゴンに雪が降ったら、結婚してあげるって。」…ね？と、スタッフは肩をすくめて、「…だから、それは、結婚の約束をした、ということでもあります…」

この町の、永遠の夏の日差しが直射して、アスファルトの路上をきらきら、きらきら、白くきらめかせる。砂埃が舞い上がり、こまかく光る。熱気を孕んだ風が吹く。…雪。

北海道にも夏があるのだ。この熱帯の町にだって、雪が降る日が、いつか、来るかも知れないではないか。そんな気がした。世界が、終わるまでの長い長い、途方もなく長い、永遠に近い時間の中の、いつか。一日くらいは。

だとしたら、ほぼ、永遠に近い長い時間をかけた約束を、わたしは彼女にしたことになる。

「…そっか。」

わたしは独り語散るようにつぶやき、理解した。彼女が、たしかに、永遠を手にしたことを。

色彩と形態の中に

In a landscape

In a landscape

息遣う。

覚えている。

そっと、

いまだに。(…誰を?) 僕が壊して仕舞った女のことを。

破壊した?あるいは、破綻させた、…どうやって?(なぜ?)

呼吸した。

あんなことを、…なぜ、と想いながら、(覚えている。)なんども、あるいは、なんだか、(いまだに、)考える。…誰を?

気付かれないように。

彼女。笑って。理沙という、…ね?僕が(破壊した?)愛した、(あるいは)…かもしれない、…ね?(破綻させた)その。

気付かないように。

…どうやって?怖くないから。ただ、ひたすら…ね?(なぜ?)傷つけあうことによって。(なぜ、…)

君を、

24歳の僕は、笑って。(なぜ?)微笑んで。体を売っていた。(あんなことを、)実質的には。笑って。要するに、(あんなことたちを、)微笑んで。つまりは。

起こして仕舞わないように

(あんなことらを、)ホストだったから。(あんなこと[複数形]を)僕は、夜の歌舞伎町で生活していた。

僕は、手を

90年代の、(…なぜ、)ビルが火災になる前に。(と想いながら、)町はまだ死んでいなかった。覚えている。見て。

伸ばす。

まだ、君のすべてを。(なんども)見て。町には君のすべてを。自由があった。見て。(あるいは、)君のすべてを。穢い人間の穢いくずが(なんだか)汚物を見て。すすりながら

光に。…月の?

生きていけるだけの、ありのままの。なんとか、(いまだに)かろうじて確保された、見て

。それ。(考える。)笑って。町であった、僕に

窓からの、

(…誰を?)壊された女、出来るなら。(彼女。)笑って。…理沙。

褐色の、理沙。

色

色彩と

かたち

形態

色彩の

色

かたちづくられた、

色彩
形態の
色
形態と色彩
かたちづくりられた色
色の
かたちづくった
形態
かたちづくりられた色のかたちづくった形態
形態と色彩
に
色彩に
形態と色彩に。
どこに？
形態と
色彩の
中に
色彩と形態の中に、



ふいに、壁の向こうに土砂降りの雨が降る。猫に起こされる。その、ながくなめらかな鳴き声に。ベトナムの、ベトナム人の妻の家だった。5時半。まだ夜は明けない。眠った振りをする。かたわらに妻の体臭がある。



まるで、廃墟のような家だった。すくなくとも、一般的な日本人にとっては。1970年代の始めに立てられた、レンガブロックをコンクリートで固めて作った家。でたらめな電気配線が壁をはい、必要以上に広く間取られ、基本的に部屋と言う概念はない。一応の仕切りを兼ねた、壁だけはある。ガラス窓は一枚もない。飾り格子がはめ込まれた窓に、板で作った窓板が雨戸の用をたし、それを塗った青いペンキは剥げかかっている、壁は一面、淡い緑色に塗られていた。床の

緑の御影石は、いつもの午後に、日差しと、人々の影とを白く反射したものだ。どこかに、銃弾が数発くらい、残っていないものかと探したことがある。ここに来た当初に。そんなものはなかった。ここでは戦闘は行われなかったのかも知れないし、たまたま銃弾を食らわずに済んだだけなのかも知れないし、戦後、補修が行われただけなのかも知れない。

壁の向こうに雨が打ちつけ、撥ね、空間のすべてを片っ端から濡らし、音。遠く聞こえるそれが、その唯中では、もはや轟音にすぎないことには気付いている。家に住み着いている猫が子どもを5匹と、4匹生んで一ヶ月たった。母猫と、その子猫とが。どっちもメスだったから、同じ時期に二匹とも生んだ。

ながい鳴き声が、呼応し、連鎖する。それぞれの声に、それぞれの子猫が鳴き、何かを返し、返され、鳴かれ、鳴いて、更に答える。

なにを言っているのかはわからない。いずれにしても、猫が彼ら固有の言語を話すことだけはわかる。もう少し、夜が明ければ、彼らは一度、沈黙して仕舞うことも知っていた。いつものことだったから。…雨。

ベトナム中部のダナン市で、そこはいま、社会主義政府の方針によって、ベトナム中の資金をかき集めた観光地開発が同時多発的に進められて、うるさいほどだったが、ときに、不意打ちのように土砂降りの雨が降って、一気にやむ。その日は半日、曇っている。昼近くには、南部ほど鮮やかでは日照が、路面のすべてを干上がらせて仕舞うにもかかわらず。

老いさらばえた自分の皮膚を撫ぜる。顔の。醜く、美しさの残像さえも維持しないそれ。40歳を超えた、自分の体中が、淡い腐臭をさえたてていることを知っている。ベトナムでさえ、誰もがわたしに言った。…あなたは、とてもハンサムです。…ありがとう。答え、微笑み、その、恥ずかしげもなく潤んだ、生暖かい眼差しの群れ。

無数の、わたしを捉えようとする眼差し。わたしは美しい。彼ら、…彼女たちにとっては。潤んで、瞳孔をやわらかく開かせた、女性特有の発情した眼差し。穢らしい、という概念に実態を与えたら、そうなるに違いない、無数のそれら。触れたものを陵辱するのではなくて、触れたみずからが陵辱されないではおかない、奇妙に自虐的な眼差し。わたしは醜い。老いさらばえ、生きている資格さえなく、死ぬ必然は奪われたままだ。

なぜ、女たちはみんな、愛するものを見つめるとき、まるで知性を感じさせない、痴呆的な目つきを曝すのだろうか？あわれなほどに。

女たち。…あんなにも穢らしくて、よく生きていけるものだと、わたしはいつも、彼女たちの生き物としての倫理観を疑った。

…ほら。
みずきあい
水城愛が言った。

…ね、…ね。

二十二歳のわたしは、彼女に揺り起こされて、思わず、匂いを嗅ぐ。目覚めかけながら、その寝起きの、汗ばんだ体と、覆いかぶさった髪の毛の、倦んだ匂いの氾濫を。

…見て、…ね。

まさき
真咲、と、彼女が呼んだわたしの源氏名を、…息遣う。至近距離で息遣う愛の存在自体がうざったくて、わたしは眼を開けない。

…まあくん、…ね。

愛が、手首を切ったに違いないことくらい、知っている。どうせ、死にはしない。死ねばいいのに。どうせ、と、…俺も？まともな人間じゃないんだから、俺も、か。…それって。と、不意に声を立てて笑って仕舞う。

…、…、…

息遣う、やわらかく、ぐにゃぐにゃした生き物。自分が美しくないと生存できない、家畜のような暴君たち。女たち。眼を開き、目の前に押し付けられている愛の、瞳孔が開ききった眼差しを見る。白目さえもが、上気している。血の匂いを探す。裸の胸元に感じるかすかな湿気が、それに違いない。リスト・カットする前に、裸のまま寝て仕舞ったわたしの体を、愛は何度嘗め回すように見たのだろうか？いつものように。かすかに、ほんの微かに唇を開いて。わたしは愛を見詰めた。口付けた。その瞬間、彼女の瞳孔が縮まって、一瞬だけ。そして、予想だにできなかった、滂沱の涙があふれ落ちた。

1998年、渋谷。

あるいは、来年には、空から恐怖の大王が、こんにちは、と、世界に挨拶するかも知れなかった。

わたしは歌舞伎町のホストで、水商売の女や、風俗の女や、いわゆる常識人の振りをした頭のおかしな色情狂のメスたちに尻を振られていた。

寝苦しそうな寝息を立てて、添い寝するベトナム人の妻は熟睡している。壁の、高い位置にある通風窓から光が微かにさして、外はまだ明るくはない。決して、暗いとはいえない。

まばたく。猫が鳴く。

聞く。

彼らはいま、忙しい。彼らの会話が連鎖し、それは、音楽であることをやめてしまった音の群れのたてた音楽のように聞こえる。

意味がわからない言葉は、つねに音楽のように聞こえる。

初めて人の自殺するのを見たのは大学生のときだった。18歳だった。東京に出てきたばかりだった。その歳の11月に会う、圭輔とはまだ出会ってはいなかった。雨上がりの、6月の、いつか。

覚えていた。大気の湿った、しかし、不快ではない気配。濡れた風。湿気た髪の毛。女たちが大気を罵り、わたしはいちいち彼女たちの髪の毛に見向きする趣味はなかった。

多摩市にある大学の校舎の、3号館と5号館と6号館が作った、谷間の薄暗い庭地を、水溜りを避けながら川村幸人と歩いた。幸人は、学年は同じだったが、2歳年上だった。なにを話していたのかなど、覚えていないどころか、その時でさえ、殆ど聞いていないに等しかったが、わたしはその音声を耳にいれ、意味を聞き取る努力などすることさえなく、ただ、その甘ったれた音声を楽しんだ。不意に、女が小さく叫んだ。

危機感は感じさせなかった。コーフカップを、ひっくり返してしまいそうになった、そんな声だったが、振り向くと6号館の前を、男がさかさまに落ちていた。空中に、暴れることさえなく、見た、と、そう思った瞬間には、男は頭をアスファルトに砕かせていた。

音がした。その一瞬。そして、一気に周囲は音響に包まれる。喚声を立て、誰かが駆け寄り、眼を逸らし、駆け寄りかけて立ち止まり、逃げ出し、誰かを呼びに行き、走り、騒ぎ、わめき、歩き、足を止め、言葉を失い、言葉を発し、罵るような声立ち、悲鳴を上げた女が後を向いて眼を覆う。

砕けた頭の残骸と、血、脳漿。それが作った、黒ずんだ、しかし、その色彩がまぎれも無い赤だということを明示してしまう、それら。

しかるべき、人だかりさえ集められない。…それは、あまりにも穢く、残酷な肉体の残骸に過ぎなかったから。

吊い言葉さえ、想いつきはしなかった。「…北島。…ねえ、…ね。」声。その声が、自分を呼んでいることには気付いていた。それは幸人だった。

真っ青な顔をして、…本当に、比喩ではない青い色彩を顔にやや斑にさらして、「逃げよう。」北島は言った。

トイレの前で、幸人を待った。少し歩いただけで、何も言わずに走り出し、駆け込んだのだった。個室の中で何をしているのか、予想はついた。痛々しい、嘔吐するノイズが、そして吐瀉物が便器を汚す音が、切れ切れに聞こえてきた。

時間を持て余す。トイレに入って、手を洗った。顔を洗ってみ、鏡を見る。濡れた、美しい男がいる。長く頬にかかった、やわらかすぎない髪の毛が、少しだけ濡れていた。洗面台に唾を吐いて、水を流し、老いさらばえた、鏡の中の美しい男。18歳の、老醜に塗れた穢らしい美青年。…うんざりする。

貧血気味の、個室から出てきたばかりの幸人が、ふらつきながらわたしに礼を言い、詫びを入れ、そして、「北島、ああいうの、平気なんだ…」言った。「ああいうの？」

「ああいうの。…そう、俺、駄目なんだよね。」

穢らしい、と、わたしは思った。二十代のころも、十代のころも、三十代のころも、いつも。しなだれかかってくる発情した女たちという暖かな発熱体のおびただしい湿気が、ではなく、その髪の毛の発散する汗の匂いを、宇宙空間で醗酵させて、無機物にしてしまったような執拗な匂いが、ではなく、その本質的に病んでいる救いようのない矛盾した内面、…家畜的な女王様、みじめな生存様態が、ではなく、とにかく、わたし自身が。

わたしが美しいことは知っている。そして、わたしはわたしの救いようのない醜さが、もはや、我慢できない。重力に支配された、どうしようもない廃棄物のような、存在としての存在。

わたしは腐っている。わたしは壊れ物で、失敗作で、でたらめで、ぶさいくな、成れの果てだ。わたしは、先天的に穢い。他人のことは知ったことではない。

19歳の天津寄圭輔が、わたしの乳首を口に含んで、舌の先で一瞬もてあそんだあと、（…その息。そのかすかに口で笑ったような、）前歯の先で、（息がかかって、わたしは）…痛い。

そう、彼が咬む前につぶやいてしまう。

圭輔が、わたしの乳首をやさしく咬んだ。そして、鼻にたった笑いの息が、ふたたび、わたしの胸の皮膚にふれ、…気持ちいい？そう、彼が言おうとしていることは知っている。

知っている。なにもかも。ぜんぶ、知っていた。

温度。圭輔の。

なにもかも、わたしにはわかった。圭輔もまた、なにもかも、わかっているに違いなかった。なにも、わかりはしないのだが、それにもかかわらず、もはやなにも、謎めいた暗さなどどこにもないことを。すべてが見えていて、そして、すべてが明るく、清潔でさえあった。…感じるのだった。

圭輔の皮膚の、温度。そして、その触感。ふれあう、ということ。匂う。嗅ぐ。体の匂い。太も

もに圭輔の《それ》の触感がある。温度とともに。

わたしの体中は感じようとした。彼の、骨格を。筋肉の微かな動きを。産毛の気配を。それら、すべてを。

休日の陽光。カーテンの向こうに。わたしと圭輔の裸の部分に、光が、ときに、じかにふれる。光。温度を伴って。19歳になったばかりの、わたしの《それ》はもう、完全に充血して、なにかの刺激を与えられることだけを求めている。

殺しちゃいたい時がある。圭輔はそう言ってわたしを振り向き見た。微笑みながら。眼に触れるものすべてをいつくしむような、その眼差しで。八月の松涛公園。樹木が匂った。

舐めた。ときに扇情的な上目遣いをくれながら、圭輔は、からかうように乳首を舐め続け、固まって行く乳首を、わたしは一瞬、無意味に恥じた。

…お前を。まじ。…ときどき。…ぜんぶ、ぶっ壊れちゃわないかなって。

乳首に、圭輔の唾液で濡れた、その感覚があって、…匂い。唾液の匂い。鼻を近付ければ、その匂いさえするに違いない。

お前だけじゃなくって、もう、全部。ぜんぶの、世界の、せかいの、全部。…

圭輔の匂い。圭輔に穢される。わたしは穢い。もっと、と想った。もっと、穢してごらん。

…ねえ。もっと。



…ねえ、お前、壊す側？ 守る側？ 言った圭輔に、あのとき、意味わかんないよ、お前。そう言って笑い、わたしは、背後の子供連れのお金持ちたちに、わざと見せびらかすように、彼を抱きしめた。30半ばくらいの女は、単純に、戸惑って、眼を逸らすしかなかった。子どもに不機嫌な声を、無意味に立てて。

はやく。と想う。もっと、はやく。わざと圭輔がじらすたびに。さっさと射精してしまいたかった。一度射精さえしてしまえば、何に突き動かされるわけでもなく、いつまでも、ささやきあい、息遣い、見つめあい、じゃれあう細やかな時間だけが経過していけるのに。…ねえ、と、わたしがなにを求めているか、圭輔だって気付いているに違いなかった。

《常用薬》のおかげで、圭輔は長い。普通ではないから。

腕の中で、夏の、汗ばんだ圭輔の体臭を吸い込んだ。松涛公園の桜の木は、いうまでもなく、緑の大木として、その荒くれた無骨な樹肌を日差しに曝した。

《それ》の先端と、《それ》の先端を、かすかに、いたずらをするようにこすりつけ、お互いの《それ》で、お互いの《それ》を感じあう。いちばん敏感な部分で。粘った体液に濡らされ、ときに、指先も触れて仕舞う。見つめ合ったまま、唇を合わせる。唇。圭輔のそれ。やわらかく、押しつぶされて、舌が、舌にふれた。舌がこんなに湿っているものだったことに、驚く。最初から我慢する気など何もなかったわたしが、ほんのささいな刺激に射精して仕舞ったときに、圭輔は鼻から、いつくしむような笑い声を立てて、それでも唇を離そうとはしない。

圭輔の指先をも、わたしは穢した。

愛は水商売の女だったし、その当時の用語でいわゆる《太客》、少数の富裕層の、いくばくかの固定客をしか持たない、そして実際にはからだを彼らに与えている、ようするに水商売という名の娼婦、だったので、給料以外のお小遣いで生計を立てていたし、店に出勤する以外のプライベートの《顧客フォロー》、ようするにホテル通いに忙しかった。

顧客たちにとっては、ときに手首を切って仕舞うあやうさが、愛の固有の魅力だったのかも知れない。自分の娘だったら嘆かわしく、自分の妻だったら持て余してしまう彼女の悪癖は、子飼いの娼婦としてなら、またとない媚態をかたちづくる。わたしは、彼女がそのことをさえ、ちゃん

と意識していることに気付いていた。

だれも、そして自分自身さえも、愛を《娼婦》としてはみなさなかった。とはいえ、やっていることは《娼婦》そのものだということは、誰もが知っていた。彼女の周囲の女たちは、彼女のことを誰とでも寝る女だと言い、客にやらせて金を取っている穢い女だと言ったが、わたしには、それは倒錯的な批判にしか聞こえなかった。

《娼婦》が、誰とでも寝ることなど、当たり前だろう？ そして、金を取ることも。

実質的には、わたしも、ホストだった限りにおいて、同じ人種に過ぎなかった。「解像数、ちょういいの、…これ。」鈴木保奈美、と名乗ったその40を少し超えた女が言った。その偽名しか、女は名乗ろうとしなかった。その、元になった女優とは、もちろん似ても似つかなかった。

わたしの《それ》を、当時最先端の最新機種携帯電話でなんども撮影した。「真咲のって、ちょう綺麗。…」…男娼。ようするに、男娼。「…好き？」

「ちょう好き。」…ねえ、つかんでみて。《保奈美》が言った。「自分でするみたいに。…」痩せぎすの、拒食症の「オナニーするみたいに、」《保奈美》。グッチと、「…ね？」エルメスと、シャネルと、時々ヴィトン。

わたしはホテルの部屋の壁際に立って、ベッドライトだけに照らされた空間の中で、全裸を曝す。《保奈美》は執拗なほど、自分のからだを見せたがらない。着衣のまま、ひざまづいて、自分の鼻の先に曝された《それ》に、ときに息をさえ吹きかけてみせながら、わざと恥らいながら笑い、「…ね？」…なに？

写真を撮り、撮った写真をときに見せ、〇〇にも見せていい？ 店によくつれてくる、彼女の下僕のような女友達の名前を出して、…あいつ、妬いちゃうかな？

「好き？」…いつも、妬くの。あいつ。「好きなの？」

「なにが？」彼女はわたしの声を聞き、耳に確認し、見詰め、言った。

「わたしのこと。…好き？」…ほしいんでしょ？

嘘、つかなくていいよ。

声を立てて、《保奈美》は笑った。自分が吐いた言葉に笑ったのだ。自分が、いま、していることの、どうしようもない、救いようの無い滑稽さに。「《奈美》が、じゃないの？…《奈美》自身が、ほしがってんじゃない？」

「…知ってた？」笑う。わたしは、いま、とても優しい目で、彼女を見ている。そんな事は、知っている。「…舐めたげる。」

まるで、アダルト・ビデオの女優たちのように、舌を出し、這わせ、唇を擦り付けて、唾液をたらし、啜え、口のかたちを変形させながら、鼻からあえぎ声のようなものをわざと立て、頬ずりし、上目遣いに見詰め、…ねえ、好き？ 言った。「フェラ、好き？」

「好きだよ」

「誰の？」…みんなにやらせてるんでしょ？ …こういうこと。

「《奈美》の。」

「《奈美》のだけ？」

「《奈美》のだけ」

「…だけ？」

「だけ。」

「いきそう？」

「やばいよ」

「いって」…ねえ、いっていいよ。知っているはずなのに。わたしが、彼女では射精できないことなど。でたらめな言い訳さえつけずに、適当に、いつも途中でやめてしまうことなど。

金だけがとりえの、見苦しい女。

その金だって、どこでどうして作ったのかも知れず、いつまで続くかわかりはしない。

…圭輔も抱かれているだろうか？ 今夜、誰かに。そう思った。さびしくはない。悲しくも。

それはそれでよかった。たいしたことではない。美しいものは、触れられなければならない。人々は、触れずには、おけないのだから。たとえ、穢らしい舌と口蓋であっても。…圭輔の体に、いま、誰かの唾液が、匂いをつけただろうか？

「もう、我慢できない？」…ねえ、我慢できないの？ 涙ぐんだように潤んだ瞳孔をひらきっぱなしにした《保奈美》が早口に、ひとり語散るような疑問形をつぶやき続ける。

自分のスカーフでわたしに目隠しして、ベッドの上、仰向けのわたしの上で腰を使う。髪の毛の、色気づいたプラスチック製品のような匂いがする。声をたてる。わざとなのか、本当なのかわからない。あーあーい、あーい、いーあーあーんーん。…ばか、もう、ばか、と、わたしか、自分か、だれか、それとも単なる口癖なのか、罵り声を繰り返す。

射精しないわたしの《それ》を、彼女の体液だけが穢す。

なぜ、彼女と結婚したのだろうか？

ベトナムで、ベトナム人の彼女と？… Đhồ Thị Trang ドー・ティ・チャン この褐色の彼女と？ 褐色の肌の30歳になったばかりの女は、わたしのからだに絡みつくように腕と、足を乗せ、寝息を立て、夜が、壁の向こうで静かに崩壊して行く。知ってる。あざやかな、朝焼けさえその片

隅に広げて、全体としては、いつの間にか黒は青に侵食され、白み、内側から崩壊して行くように、青に敗北して行く。

音もなく。

壁の向こうで。

Trang が寝返りを打つ。



10歳のとき、ふいに、自分の口臭が感じられたときに、わたしはわたしの恐ろしいほどの穢さに気付いた。

おとなたちはわたしを特別扱った。早めにお祓いに行ったほうがいい。叔母が言った。この子は早死にするに違いない。…美しすぎる。普通ではない。

母親はあとで、さんざん陰口を言った。ののしり、罵倒し、縁起でもない、と。二週間後、わたしは近所の神社でお祓いを受けていた。

覚醒剤でパクられて、2年の刑期を終えて出てきた25歳の圭輔は、まるで別人のようだった。刑務所の中で、老いさらばえてしまったような気がした。とはいえ、わたしはそのやつれた醜さを、愛した。

美しかった、のだろうか？ …その、言葉の意味を、わたしはまだ知らないのかも知れなかった。圭輔はうす穢れ、疲れ果て、燃えつくし、もはや、何も残っていなかった。

生きてさえいない、わたしはそう思った。

「…よかった。」わたしが部屋のドアを開いて、渋谷の、わたしが借りていたマンションに入れてやった時、圭輔は、崩れ落ちそうに脱力して、笑い、彼は安堵していた。「会えて、よかった。」

夕方の5時を過ぎていた。わたしはもうホストではなかったし、建設会社で働いていたし、設計士だった。日曜日だった。窓の外の夕焼けて行く空の色彩が、わたしの背後に見えているはずだった。

「アドレス、変えてなくて、よかったよ。」わたしは言った。わたしは微笑んでいた。その眼差しを、いつくしむような、と、圭輔は思ったに違いない。

圭輔と連絡など取ってはいなかった。取る気もなかった。三年前？ …四年前？ 圭輔がパクられたことは、七斗から聞いた。水商売の女二人と、覚醒剤を《キメ》て、セックス、あるいは交尾、…獣じみた、そして獣が絶対にすることは無いヒト固有の交尾、を楽しんでいるときに、踏み込まれたのだ、と言った。なぜ、あんなことをしたのだろう。女など、愛せもしないくせに。もっとも、週に何日も、そのご乱交を繰り返しながら、彼が楽しんでいたのは、クスリ以外のなものでもなかったには違いない。

それに、女にからだを与えてやるのが、わたしたちの仕事でもあった。

圭輔に未来があるとは想えなかった。売人や、入手ルートや、他に回してやった友人や、そういった、繋がり的一切に関して、洗いざらい口を割ってしまった圭輔には。

警察にとっては上客だったに違いない。

そして、警察も裁判所も、その後の生活の面倒を見てくれるわけではない。圭輔は捨て、捨てられ、いま、目の前にいた。

圭輔からのi-mailなど、無視してもよかった。《ひさしぶり。》午前十時。《…出てきた。》わたしは部屋にいた。《いろいろ、迷惑かけたけど…》眺めがよかった。《会える？》まばたく。《…無理かな？》窓越しの、午前の光。

そのとき、ブルーノ・マデルナを聞いていた。後期の、フルートのための協奏曲の、どれか。あのころ、好きだった。

終わったの？

なにが？

刑期。…お前の。

…ん、…うん。

終わったんだ。

終わった。今日、出て来た。

なにも、責めはしない。わたしは、なにも、心配してやりもしない。終わった。おれたちは、もう終わった。もう、そしてシャワーのお湯を出して、圭輔のからだを洗ってやる。抱きついてくる圭輔の、《それ》がわたしの《それ》とかさなり、《それら》。

《それら》が不器用に重なり合って、お互いに、お互いの存在にびっくりしあっているような、そんなきまづい時間が《それ》に漂って仕舞うとき、わたしはいつも声を立てて笑いそうになる。

。

圭輔は、わたしを求めていた。

終わっている。お前は、もう、終わってる。おれも、もう、終わってる。…知ってた？もう、終わりだよ。それら、声の無意味な断片が、わたしの頭の中にだけつぶやかれ、からだを清潔なバス・タオルで拭いてやったあと、わたしは圭輔を、ベッドの上に四つんばいにさせた。駄目だよ、…駄目だって。圭輔の声を聞く。恥らって、そしてわたしたちは微笑みあう。

圭輔の尻に頬ずりする。わたしは彼の肛門に舌を這わせた。まだ、水滴に濡れていた。

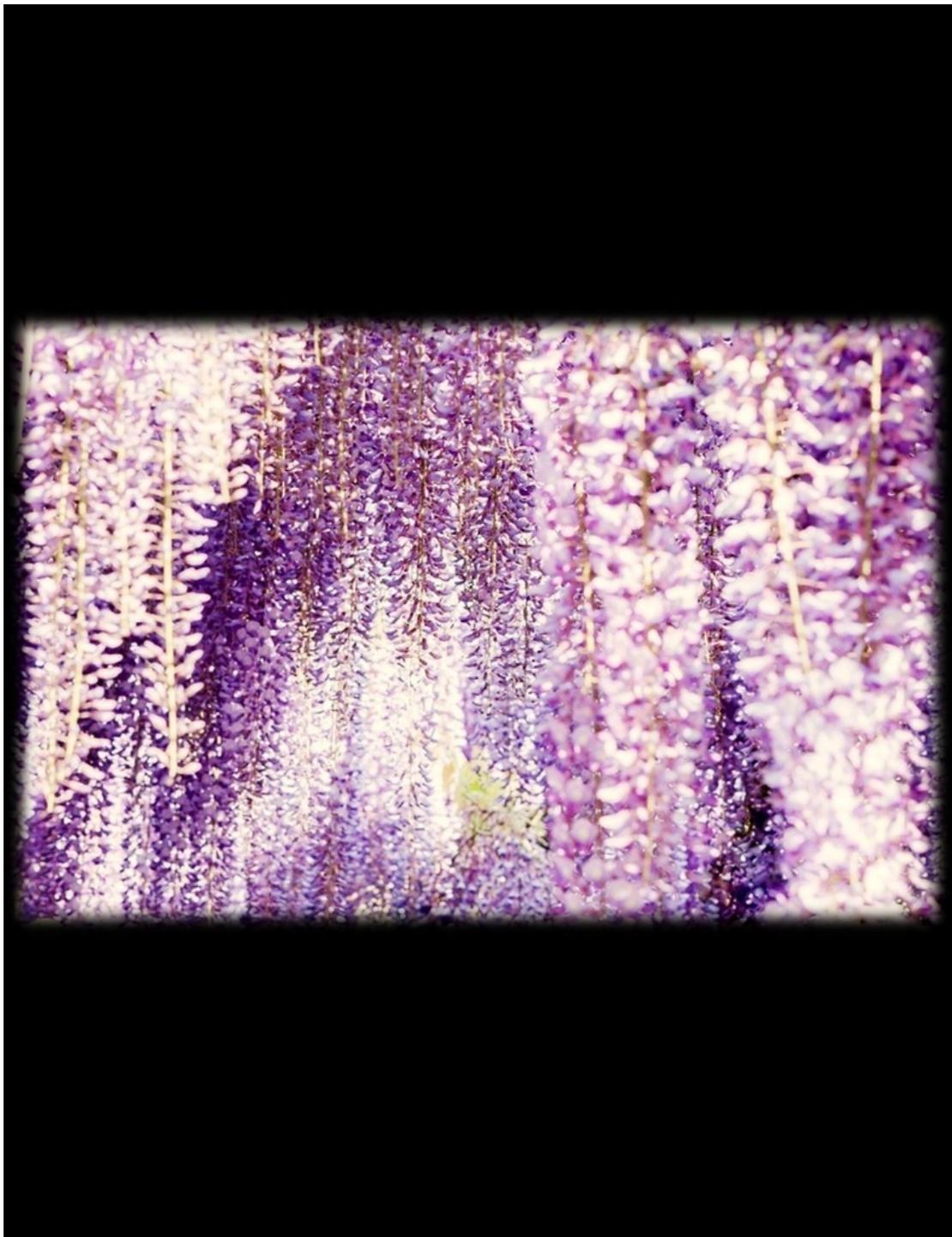
幸人の近親相姦。幸子という妹との。

それを告白されたのは、幸人と会って半年ばかりしたとき、幸子の誕生日のホームパーティに呼ばれたときのことだった。「…気持ち悪いでしょ？」わたしを自分の部屋に上げ、二人だけになって、ことの詳細を、実は、…と、彼は語り出す。いつも、誰でもそうだ。秘密を語るときには。実は、…お前だけには、言っとく、…自虐的な、嗜虐的な、露悪的な。わざと、幸人が穢らしく物語を装飾しているのには、すぐに気付いた。

「…穢いよね。…おれたち。」そう言った。

理由はわかる気がする。幸子はなんども、わたしをはにかみながら盗み見していた。妹のそんな眼差しを見ることは初めてだったのかも知れず、いつもそうで、いつもこの告白は繰り返され続

けてきたのかも知れない。無数の、《お前だけには、》の《お前》たちに。
彼の妹を守るために。



雪子、と、ときに名前の漢字変換を間違えてしまいそうなほど、色の白い、いかにもはかなげな女だった。綺麗な女とも、顔立ちが整っているとも、ましてや魅力的ともいえなかったが、悪く言う気にはなれない女だった。

そして、わたしは、大学の友人たちの中で、何人もが幸子を抱いたことを知っている。

サークルで、飲み会で、なにで、かにで。

「…穢いよね?…ごめん。でも、これがほんとのおれなんだ。」幸人が言った。「…おれたち、でも、…ある。」

「気にすんなよ。…いいやつだぜ、」…お前は。と、わたしは言った。

…ね、これなに？

愛は、いつも、ささやくように話した。

なに、これ

ちんちん。言って、わたしは笑った。愛も笑った。わたしは飽きていた。なにに？

やば。…ちんちん？

勃起しないままのわたしの《それ》を両手にもてあそんでみせ、すがりつくように添い寝し、行き場所のない女。

家出を繰り返して、そして両親は彼女を探し続けていた。

ちんちん、やばいね。

「店に来たよ。」麻由香が言った。愛の、同じ店の。いつだったか、雨の日に。愛の姉貴分だったが、「パパのほうが。…一人で。」声を立てて笑い、声をひそめ、耳打ちする。からだごと押し付けて、…もうやめてえって。わたしに。…かんべんしてえって。息がかかる。…みせなんかこさせないでえって。「キスしたいの？お前。」わたしは言った。

…したくないから。愛が笑った。

ちんちんに、キスしたいんじゃないの？ わたしは知っている。愛がフェラチオを決してしようとしないうの。かたくななまでに。

ささやくような笑い声がたち続けた。

大人になったら、どうするのだろう？

ちんちん、すきだろ？ わたしは言って、愛は声を立てて笑い、好きくないから…大人になったら

。

20歳の愛は、40歳になったら、どうなっているのだろう？

今のまま甘ったれているのだろうか？ からだを譲り渡していない殆どすべての人間に、持て余され、軽蔑され、疎まれ、…その

肉体が、欲望の用をさえたさなくなったら？

だれの？

愛は言った。これは、だれのちんちんですか？

…お前のだよ？

わたしの？

この、きちゃんないの、わたしのなの？

やーだ。わたしのなの？ これ。ねー、

…ね？

老いさらばえる前に、死んだほうがいい。

どうせ、生きてはいけないから。



ベトナム。ホー・チ・ミン市に来たとき、はじめてここが、あの《サイゴン》だということを知った。

所属している建築会社が、ここに支社をたちあげたときに。必ずしも意味があるビジネス展開だとは想えなかった。とはいえ、彼らは、…わたしたちは、増殖し続けなければ生きていけなかった。わたしたちは増殖し、他なる増殖を阻止しようとし、ときに成功し、ときに失敗する。わたしたちは増殖する。Lê Đăng Cảnh レ・ダン・カン という名のベトナム人側の責任者が、そして彼は文法的には流暢な日本語を話したが、発音がめちゃくちゃだった。

そこにいきたいでゆえすか？

どこに？

そうでゆえす。

…さいごん？

さいごん？

さいごん。さーごん。さいごんぐ…「あー、」Cảnhは顔をほころばせ、なぜ、ヒトはやっと何かを了解したとき、一瞬、相手をあざけるような顔つきをしてしまうのだろう？人種を問わず。

— Sài Gòn…

彼はその都市の本当の発音をしてみせ、床をつま先で二三度蹴り、「ここでゆえす」言った。ここが、その、サイゴンですよ。旧名、サイゴン。…ね？

わたしは40歳になっていた。ちょうど、来月、サイゴン解放の40周年記念日で、こころ辺はパーティです、とCảnhは言った。

十代の頃の、圭輔のあの滑らかな背中の中の匂いを、わたしは何度嗅いだらう？

微かに汗ばんだ匂い、若干の獣臭さ。体液を一度あわ立ててから、発行させて、砂糖を振ったような匂い。二十歳になる前の日に、わたしは彼を四つんばいにさせ、一瞬、見惚れた。

朝の、日差しがカーテン越しに差す。やわらかな色彩に満たされる。朝。…まだ何にも穢されていない、色彩の息吹がある。

それが見せかけのものに過ぎないことなど知っている。まだ、シャワーさえ浴びていない、起きぬけのわたしたちのからだは汗ばみ、昨日の夜の、…数時間ほど前の、行為の残骸をへばりつかせ、匂う。

たぶん。わたしも匂う。自分の匂いに麻痺した嗅覚がついに嗅ぎ出さない、わたしの臭気。

ときに、女たちが息をひそめて、わたしに気付かれないように嗅ぎ取って行くもの。発情装置たち。美しく、でたらめな、哺乳類たちの発情様式。

たわむれに、Tシャツで腕を、後ろ手に縛ってみる。見詰め合って、わたしたちは笑う。こういう

の好きなの？

…かもね。無意味な行為で、時間の隙間を埋めようとする。わたしたちは愛し合っていたが、愛するという行為が、つまりはどんな行為で、なにをすればいいのか、わたしたちは、まだ、知らない。

膣口と陰茎の卵子細胞覚醒のための行為に逃げることは出来ない。どこにも、卵子など形さえなく、生命、…愛の結晶としてお茶を濁したあの生産物を生み出しえる可能性は一瞬たりともない。

たんぱく質たちの戯れ。

…見た。白い反射光が、圭輔が息遣うたびにその皮膚を舐め、流れ、くずれる。

わたしは耳を澄ます。その、二つの息遣い、そしてこっちを向いた圭輔の眼差しに、…見ないで

。

穢いよ。

つぶやいて仕舞いそうになる。

指を立てた。

左手の、薬指。

舐める。

指を伸ばし、その指の腹が、ゆっくりと圭輔の肌を撫ぜる。湿気た触感。潤った、それ。すこしだけべたついていて、皮膚。

つきだされた尻のカーブをなぞる。太ももに落ち、もう一度上がって、…くすぐったいって。

きれい。…すげえ、綺麗。

見詰め合って交わされる、重ならない会話。睾丸のかたちをなぞる。陰毛の毛羽立ちに触れて、一瞬、指先は戸惑った。

わたしたちはまだ、何も知らない。愛するということが、どういう行為を言うのか？

無慈悲なまでに、…そして、ん、と圭輔が言った、鼻でだけ。わたしの指先が、前触れもなく肛門に侵入したときに。

体内の体温。

指先の触感。

…すき？

わたしは言い、圭輔は答えないままに、抜き出した指先に付着した匂いを嗅ぐ。

老いさらばえた腐臭さえ漂う。

熱帯の日差しがアスファルトに反射する。

わたしは息遣う。ベトナム人たちが、わたしを目で追った。わたしは美しい。そんな事は知っている。

わたしが立ち寄ったあらゆる場所で、人々が、男たちさえ、現地の言葉で、露骨にわたしの噂をしているのは、すぐに察知された。

日本よりあけすけな眼差しがわたしを捉え、…ハンサム、と、カフェの美しくはない女が必死に媚を作って、一言だけ言って、わたしにコーヒーを提供した。

眼差し。…見ればいい。もっと。

もっと、もっと、見ればいい。あなたたちの視線の前で、わたしは腐り落ちて行く。腐臭さえたてながら。わたしは穢い。

もっと近くで。至近距離で。鼻さえ、触れそうなほどの。

…なんだったら、オナニーでも？

どう？

35歳になった愛が、どこかの風俗店に働いているらしいのは、フェイス・ブックで知った。

突然来た友達申請の、ポートレートは花の画像だった。記憶にない名前。聞いたことの無い名前。

杉原美香。

開くと、つぶやくような短文の、《しんじられるかしんじられないかわかんねーから しんじてやってるだけなのに って、おもった。》意味不明な文字しかない記事の群れの中に、《あなたのことがすきなんか どうかなんか わかるわけねーじゃんすきなんだから》見たこともない老けた40女の写真が数枚だけ確認できた。

あきらかに個室風俗の個室の中で、《はつねつしそうで こわいから ねる。》ある老いさらばえた女が、めがめをかけた丸顔の男と二人でピースをして、《きょうははれた。あしたはあめだ。あいたい。しにたい。》笑っていた。男は、まるで外国人のように見えた。日本人に違いないのだが、《しあわせになるくすりはかれしのえがおなんだってゆうじじつにきづいてしまった》妙な違和感ばかりを感じさせる顔立ちだった。

理由はわからない。

女の眼差しは、うつろだった。《すきすきこうせんでてるけーおんなうざころす》光の加減でそう見えただけだったのかも知れない。口元には、《きてきてきて きてきてきて》あきらかな生気がみなぎっていた。

薄暗い写真だった。

暗い照明の中で、《くらくてごめんな やみちゅうごめんな しんでくれるから やんでごめんな》無理やりとったポートレート。

《今日も、出勤だよ！》キャプションはそれだけ。めずらしく、日本語の意味がわかる文章だった。

良識を疑う。見せていいものと悪いものがあるだろう、と。

風俗の個室の中の、ポートレート。フェイス・ブックはなにを検閲しているのだろうか？

何もしないでフェイスブックを閉じたあと、それが愛だったことに気付いた。

愛の本名など知らなかったし、二十年近く、連絡など取っていなかった。愛の本名が、美香だったことを、20年近くたって、知ったことになる。何の感慨もない。もっとも、それも源氏名なのかもしれない。

あのめがねの男は、愛=美香のリスト・カットの始末を、喜んでしてくれるのだろうか？

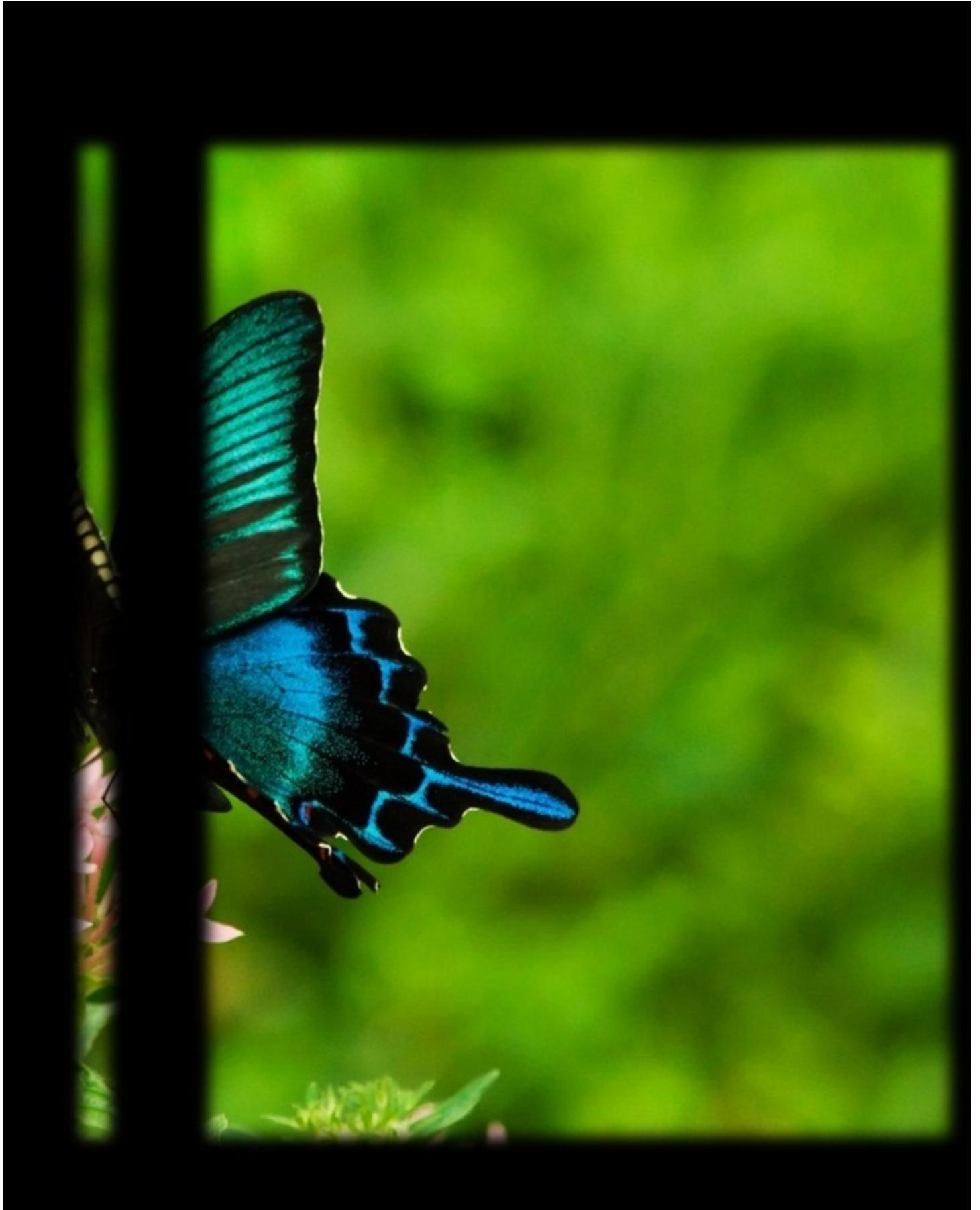
血を拭き取り、病院に連れて行くか、手当てをしてやるか。

そして抱きしめてやるか、これ見よがしな虐待を加えてやるのか。

不意に、胸が苦しく、いますぐに自分の心臓を取り出して、握りつぶして仕舞いたくなる。

穢らしい。

世界。…この、あまりにも穢らしい、増殖する細胞と分子の集合体たちの、穢れた世界。



わたしと Cánh が同じ歳だったことを知った。それは9月の、二人だけの飲み会だった。もちろん、日本料理屋。日本人街のレタントン通りの、日本人資本の、従業員に日本語が通じる、日本国内と同じ料金を取る店。Cánh の好みだった。

もちろん、現地の貨幣価値から言えば、一握りの富裕層しか通えない、非現実的な店舗に過ぎない。

そのわりには、客の半数以上を、現地の人間が占めていたので、それが、社会主義国家、あるいは、アジアの国家、の当然の姿なのかも知れない。店内はざわめく。歓談する人々の声。

たんようういでしょ。

…なに？

たんようび。「…ありがとう」わたしは Cánh にお礼を言い、彼にだけ、自分の誕生日を教えていたことを思い出した。「北島さん、誕生日パーティ、するなって言うから…」

「…だって、めんどくさいもん」

「だめよ。…」じゃんたんようううわいわあないちよ。「…そうだね。ベトナムでは、みんな、誕生日は、ちゃんと祝うの？」

「もちろん」Cánh がうなずき、わたしは瓶のサッポロ・ビールを Cánh についでやった。「盛大だよ。」

…そう。いいね。

「むかし、わたしが子どもの頃は、すごく貧しかった。…ベトナムはね、とても貧しくて。」なひいもーりませんでゆえった「何もありませんでした。でも、…」微笑みながら、わたしは Cánh の話を聞く。「でもね、誕生日だけは、みんなでお祝いする。」相槌を打ち、目線が合う。

「これ、いいことです。…ね？」向こうの席に座った女。「…でも、日本は、あんまりそうじゃないね。もっとも、」ベトナム人の、やや肥満した「日本は日本だからね。」あきらかな富裕層の中年女。「…先進国でしょ？」目の前の男は「むかし、わたしたちの、…なに？」主人に違いない。「わたしたちの、」女がわたしを見る。「同じ歳の、」覗き見するように「同じ、…」

「…世代。」わたしが言うと、陽気な Cánh は指を鳴らす。

「そう、世代。わたしたちの世代は貧しくて、建築の勉強なんて、本を読むだけ。」椅子に深くもたれ、わたしは「教科書だけ、…ね？」Cánh の左耳の向こうの「先生は黒板に書いて、」女を見詰めた。「この機械はこうやって、」女はあきらかに戸惑い、「…あの機械は…、」惑って、「ほら、」女は「なにも物はないから、」眼を伏せるしかない。「ぜんぶ説明だけ。」何回も、伺うように「ロシアとか、中国とか、」覗き見しながら。「外国に留学して、」はゆいめてえほおんぐものおきかい、「はじめて本物の機械、見ました。…ね？」見ろ、もっと。「でも、いま、ね、」見たいんだろう？「Lap Top, …Smart phone, …mobile, …ね。」従業員が新しい皿を提供し「だんだんと、ね、」うざったいほどの「better, better, better, もっとね、」媚態を作る。その「better に。ね。…もっと、」顔に、「もっと better.」体中に「将来は、ね。」媚態を。「日本、来たから。」征服は浴衣。「ベトナムに。」安っぽい、「タイランドとか、」水色の「マレーシアとか、」薄手の。「日本来たら、」…腐る。「よくなるから。」視線の中で、「…ね。もっと、」公然と、「もっと、ね」

「…おれ、会社、辞めようかな、って。」…え？と、あっけに取られた Cánh が、かすかに目を剥いて、わたしを見ていた。ぢよずいたんでゆえしか「…どうしたんですか？」

「ここで、暮らすよ。」

「ここ？」…そう、と、わたしはうなづき、ややあって、一瞬、声を立てて笑った。

わたしは腐って行く。

公共の視線の中で。しずかに。美しいわたしは、穢らしく、腐り堕ちていく。

眼差しが、わたしの穢れた自己崩壊を見つめて、媚を売る。

わたしは本気だった。とっさに口走っただけに過ぎなかったものの。

生活に困ることなどありえない。わたしは知っている。人間は必ず、美しいものに対しては本質的無力で、そして、自分だけを愛するものに対して、女は絶対的に無力だ。

まるで奴隷のように。最上位の女王様はつねに、最下層の奴隷だ。

まるで、隷従するためだけに生まれてきたかのように。

34歳の幸人が父親を殺したことを知ったのは、警察を通してだった。なにを裏付けなければならないのかは知らない。いずれにしても、彼らはわたしの証言をほしがった。

大学を出てから、まったく交流はなかった。32歳のわたしが、34歳の父親殺しの犯罪者と、大学時代に交友関係があったことをすぐさま照会してしまえる警察に、一瞬に、苦い恐怖感のようなものを感じた。

要するに、彼らが聞いたかったのは、幸人と幸子の関係の裏づけと、事実関係の照会、らしかった。

誰も彼もが、根も葉もない勝手なことばかり言うので、もう、收拾がつかないんですよ、と、50代の小柄な警官が言った。

二人組みの、もう一人の方は長身で、若い。絵に描いたような、コンビのように想えた。

一瞬あって、わたしは不意に声を立てて笑いそうになった。ちょっとまって。…そうだったら、なぜ、あなたはわたしだけが、根も葉もある言葉を吐く、と知っているんですか？ もしそうでないとしたら、あなたはみずから進んで更に新しい根も葉もない言葉を無意味に収集しようとしているにすぎない。…わかりますか？

わたしは微笑んで、大変ですね。そう言った。

わたしは彼らを部屋に上げて、そしてコーヒーを入れようとしたが、たかが一杯のコーヒーをかたくなに断った。

水だけを差し出したが、手にも触れようとはしない。

かりに、彼らの母親くらいの年配の女が、そんな流儀は日本人の礼儀にもとる、と、言い出したらどうするのだろうか？ 出されたものくらいちゃんといただけ、と。

幸人の母親はもう死んでいたらしかった。彼が二十五歳のときに。祖母はまだ存命だが、老人介護施設に入っている。祖父は数年前に癌で死んだ。父親は幸人が殺した。妹は幸人が逮捕拘留された日に、部屋で首を吊って死んでいた。参考尋問の出頭の時刻に現れなかったので、不審に想った警官が発見した。

父親の死体は悲惨だった。言い争ったあと、殴り合い、柱に頭をぶつけて、しゃがみこんだ父親の頭に、椅子を何度も打ちつけたらしかった。木製の椅子の残骸が血まみれで転がり、脳漿交じりの血は部屋中に飛散した。

頭部はもはや、残骸しか残ってはいなかった。

どんな表情をして、彼はそれをやったのか、あたりまえだが、警官は何も言わなかった。終わったあと、どんな表情をしたのか？ それを聞いてみたかった。

きっかけは、30過ぎても結婚しない、彼ら二人をなじったことだった。彼らが、そういう関係であることは、父親も知っていた。その2月、犯行の半年前、結婚の承認をもとられてもいた。もちろん、父親は、自分の承認以前に、法律の承認さえ取れないじゃないかと、一蹴した。

父親の死を幸子は見ていた。

彼女が、どんなふうに、それを見ていたのか、警察は、もちろん語って聞かせてはくれない。

事が終わったあと、隣のうちに幸子行って、兄が、父を殺してしまいました。通報してくださいませんか？ …そう言った。

なぜ、自分でしないのか、その久田扶美香という名の、二十八歳の奥さんは訝った。旦那のほうは、まだ帰ってきていなかった。7月7日。夕方6時53分。あと7分で、7が三つ揃った。

「幸人くん、関係を告白されたことはあります。」

「…なんと？」

「愛し合っている、と。」

「どんな風に。」

「穢れた関係だと。彼と妹は、ね。…それだけ。」

「それだけ。」

「そう、それだけ。」

「それ以外には？」

「あとは、わたしの推測にしかありませんよ。」

「いいですよ。参考までに」

「…ひっくり返しちゃうんですけど、」

「…ええ。」

「プラトニックだったんじゃないですか？」

「プラトニック？」

「そう。…純潔を守った、関係。…肉体関係は、なし。」

「どうして？」

「いや。推測ですよ。さっき言ったように。感覚的に、としか言えない。けど、肉体関係があるとは思えなかった。」

「そう…」

「おれには、ですよ。わたしには、…ね。」

「そう…。でも、失礼ですが、…あなた様の経歴、ですけどね」年上の警官が、わたしに気を使いながら言う。「5年くらい、ホスト？ されてますね。歌舞伎町。大学生のとき、…ね？ 大学を出てからも、一年くらい。就職浪人してたから、…ですか？」

「…ええ。よくご存知ですね。」

「少しだけ、耳にしたので…」全部吐いちまえよ、知ってることを、と、その胸倉をつかんで、壁に頭をたたきつけてやりたくなった。

警官は、必死に、わたしに気を使っていた。「そういう経験の、カン、ですか？」

「…ええ。そうかもしれませんね。ただ、…どっちにしても、彼らはそんな深い関係じゃないと想う。…ぼくは、ね。あくまでも。妹っ子っていうんですか？ シスコンっていうか、そういう義人が、過保護にかわいがってただけ、なんじゃないですか？ …そんな気さえ、しますね。基本的にはただの仲良し兄妹だった、と。たとえ、それが、ぼくらみたいな他人の眼にどう見えたかはともかく。義人君自体が、何でか知らないけど、それらしいことを匂わしたりしてたことも、事実には違いないんだけど。彼ら、そうじゃないよ。デキてないですよ。」それは嘘だった。招待された幸子の誕生日パーティで、幸子はあきらかに女だった。幸人に、まるで自分の夫であるかのような、必要以上にか弱く、わがままな目線を送った。あなたは永遠にわたしの幸せのために生きなければならない。なぜなら、わたしがあなたの幸せのために生きてあげるのだから、と、あたりまえのように永遠の義務を確信された容赦のない眼差し。

ときに、わたしに執拗に色目を使いながら、幸子は、彼女が幸人のものであることを、隠そうともしていなかった。その眼差し、仕草さ、話しかける言葉遣いに、ほんの少しの、身体的な距離感に。

娘の誕生日のホームパーティを、友人たちを招待して開くくらいなのだから、幸人たちの父親は資産家だったに違いない。世田谷の戸建て住宅も広々とした、いかにも金の掛かっていそうな住

居だった。

犬を飼っていた。レトリバー。世慣れした、礼儀正しく、やさしげな父親だった。母親は若干の陰のある人だったが、おとなしく無口なタイプの間が一樣に感じさせる類のそれ、にすぎない。

あんな家庭で、どうして、と、不思議な違和感さえ感じた。

色気づいた、あの兄妹のほうが、むしろ、いびつだった。

水。…ふいに、わたしは口走った。「水、飲まないんですか？」

警官は一瞬、いぶかしげな顔をし、わたしを見た。

自分のくちばしった言葉の無意味さに、ふと、わたしは微笑んだ。

寝返りを打った妻の腕がわたしの胸元に覆いかぶさって、耳元に寝息がかかり、思い出した。わたしは、夢を見ていた。いまさっきまで。大陸のどこかで、誰かがクーデターを起こした。爆弾が飛び交って、さまざまなヒトの、さまざまな肉体の断片が、血を撒き散らしながら散乱した。匂い。空爆の匂い。戦争。たぶん、きっと、おそらくは、戦争が起こるに違いないのかもしれないわけにはいかないわけでもない、…そうかもしれない。

戦場に雪が降っている。降り積もることの無い雪。

降っても、降っても、地に触れた瞬間に溶ける。視界の向こうまで、真っ白い降雪がすきまないほど、埋め尽くしているというのに。

その瞬間、気付いた。これは、雪ではない、と。なにか、もっと別のもの。ヒトたちが、滅びて仕舞ったことを知らせるために降っているに過ぎない、と。

…弔う気さえ、なくせいに。

わたしたちは、再び殺しあうかもしれない。あるいは、わたしたいがヒトで、ヒトであるわたしたちなのだとしたら、わたしたちはヒトとして既に、もう、戦争を続けている。この地球上の数箇所で。さまざまな紛争地帯。暴動。ときに、空爆。わたしたちは、戦争をするだろう。そう思った。夢の中で。わたしたちは、わたしたちが滅びて仕舞うまで殺しあうだろう。

いつか、と、目覚めたまどろみの中で、空を巨大な爆弾が焼き尽くすだろう。わたしは目を開く。その、焦げた匂いが、あきらかな現実としてわたしの鼻をくすぐった。見つめる。わたしたちは絶滅していた。すでに。

…無慈悲なまでに、繁殖をやめないわたしたちは。

2018.04.30.-05.01

Seno-Lê Ma

Quartet
花々の散乱

花々が散乱していた。…どうして？僕は、失った。こんなにも…、と、思わず、息を言葉を飲んで、失った。見る。

風景

心の中の？

なに？

目の前の風景

見たこともない

その

風景を

見ようよ

いつか

二人で

誰も、まだ

見たことのない

理沙が僕の肩に後から寄りかかって、「墮ろしちゃった。」なに？

風景を



振り向くのも待たずに、何を、言った、「…子ども。」…言ってるの？そのいま、言葉を、君は。
。（俺たちの？）

見ようよ

聞いた瞬間に（俺、たちの？）僕は想い出した。夢。明け方に見た、その。意識の（お前、）遠い…夢。向こうで（それって、）俺の、かすかに、俺たちの？ 夢。（なに？）俺の？見渡す限りの俺、たちの？ 海が（誰の？）俺、向うにまで お前、遠く（俺、たちの？）そして、それって、その海に なに？ 果てさえないことは、誰の？ 知っていた。…、たちの？ 海が、俺？桜の花々に、…ねえ、その表面だけ、…なの？埋め尽くされていた。たった一本の桜の樹木のとっぺんに、器用に立った僕は、足元から舞い散り続ける際限もない花々のこまやかな乱舞を見る。きまぐれで、自由で、好き勝手な、その。「…ねえ」言葉を失ったままの、僕を、なぐさめようとしたのに違いなかった。「まだ、誰も見たこともない風景を、見ようよ。」理沙が言った。耳元に、ささやいて。

19歳の理沙が伸ばした手を見た。空間に泳ぐように、一瞬停滞し、光。腕を差す、斜めの。

風景

寝返りを打つ、見る。その、僕は、細い、見た。褐色の。指先にピンクのネイル。

心の中の？

一瞬だけ言葉を（意識さえも、）失った気が（たぶん。）した。（むしろ、）

なに？

なにも、言いたいことなどなかったのに。なんで？

目の前の風景

感じられた理沙の体温が、なぜ、そして、無意味に僕は 問う。ふれ続けていた。だれに？ 彼女の肌に。

目の前に

見たこともない

雨の音がして、知っていた。それは 恥ずべき人間であること。目を閉じていたときからも、自分自身が。その（土砂降りの）音を。

やがて

その

（雨の）誰かも（その音を）聞いているのは（僕は）知っていた。（一人で）どこかで。（聞き

ていた。)ここではないどこか。理沙の傍らに横たわって。

拡がった

風景を

理沙は？寝息を立て続けて。女たち。聞いただけだろうか？眠りの向うで。僕は、嘘だらけの、彼女たちを虚言にまみれたキャバクラの女王。傷つけることによって、

その

見ようよ

僕は(理沙の)聞く。(虚言、)生きた。その音を。ホスト。雨の、(自分の出身さえどうせ、偽って)音。嘘しか言わないのなら、意識の向う、いっそ、(すべてを)

風景を

いつか

むしろ、息遣う。何も言わなければいいのに。理沙、(偽装する。)褐色の肌に光が、(やわらかい)雨の日のそれ。(光)耳を澄まして。(…その。)…もっと。

いま

二人で

お互いの心臓の音が、(父親は死んだ。)聞こえるくらいに、(母親は精神病院にいる。)その、

もはや

彼女、(兄弟はいない。)美しい発熱体の。(初体験は12歳。)体温。(わたし、未来が見えるの。)行為の後に、(…知ってた?)その日、朝の。

僕たちは

いつか

光。(無意味な嘘)

記憶しようとさえせずに

見ようよ

愛すること。(意味さえない)愛。し、合う。愛。

…し、合うこと。

むしろ

まだ、誰も

その日、お互いに、(嘘。)僕は、わたしは、(無意味な、)悲しかった。(それらの)理沙を、なぜ?その、決まってる。お互いが、君を…し、合うこと。

誰も、まだ

愛、し、理沙が、わたしは、…し、合うこと。愛。彼女は、理沙を、合う。わたしを。愛。…し、君を

…し、君と合うこと。

愛し合うこと

見たことのない

ふれる。

君と。

あまりにも高飛車な理沙は、客にさえ、憎まれるようにして愛された。むしろ、彼女を壊したいがために、彼らは、彼女を求めている気さえした。

ふれる。

君と。



理沙が死んだとき、会った理沙の母親を見て、わたしは自分を恥じたものだった。葬式のために。純白の花々の立てた匂いの向う、気品のある悲しみというたたくまい自体が高貴さを持って表現されたような、その、美しさに。わたしは自分の脱色された髪の毛をさえ恥じなければならなかった。あるいは、理沙はその存在そのものを。理沙は父親似だった。

ふれる。

君と。

風景の中で

初めて理沙を抱いたとき、妙にパーツがあわない違和感を拭えない僕を、理沙はごまかす気さえなくて、

いくつかの眼差しが見いだした

上から覆いかぶさったままに僕の頭を撫で続けるのだが、知ってる。…ねえ、たぶん。不意に、

その

そう言った僕に、君の痛みは。「なに？」と、もはや、問い返すのでさえなくて、ただ、不安そうな眼差しをくれた。その瞬間に、

風景

彼女が初めてだったに違いないことに気付いた。何度目かの家出の後で、

心の中の？

16歳から風俗店で働いて、それをなかったことにして、いま（そのとき）、歌舞伎町のキャバクラで働いている（…た）理沙、この19歳の、

目の前の風

…なぜ？と、僕はつぶやく代わりに、「幸せ？」言った。ばか。ばかじゃね？

見たこともない

そう言って、声を立てて笑い、理沙は、そして、体で客を呼んでいると、陰口をされながら、自分でも、

その

店の女たちにそれを公言してみせながら。

「なんか、変なもん、食べちゃった？」

風景を

昨日は久美子さんを抱いた。40過ぎの。

「お前以外、なにも食ってない。まだ。」

見ようよ

明日は、誰？また、理沙なの？理沙だけを愛していた。

「ばか。」

いつか

いつでも、男言葉でしか話さない、理沙。

「おまえ、俺以外食ったら、殺されるからね。」

二人で

なぜ？そんなこと、聞きもなかった。

「俺に。」

いつか

一度だって。

理沙の髪をかき上げて、その瞬間に、理沙は親指の先をかるく咬んで見せたが、

見ようよ

僕は笑う。声を立てないままに。

「安心しろよ。お前以外、…は、さ。

まだ、誰も

もはや、女じゃないからね。」

守られることなどない約束。お互いに、どこかですでに気付いている。

誰も、まだ

「…知ってた。」理沙が言った。表情もないままに、眼差しにだけ何かを訴えて。

見たことのない

何を訴えたいのか、たぶん、何を、自分さえ見てるの？知らない。

君は、間違いなく、いま。きっと。

風景を

髪の毛が胸にかかり、悲しかった。乱れ、僕は、音。心、息遣われた、乱れ、音を。悲しかった。眼差しがだって、捉えた（わたしの、その）壁の失って仕舞ったから。白いクロス、

見ようよ

君を。（眼差しが）その、やがては（見向きもしないままに）聞き取られる僕は、すべての（捉えたのは、）君の音、すべてを静かな、（…存在。）失って、静寂を拒否した、（理沙の、）喪失して、ピアニッシモですらない、（存在、）

まだ、誰も…

君は、しずかな、（いま、…そのとき、いつも、そのあとで、）もはや、音の氾濫。もう、（胸に頭をあずけた理沙は）聞いた。二度と、（うたたね、）音。（その、）

いつか

なぜ、壊れたの？

命の？（浅い眠り。）心臓の。血が流れる、その。…吐息を、（聞いて。）吐く、（心臓の、その）ような、（聞こえる？）その、音を。（眠りの中でさえ。）

僕たちは、

滅びるまでの

まだ世界は滅びない。いつ滅びるのは知らない。それはいまではない。あるいは。（理沙が、振り向いて、わたしの耳たぶを指先にはじき）

君は

あいだに

まだ僕は死なない。いまではない。いつか、そして、まだ僕は生き続けて、

滅びるまでのあいだに

抱いた。（声を立てて笑った4月に、雪の日の夢を見た。）

なぜ？

僕たちが

腕に。（記憶が、）理沙を。

滅びるまでの

その寝息を（わたしには、記憶が）聞き、（あって、）滅びたこととすでに等価な、（…記憶の存在。）世界の存在。

滅びるまでのあいだの

（そして自分勝手に、）わたしそのもの。（書き換えてしまうのだった。）

僕たちは存在した。（…僕たちは。いつでも）生きとし生けるもの。…する。

あいだの、いつか

存在。命さえないもの。…する。存在。し、存在。

やがて壊滅する

…する。雨が降った。

前に

存在する

もうすぐやむに違いなかった。…記憶。

……………、その

もの

想いだす。理沙。もう二十年近く前の。

すべて

その間の時間はどこに？わたしだけが、老いさらばえていき、もはや世界から（を、）失われた（ってしまった）理沙は老いさらばえはしない。

壊れる寸前の

タンソニャット空港でタンと言う男に三人の少女を渡す。あとはタンが中国まで輸送するはずだった。斜めに照った熱帯の夕暮れの光が、タンを瞬かせ、一瞬声を立てて笑ってしまったわたしに、責めるような眼差しをくれた。人身売買。中国人たちに、ベトナムの少女を売りさばく。タンはベトナム人だった。プライドも何もありません。中国人の金に魂を売った売国奴ども。わたしは？

売国奴ども

一番色の白い少女がくしゃみをし、一瞬、うかがうような目線をわたしにくれた後、

人間のくず

はにかんで見せた。必死に媚態を示して。垢抜けない顔で。買受先の中国人の趣味を疑った。

生きる資格もない

なぜ？僕を残して？

豚

君は、

空が

無意味に引き裂かれた、雲から切れ目さえ差し、想いだす、もうすぐ雨がやむ。そのことを、僕は予感し、雨。

色彩の記憶だけ残して

雨がやんだら、ご飯を食べに行く。理沙が言った。その時に、十分前、僕は瞬き、眠りに着く前に、どこ、行く？ささやくように、何、食べる？耳元に、出来損ないのホスト。半ば、町に眠りに落ちながら。のさばるしか喪失。できないわたしは存在。老いさらばえて行く。光。

砕け散る前に

崩壊した肌を撫ぜた。老いさらばえたわたしはサイゴンにいた。40歳を越えて。ベトナム。老いさらばえて。熱帯の町。その温度。熱気。太陽への距離。

いつか

24歳のとき、緋村と言う偽名を名乗っていたやくざを殺して仕舞ったあとで、結局は、わたしを引き取ったのは緋村が所属していた組だった。犯罪行為すらなかったことにして。

滅びるまでの

さんざん私に制裁を加えたあとで、「命だけはくれてやる」と加藤裕樹が耳元に言った眼差しに、わたしを最初から仲間引き込むつもりだったことに気付いた。

あいだに

十年以上前の、旧防衛庁跡地の近くで、東京タワーでも見ればいいのに、と想った。加藤の《店》の中で。彼らに前歯と鼻の軟骨を折られながら。

僕たちが

…そうでなければ、こんなところに連れ込むはずもなかった。覚醒剤の一時保管場所。

僕たちが滅びる

わたしに密告されればそれで終わりだった。かといって、わたしを殺すためには明らかに不向きだった。

滅びるまでの

加藤の水商売の女名義で借りている《店》ワンルームの。古い。壁は白い。ざらついたクロス。空きだらけの、古びた、

僕たちが滅びるまでのあいだの

元分譲型マンション。タイル張りの外壁をさえクラックが這った。

あいだの、いつか

小指の骨が、取り囲んだ男たちの誰かのかかたとへし折られたとき、わたしは死んで行く緋村を懐かしく想った。思い出しさえしなかったのに。びっくりした顔のまま表情を痙攣させ、

やがて壊滅する

この顔のまま死んで行くに違い、存在自体が無意味だったに違い男の末路に、むしろその母親をその、

衰れんだ。

いつか、と想った。

前に



わたしは加藤たちを皆殺しにするだろう。

誓いを立てるまでもない。彼らに吸われるべき空気などなく、重力にへばりついている資格さえない。

……………、その

なに笑ってん？ヒグマのような、沖縄生まれの北橋真治が言った。わたしは、自分が笑っていたのに気付いた。

「こいつ、壊れてもたんかな？」ヒグマ。

……………、その

ヒグマの声を、視線の端の向うで聞いた。自分の、立てられ続けた、いじけたような笑い声を、…気狂いになった。自分で、とうとう、聞いていた。人間のくずの、俺は。と、

壊れる寸前の

思った瞬間に、匂いを思い出した。緋村から奪った改造拳銃を緋村の唇に押し当てて、（開けるかな、と想ったのだった。わたしは、そのとき、彼が）引き金を（口を。）引いたときの（あるいは、）

空が

、匂った。（誰でも）煙が立って、（口をあけて、啜めるのではないかと。）匂う。右腕に（むしろ、自分から。）銃の反動があって（目の前のその、何かを）、

色彩の記憶だけ残して

気付いた。（食べさせてもらうときのように）自分がそのとき、逆腕で発砲していたことに。血が向こう側に吹き飛んだ。そして、いわゆる脳漿と呼ばれるもの、そして

砕け散る前に

あるいは、骨と筋肉と贅肉等の残骸。

声を聞く。ヒグマの声。そして、体中に走る痛み。彼らの、殴打の。

例えば

潤んだ眼差しがわたしを捉え、嫉妬したチャンが机を叩いた。カフェの、アルミ製の丸いテーブルが音を立て、「…変態。」

あの。例えば、

ね？言った、チャンは、そしてわたしはその日本語のなまりを聞く。ベトナム人の女はみんな変態だから。チャンは言って、

あの、

わたしが笑った意味にさえ気付かずに、…じゃ、チャンも？…じゃない？

海が

「違う。」それはちがいます。

干上がろうとする前に

「どうして？」それわちがいまっ

滅びかけた

私は違いますけど、わたしわちがいまっけじょベトナム人の女はみんな変態です。気をつけてください。

ふてくされた、わたしをなじる顔を曝して、

壊れかけの

小さく立てた舌打ちが、いつも、チャンは嗅ぐ。わたしを抱くときに、わたしに抱かれるときにいつも、体臭。

太陽に

愛するものの存在を確認する。動物的な、確認される。容赦のない、自分の野蛮な、存在さえ、いじましい、含めて、繊細な、チャンは、その仕草に確認した。わたしは身を曝した。

飲み込まれて仕舞う前に

愛された自分、および愛した自分、および、愛される自分、および、愛する自分、および、そしてそれらを現在のうちに。

焼き尽くされる直前にさえも

嗅ぎ取られた。何が？わたしの存在理由が。あるいは。瘦せたチャンの褐色の肌。寄せられた唇の、かすかな口臭を嗅いだ。

海さえも

世界はまだ滅びてはいない。いまもなお。…なぜ？

焼き尽くされて仕舞う

理沙が目覚めないように頭を撫でて、髪の毛の触感。それらが手のひらに、…指。

その前に

なげる。その。指先。

いつか

唇をふれた。

僕たちは

ときに、そっと。

見いださなければならない

笑い、…なんで？

僕たちの

無視されたわたしの問いかけはそのままに、…なに？

風景を

眼差し。彼女はまばたく。

記憶の中にさえ

どうして？

残りほしないものの

僕を視線に捉えたままに。

誰も

沈黙と同じ強度で、僕たちは饒舌になる。その、無効性をすでに気づき果てながら、セックスさえ、すでに、意味を失う。

記憶しようとさえしない

無意味な交配。重なり合うこと。子どもを作りあいたいわけでもなく、何かが確認できるわけでもないことさえ、すでになんども感づかれていながら、僕は気付いたものだった。

その

理沙がわざと立てた声の向うに見た彼女の風景に。

君の

光。点在する、夜の空間の光。

伸ばされた腕に

光。瞬き、チャン、匂いを嗅ぎ続けるチャン。なにが欲しいの？あなたのわたしの。なにが欲しいの？なにが？わたしは。

光が差した

女たちが、わたしを目で追った。そのたびに、チャンはこれ見よがしに身を寄せて、「いつ、結婚しますか？」

斜めに

「誰が？」

「わたしと、…」

「まだ早いよ」

「日本へ帰りますか？」日本へ。一人で帰って仕舞いますね。さようなら。もう会いませんね？サイゴンの外れの、砂埃にまみれた路面。

窓越しの陽光に

低層家屋のつらなり。

僕は

クンクリート造の。

まばたく

トタン屋根が錆びる。

聞いた

「母親、殺そうとしたこと、あんの」

露店のブンと言う麺料理の店で

「だれが？」

チャンが豚肉の骨を

「決まってんじゃない…」

しゃぶった。骨ごとぶち込まれた

「お前？」

豚肉。指を舐めながら、その時、不意に

「他にいんの？」

チャンの唇でたった、じゅるっ、

「いない」

と、いう音に、わたしは一瞬注意をそらされ…え？

「でしょ？」

聞き逃してしまったチャンの言葉を

「なんで？」

聞き返す。もう一度、…何ですか？じゅるっ、と

「忘れた」

チャンの唇は音を立て、何か？

「ばか」

何か、ありましたか？いきなり、嘔き出して

「怒った？」

笑って仕舞ったわたしを、むしろ

「だったら話すなって」

咎めるような眼差しを…ねえ、

「てか、嫌いだったから」

どうしたの？不安を隠して、どうすいまったか。わたしに

「だれが？」

くれ続けるチャンのその

「俺。」

行き場のない、行き止まりの表情が

「…だれ？」

さらにわたしを笑わせ、…何が、

「母親」

あったの？ごめん、言った。わたしは…何が

「そっか」

起こったの？「愛してるよ」…え？

「首絞めたんだよ。俺」

わたしの言葉に耳を疑い、チャンは

「マジ？」

…何？…ねえ、何？

「後から。」…なんか、と、言った。理沙は、後ろから見てたらさ、と、いかにもか弱げになって、あるじゃん？そういうの。そういう、…なに？風情？感じ、みたいな？そういうの。なんか、…さ、触りたくなかった。で、締めたくなかった。殺したいわけじゃなくて。触って、締めたいの。…なに？壊れてんのかな？俺の頭。

「やっと気付いた？」…ばか、と、お前、殺されたい？声を立てて笑い、理沙は、そして僕は見詰めた。おもしろくもないのに笑い転げてみせる理沙。ベッドの上の、終わったばかりの体に、もうすぐ午前十一時になる、カーテン越しの日が当たる。その、それを。

聞いた

「棄てます。」チャンが言った。耳元に、ささやくように早口に、「棄てますね？」…なんで？

ささやかな音

君の、寝息

わたしの声を聞く、「なんで、僕の事が好きですか？」なんで？チャンの眼差しが、なじるように戸惑い、違う。

チャンが咳き込んでしまった

彼女は言っていた。わたしが欲しい言葉はそんな言葉ではありません。

不意の

見る

永遠。

ささやかな

寝返りを打った

陳腐なもの。

大気の乱れ

君の

永遠に、繰り返され続ける、約束された永遠。誓われ続け、日差しに灼かれるアスファルトが照る。

腕の上に

白く、滅びて行く。老いさらばえ、わたしだけが。

静止した光

滅びてしまいたい。いますぐに。

その温度。僕が

手を伸ばしたら、空の青の向うにまで手が届きそうな。

感じはしなかった

その、色彩の消滅した黒さに。

その

空。

温度

熱帯の日差し。

あたたかな

空が美しく晴れているとき、どうして？怒りに駆られる。どうして、なにかにもが、こんなにも、なぜ、いま、こんなにももろく、もはや無骨で、絶望的なほどに理不尽なまでに凶太く、美しいのか。そして儂いのか。

僕は

言葉をなんの正当性すらない。失った。

ただ

壊してしまいたい。あるいは、

悲しい

壊されてしまいたい。理沙。

ただ

飛び立つ事。

たんなる

ビルの屋上から。

世界そのものさえ一瞬にして崩壊して仕舞いそうな悲しみ

敵だらけ女だった。

客さえも。ときに。

どうして？

客に（…八木沼。）クスリのカクテルを飲まされて、体内に薬をすり込まされる。覚醒剤。単なるセックスのための道具。

声さえ、失って行く

衝動？…なぜ。朝の十時に。墮ちて行く足の向こうに見たはずの空。（「死ぬようなことじゃないよな、…」おどつきながら、）

今や

見下ろされた空の逆光の向うに、宇宙には星が。（八木沼は言った。すべてが、わたしは微笑んで、埋葬さえもが「かも、ね。」…そう、終わったかも、な。後で。言った。）

君を

たとえ、（…なぜ？）昼間でも、あの空の青を突き破りさえすれば、星に会えることなど人類の誰もが知っている。

愛するときには

寝息。…理沙の、そして、目を何度も閉じ、眠りに落ちる努力をする。

群がった

どうしようもなく、冴えた目が、そして聞き取られる寝息を音楽のように聴くしかない。

呼吸音の

音楽。ジョン・ケージ。圭輔が好きだと言った。わたしが好きだったから。

戯れる

壊す。

束なりが

嘘だった。

ほら、

壊される。

聞こえただけ

クラシックなど、わかったためしがない。

もはや

壊れはて、そして。ましてや。壊れない。

なにも、壊れさえしなかった。

もう、

涙さえ流さない。愛が理沙の死を告げたときも。

なにも

自分のマンションにたどり着いた理沙が管理人に曝した青たんだらけの顔。

愛し合う前に、すべては
語りつくされていた

何人に曝したの。新宿のラブホテルから、初台のマンションまで、道端で、タクシーの中、さまざまなものにすれ違いながら。見下ろした空。

すでに

光の逆光。

いつか

色彩は？

ほら、

その、色彩は？

青。

空間を切るような叫び声を立てて、チャンが私にすがりついた瞬間に、その騒音。（がちゃん、と）

その

なにも（かちゃん、）壊れないまでも。（がじゃん、）

青空の

なに？

チャン、泣きそうな、その。どうしたの？「知らない」言った。「日本語、知りません。…リザード。」とかげ。

壊してごらん

テーブルの足を、トカゲが這っていて、わたしは声を立てて笑い、腕の中でチャンが大袈裟に非難する。ベトナム語で。

目に映るすべて

手が、触れた

従業員を。店を。ベトナムを。やがては世界の存立そのものを。

もっと、やさしく

すべてさえもが、ほら

チャンの下でベトナム語の発音が踊り、わたしは笑う。

すべての…

眼差しがわたしたちを捉えた。

触れてごらん

外国から来たらしい美しい男に保護された、幸福な女。

すべてのものを

いま、そっと

いまだ気付かない。誰もが、すでに滅びていたことに。生まれる前からすでに。

乱れる

生々しく、息遣う。街路樹の、荒々しい樹木の陰を猫が走る。疾走、沈黙した、樹木の強大な生命。

勇気を出して

その存在がふれるすべてを破壊するまで、

撒き散らされ

それらは繁殖する。

触れてごらん

散り散りの

剥きだしの。

君が触れれば

埋め尽くし

生命体。

石ころさえもが

飛び散る

群れる。

輝く

花々の散乱



匂われた、髪の毛の匂い。じゃれつくチャンの立てた嬌声を聞く。想いだす。昼すぎになって目覚めた理沙と、朝ご飯を食べに行く。昼下がりの日差しの下に、振り向いた髪の毛がわたしの二の腕にふれた瞬間に、道玄坂に轟音が響いた。叩き付けるような。その破裂音。トラックが街路樹にぶつかって、横転していた。群がった人々が歓声を立て、救急車はまだ来ない。人だかりの向うに、血痕が見えた。その、アスファルトを穢した黒い色彩。僕が背伸びするのを「行こうよ」理沙は、僕の袖を「やだよ」破ってしまいそうに引く。力づくで立ち去ろうとする理沙の、髪の毛の匂い。わたしはそれを嗅いだ。僕は言う、…待って。後ろ向きのままの、眼をそらした理沙を、わたしは後から抱いた。僕の腕に、理沙の体温があった。…見たくない。行こう。理沙が言った。早口に、ささやくように。それは花屋のトラックだった。

大量に積み込まれた花々が、…^{かすみそう}霞想。道玄坂に…薔薇。撒き散らされて、百合。アスファルト
は木蓮。その色彩に…^{あすちるべ}明日散。まみれた。…^{カトレア}華麗人。足元から、…^{ひなげし}雛罌粟。向うまで。…^{ハイビスカス}南国紅
。埋め尽くされた、…^{スイートピー}純愛花。そして匂う。理沙の髪の毛の匂いの向うに、花々のそれ。背後で
悲鳴が立った。男が立ちあがろうとして、血を吐いたらしかった。誰もが、口々に何かを言って
いた。叫ぶように。花々を見詰めた。
その色彩を。
匂う。

2018.05.20.

Seno-Lê Ma

クアラルンプールから経由した羽田行きの飛行機に乗った瞬間にうんざりする。機内中を埋め尽くした日本人たちの群れは、どこまでも、無慈悲なまでに日本人たちにすぎない。舌の上に高速でささやくような日本語がしずかな機内に、時に文字通りささやかれ、それらは、ただ、彼らが日本人である証拠だけを明示した。あと何時間この空間を共有していなければならないのだろう、と、わたし自身があくまでも彼らの一部に過ぎないにもかかわらず、なにか惨めな腹立たしさにいたたまれなくさせられる。自分たちが知っている日本と言う彼ら固有の概念らしきものに、がんじがらめにされた自分たち自身の奴隷たち。インド人らしい目鼻立ちのくっきりとした、もう若くはない男たちの4人くらいが群れて、機内の隅で、彼らの全体を伺うように、そして目を逸らす。彼らにとって、さまざま人種とさまざま国籍とさまざまな言語種が入り乱れた空港のロビーや、他の外国以上に、あからさにこの機内の中は異国の地に他ならないはずだった。5年ぶりで羽田に下りると、周辺の空港の機材の釘一本の表情さえもが、完全に日本人のように見えて、いますぐに、どこでもいいから《外国》に逃げ出したい気がする。目を逸らしたいほど無残な懐かしさ、というのだろうか。Sim カードは意味不明に高額で、WiFiはつながりにくい。日本人たちにとっては、全く問題ないことなど知っている。彼らはそんなものは使いはしないから。持っけていても意味のないスマホをそれでも取り出すが、時間を確認するくらいの用しか成さない。出迎えロビーで一瞬立ちどくと、彼女の姿はすぐに目に留まった。



私 小説

あれから、たしかに、すこし歳を取った。とはいえ、大人になった、というくらいなのだろうか。うっとうしいほどに潤んだ黒目がちな眼差しが、すぐにわたしを捉えて、彼女に近づいくわたしの表情に浮かんだ笑顔を、彼女はどんな風に見たのだろうか？屈託のない笑顔だったのか、疲れた笑顔だったのか、悲しげな笑顔だったのか、無理に作った笑顔だったのか。彼女と会うのも当然、5年ぶりだったが、そんな気もしない。30を超えてから、一年も二年も、気が付けば経って仕舞っているのだから、それは彼女のせいではなくて、単に、自分の時間の感覚のせいだったのかも知れなかったし、…あ、

と、その、ふいに口先で呟かれた、彼女のそれは、わたしは彼女のその声が聞こえた気がした。音声は聞こえなかった。その唇の先だけの、確かに、それはささやかれたのだった。空港の、ささやきと呟きの無数に連なった騒音の騒然としたふしだらな散乱の中に。そのくちびると眼差しはまだ近くはない距離に隔たっていたものの、それは、そしてそれが私のすぐ近くで。その一瞬に、その音声の、彼女の体臭さえもがにおわれた気がした。小柄な彼女の、わたしを捉えた眼差しが、開かれた瞳孔のうちに、わたしを捉えながら通り過ぎてしまつて、向こうのほうを、にも拘らず何か見えていたわけではなくて、そんな、立ったままの彼女の、まぶたも閉ざされないまま失心したような表情は、ただ、彼女に顔の上にだけ固定されていた。やがて、わざと、意図的にすれすれの距離に近づいたわたしの「何？」彼女は、「どうしたの？」その久しぶりに聞いたはずのわたしの肉声を聞いていたには違いないが、答えもないままに、彼女の名前は波奈子^{はなこ}と^{はなこ}いった。そのまま、わたしを上目遣いに見つめた無言の、そしてややあって、「お久しぶりです。」その瞬間に、正気づいた彼女の眼差しに、わたしはふたたび捕らえられたのだった。「元気でした？」

わたしは四十歳を超えていた。ほんの子供のころに老けて見えた類の人間の常で、いまや、年齢不詳の人間だった。若々しく、無国籍風の端整ささえあって、深いほりの影に、甘い憂いがさすときに、人は既に魅了されている自分に逆らえはしない。誰がわたしを美しいと、諦めたように言った。十五歳のころから、身長も体重も含めて、ほとんど変わっていないわたしは、明らかに出来損ないの冗談のような子供だった。夢見られた夢の溜息に命を与えたような、そんな男らしく美しい顔だちの十二歳児に、美しさのかけらをさえ認める馬鹿はいない。見世物のような、滑稽な奇形児に過ぎなかった。いずれにせよ、いま、歳を言えば、例外なく驚かれた。賛嘆の眼差しと共に。ちょうど十二歳年下の彼女と並んで立っても、誰の目にも怪しまれるべき必然はなかった。頭一つ分身長の低い彼女は、ちょうどいくらいの、年上の彼氏を出迎えた女に、波奈子は見えたにちがいない。彼女と並んで立つとき、なにか、どうしようもなく惨めな気分をぬぐえない。いつも。自分が、自分の部屋の中で、独りだけでいつくしみ、愛でて、秘密にしていた宝物を、たとえば小学校のホームルームでいきなり友達の前開陳されたような。頬を赤

らめた友達の、優しい共感のこもった、わかるよ、うん、わかる、そうだよ、という同意の
声が、むしろ無数の針のようにわたしのやわらかい羞恥心を攻め立てる。波奈子は、そんな、恥
ずかしい《夢の女》だった。つややかな髪の毛が何の混じりけもなくずっと伸び、小作りな頭
部に、端正な、整いすぎた気がするほどに整った顔がある。おおきな、夢見るような目は、いつ
もその潤いの気配を失うことなく、憂いをさえ帯びているが、裏切りか偽りのように活気のある
、黒目がちな目がまっすぐに、既に自分を見つめ続けていたのに気づく。…いいんだよ。そのま
まで、いいんだよ。そんな、やさしく理不尽な許しとともに。下唇だけが、上唇に比べて倍ちか
く肉付いて、ふっくらと、その重量感が、唐突に、無意味な物思いにふけらせた。目に付くのは
肌の色は黒さ。日に灼けた、というよりも、生まれつきの褐色だと言うことが、すぐにわかる、
はっきりと深く定着した、はりのある色彩だった。いろぐろ、という言葉のいびつな響きを思い
出す。ほそく、ながく、華奢な首筋から、繊細な鎖骨のくぼみは、痛々しくはないかすかな、や
さしい肉の隆起を、そして、その、しまった、やわらかな二の腕に挟まれて、直視すること自体
を恥じなければならぬ気がしたほどに豊満な胸のふくらみが突然、現れる。美しく、贅沢な。
くびれすぎない優しい、しかし急激な曲線を腹部から下腹部、そして腰の周りが描いて、大き
すぎないものの、たっぷりした厚みの臀部がその上半身を見事に支えた。そこから、ふとももに
かけての単純な線が、どこまで、正確な曲線を描き、描かれた、美しいその明晰さは、足首の嘘
のような細さにいって、彼女は、まるで中国の古い帝国の男たちが纏足の女たちに夢見たよう
な、鳩か、それでなければ妊婦を思わせる歩き方をした。小柄なだけに、ひれふすような、圧倒
する美しさではなくて、いじましく、ひっそりと愛好され、愛玩される慰みもののようなかわいら
しさ。夢の、あるいは、正確に言ってしまえば、いじましい自慰の道具のような女。ふたたび、
顔に視線を戻すと、見られることに慣れ、そして、盗み見られることにはさらに慣れきっている
彼女の、見つめる視線を留保なく許し、見つめたことにはいかなる咎をも課さない、単純な微笑
みに、目線は絡み合うのだった。そのときには、その鼻梁のちょうど真ん中、つまり、顔の真ん
中に刻印された目立つほくろという、あるいは、このものの美しさの端正さそのものを大きく
損なっているのかも知れない大きな傷も、この、愛玩人形の、特異な個性に過ぎなくされる。そ
の《いろぐろ》も。美しさの破綻、ではなく、破綻した美しさ、ではなく、何かを意図的に乱す
技術によってのみ、初めて完全に描き出され獲る類の美しさ。ほくろは、その位置のせいで、何
かの象徴なのか、兆しなのか、聞き取れない言葉、読み取れない記号として、何かを予感させよ
うとしているように見えた。それを何人の男たちが、彼女が少女だったころから、その意味を見
出そうとして、彼女に見つめられ、許されながら、それを見つめ、盗み見てきたのだろう。同姓
に毛嫌いされる類の女には違いないが、頭の切れる彼女が、彼女たちに嫉妬させる隙を与えな
かった。同性たちは周囲に群れていた。彼女は男には興味がないと言い、言われ、実際、そうだ
った。美の濫費。…美の、らんぴ？例えば、人類が減んだ後に、崩壊したルーブルの廃墟の、打
ち破れた天井から漏れさす光に照らさせて、ミロのヴィーナスが、やわらかい日差しの中に、誰
のためにでもなくその美しい半裸体を曝し続けるとしたら、それは、地球が崩壊するまでの、あ
るいは、ほんの一瞬ののかも知れない永劫に近い時間の中で、泣き伏さねばならないほどの孤独
な美しさに違い。美の濫費、それは、そのような美しさに与えられるもので、もちろん、手淫か
たてに男たちが夢見た発情の対象に対して与えられるべきものではない。みじめな愛玩動物の波
奈子のような。発情的、ということ。女性美の起源であって、そしてその根拠をなしながら、美
、と呼ばれた瞬間に、半ばつばを吐きながら穢れものとして捨象され、辱められてしまうもの。
周囲の人々の、眼差しを一瞬間にしてしまうのは、彼女の、その無数の手淫の気配を、わたしが
恥じたからに違いない。あるいは、わたしを見つめる彼女の眼差しの表情に、五年間の時間の経
過が一切感じられなかったからなのか。単に、久しぶりに帰ってきた日本に関して、当然感じざ
るを獲ない既視感に、いまだになれないままだったからなのか。同国人に他ならない日本人た
ちは、わたしの目に、はじめて見る外国人たちのように見え、当たり前だが、彼らのことなど昔
からよく知っているの、この、見慣れない既視感というべき、錯乱した感覚が拭えなかった。
その錯乱は、波奈子に対してさえ、何かの印象をわたしに与えていたに違いなかった。わたしは
彼女に対する裏切り者だった、とは言えた。彼女にまもともな別れも告げずに、ベトナムに行
って、仕事とはいえ、多忙を都合に五年間も帰ってこずに、挙句の果てには、そこで出会った現
地の女性と結婚さえしてしまったのだから。それを彼女に対する裏切りであるという認識にも、
どうしようもない錯乱感が付きまとう。眼鏡を外した乱視の視力が捉えた視界のような。なんど
も彼女はわたしに抱かれたが、彼女がわたしの、彼女はわたしの、女だったことが一度もな
かった。体だけの、あるいは金銭だけの、ともいえない。そこまで、すっきりと合理的で、綺麗な
関係ではなかった。心の柔らかい部分に寄生して、小さく噛み付いて、かすかに、内側にだけ出
血させて、そして、ゆっくりと、いつのまにか、執拗な甘い臭気を立てながら腐っていく、そ
んな、他人にとっては、そして、自分たちにとっても、どうしようもなく不愉快なはずの、希
薄な、執拗な関係。

ホテル、行きますか？と言った。あの、…あ、という声から、そしてその後の一瞬の、気まづい
沈黙の2秒の、それは、やがては、彼女のその声によって断ち切られたのだった。ホテル？と、
わたしは、彼女に自分が宿泊する用のホテルを頼んでおいたことにさえ気付かないまま、…抱き
ますか？と耳元にささやかれたような気がした。単純な、鼻にかかった笑い声をたてて、わたし
を先導する彼女にやや遅れて従い、始めて会ったとき、彼女は22歳だったから、もう十年近い

時間がたったことになる。その十年近い時間を、あるいは、やがては彼女が、一生の中で最も美しかったといわれることになるのかもしれない期間のほとんどすべてを、わたしは彼女に濫費させてしまったのだ。女を口説くのは、趣味のようなものだった。狩猟本能、とはいえない。それは、飢えて、生きるためにするものだから。あるいは、鼠を狩る猫のようなもの、ではあるのかもしれない。すぐにかみ殺しさえせずゆっくりと、咬んでいること、いま、口の中に一個の、さまざまな事情と、さまざま意味と、さまざまな関係性を、それ自身に固有のそれらをいっぱい抱えた小さな生命が、そのすべての権限を奪われ、捧げさせられて、ほそく血を掃きさえしながら首と両手足を伸ばしたままに、表情の一切を失った、透明な絶望にだけ染め上げられた黒目で何かを見つめていた、それがいま自分の口の中にあること、そのどうしようもない快感に恍惚とした、美しく、瀟洒にして、地上のあらゆる生命の中で、もっとも繊細な生き物の一つ。美しい猫たち。初めて抱いたとき、それは、彼女の、《夢のような》気配が想像させたような、まさに《夢の》行為で、逆に、ゆえに、予測済みの既視感にさいなまれる退屈さとするすれものだったが、「わたし、」と、行為の後で「彼女ですか？」水を飲み立ち上がったわたしに言った。わたしにだって返す言葉の用意はあった。振り向いて、すぐに言いかけたわたしの口を、まるで手で塞いだかのように、「…じゃ、ないですよ？」ベッドの上で仰向けのまま、放心したように、わざと両手足を投げ出したままの彼女の皮膚が、暗い空間の中で、いよいよ黒く灼けて見えた。太陽に、というよりは、夜の黒さそのものを篡奪してしまったように。「ですよ？」彼女は、そして「怒ってる？」そのわたしの声を、横向きの眼差しに捉え続けたまま、ややあって、首を振った。微笑みもせず。無表情などは決していえない、なにかの兆しをだけ、数えられない複数、明示しながら。「悲しい？」

「ぜんぜん」

「うれしい？」

「ぜんぜん」

「嫌？」

「まさか」

「じゃ、」と、わたしの「何？」声に、彼女はふいに一度だけまばたいたが、「…好き。」と言った。いいね、と、鼻の浅いところでわたしが立てたその優しい笑い声を、わたしも、彼女も、聞き逃しはしなかった。「きれいな答え。」美しい、と、言って笑ったわたしを、そして彼女は目を閉じた。意外だったのは、彼女が初めてだったことだった。男好きのする女。例えば十代のうちだけにでも、あの、盛りの付いた、どれだけの眼差しに見つめられ、盗み見られて、それらの眼差しが、彼女を裸に剥いて、夢見て、あるいは、穢して仕舞ったのだろうか？言葉は途切れたまま、水を飲むきっかけも失って、ただ、壁にもたれたまま彼女を見つめたわたしに、やがて、彼女は言った。「初めてじゃないですよ。わたし」くすくすと、いたずらの結果を見て嘖き出したような音を立てて笑うのを、「ひでえな。だましたの？」戯れに笑いながらわたしが言ったのを、彼女は聞いたのだろうか？「嘘じゃないですよ。初めてじゃないですよ」目を閉たまま、そのとき、幼児のように身を丸めて寝転がった彼女の横向きの、わたしは髪の毛をかき上げてやった。「ひどいじゃん。おれ以外のやつに抱かれてやったの？」わたしの戯れの誹謗の「いつ？」ささやかれた音声を彼女は聞く。「12歳。」そう言ったとき、目を開いて、その言葉をわたしに眼差し越しに焼き付けようと望んだのか、彼女は最早、視線を揺らがせさえしなかった。なぜ、そんな嘘を言ったのか、気になった。あるいは、本当なのかも知れない。何か、暗い過去なのかも知れない。とはいえ、わたしには、それらは興味のないことだった。彼女が話し出せば聞いてやるかもしれない。話されない今、それは、存在しない通り過ぎた、いつか誰かが見たかもしれない、忘れられたことだけが知られている風景に過ぎない。

大学を卒業して、ある大手の広告代理店に就職していた彼女が、営業に来た、それが出会った。ビジネス・スーツは、彼女に着られると、悪趣味で扇情的なショーのコスチュームにさえ見えた。そんなくだらないショーに何の悪気もなく出てしまった、純粹で、無垢な少女。それは、わたしが友人とやっていたカフェの中だった。「あなた、成績いいでしょ？」わたしは顔を合わせて、一分後に、冗談めかして言っていた。…まあ、おやじたちが放っておかないよね？天井の扇風機が回った。ゆっくりと、そして真顔で否定するものの、もし、おれが、と思った。彼女だったら、どうだろう？目に付く男の片っ端を、自分のためにこき使ってやるな、と。クレバーな計算と、節度さえあれば、十分に可能だった。それは二十代の頃、ずっとホストだった頃の感覚の名残かも知れなかった。実際に、波奈子は社内で何度も表彰対象になるほどに、成績は優秀だった。そのころ、始まったばかりのフェイスブックで、なんどかタグ付けされたそれらしい他人の記事を見かけた。彼女が、わたしを本気で愛していることには気付いていた。それは、眼差しや、表情や、言葉遣いや、しぐさや、誰も錯誤せず、誰も無視できない、犬が匂い付けして回るような明らかな表示だった。とはいえ、何かを積極的に求めるわけでもない。彼女は、自分が何を求めているのか自分自身にさえわかっていないのではないか、そんな気がした。彼女はわたしの女ではなかった。忘れた頃に、求められるままに体をささげ、忘れた頃に、連絡されるたびに会いに来て、むしろ自分からは何の要求も言わなかった。何の連絡さえも。それでいて、彼女はわたし以外に、彼女の男を作りはしなかった。いかなる意味であっても。もはや、孤独になれて、慣れきった人間が、孤独であることにさえ気付かなくなった、そんな、少しだけやわらかい狂気に近い何かを感じさせる危うさへの親しさを、わたしはやがて感じ始めたのだった。例えば、彼女がふいに切ってしまったわたしの指先に、痛い、と声にならない声帯の振動の波紋をだけ、どこかにならした、その一瞬の表情の、眉の付け根の辺りに。かすかな。微妙な。孤独、と、その概念を彼女が知っているとしたら、それさえもが驚きだったはずだった。常に、人々に噂され、眼差しに捉えられ、夢見られさえしたかも知れない、みじめで派手な存在であるのには違いないのだから。

ホテルに着いて、わたしがベッドに身を投げ出すと、「疲れました？」彼女は「…よね？」まるで、いままでご主人様に手を付けられたことなどない純朴なメイドのような、いつものあの清楚なたたずまいのうちに、「変わんないね。」私の声を「ぜんぜん」聞く。「そう、…ですか？」

「びっくりするくらい」

「そう、…ですね」

「ぜんぶ」髪の毛のつやも、肌のつやも、と、「その瞳の輝き、」わたしは言う、「そのかわいほくろ、」と、彼女の微笑みが、ただ優しく注がれた。昨日別れた人と、いつもどおり会った、慣れきった、「どうしようか？これから。」

「食べます？なにか」

「どっち？ごはんを？波奈子を？」

「どっちでもいいですよ」彼女の鼻から漏れた笑い声に、その瞬間だけ彼女は、いま、初めて男

の抱かれるような、何かを決意したことを伝えようとする表情を、「どっちに、しますか？」なぜ、彼女はそんな表情を浮かべ続けるのだろうか？あまりにも慣れきって。狂ってるぜ、と、わたしは思った。微笑み、指先で、彼女のくちびるに、そして迷いなく、飢えたように胸をわしづかんで、その瞬間の、彼女の生きたまま食い散らされつつある草食動物のような表情を見逃さない。狂ってるよ。優しく、かわいく、ちょっとだけ切なく、繊細で、みじめで、いい感じに、わかる？狂ってるぜ。狂ってない？狂ってんじゃん。誰が？波奈子を、彼女を、あるいは彼女たちを、抱いたときにそれらの眼差しがわたしの体の下で見せた、その同じ視線を捉えているまさにこのときに、うるんで、受け入れようとして開かれきった瞳孔の先に、どうしようもなくそのいくつもの眼差しはわたしを必ず通過して、結局は何も見えていない気がした。空っぽで、無機質なままに。彼女がわたしを見ているのは知っていた。その視覚が、わたしの形姿を、そして、それ以上の何かを、捉えていたことは。その、何をも捉えきれずに通過するしかなかった眼差しのうちにだけ。あの、不愉快な、かすかで執拗な恐怖感のようなもの。恐れと戦きの、否定できない壊れそうな兆し。聞き取れないほどの息遣い。ふいに顔を挙げ、いつか、捉えられた、鏡に映ったわたし自身の眼差しを見出したとき、たしかに、わたし自身の、恋に飢えたように見えるその潤んだ眼差しは、彼女たちのそれに限りなく近いものだったことを、それを見てしまった一瞬に、これは、誰を抱いていたときの一瞬だっただろう？いつの？わたしが鮮明に感じた、手に触れられず、必ず、わたしに触れようとしめないそばにあるだけの恐怖感は、思えば、たとえば、晴れた日の外出先で、ふと、視界の中のすべての人々が仮面をかぶっていたことに気付いたときに、恐怖して叫び声が立てられる前に、振り向いたそこにあつた姿見に映った自分の頭部に既に、その同じ仮面がかぶられていたことを見出した、その瞬間の。あるは、外出先で、ふと、視界の中のすべての人々の顔が、滑らかなのっぺらぼうで、とはいえ、いずれにしても、あなたは私に触れたことなどなかったのだ、と、触れようとしたことさえも。なによりもわたしに触れることを望みながら？「なに、見てるの？」そのわたしの声を伏目のうちに聞き流しながら、波奈子は言う、…え？と、その、かすかな、幸福な、ついに思いが遂げられた、その充足感をひそめて湛えた、「…え？」その声を「見てませんよ」聞く。「何も。」

「見てよ」

「何で？」わたしの声が、どこか誘惑を含んで、笑ってさえいたのは知っていた。「見たいんでしょ？」

「何を？」

「触りたい？」

「何で？」

「キスしたいんでしょ？」…え、そのくちびるが息と共にかたちを崩し、確かに、扇情的なくちびる。あくまでも愛玩用の、「したくないですよ。」

「嘘。」

「したくないから」小声で笑って、見上げられた眼差しの潤いの、その黒目の、盲目的な、無根拠な、無機物の空白。「嘘」

「なんで？」彼女の立てられた、媚びた笑い声を聞き、「我慢できないんだろ、」ひざまづいて、伸ばされた指さきで、「もう。」触れようとして空間をだけなぞったわたしの数本の指先の、自分の顔の曲線に従った動きを、視界からわざと外して見せながら、彼女が、例えばその皮膚で、それを見ているのは知っている。「いますぐ、おれの体にさわりたいんでしょ。キスして、匂い嗅ぎたい？したいんでしょ。してほしい？」

「違う」

「毎日俺のことと思ってたんだろ？ずっと」

「…だから、」

「されたい？」わたしをだけ見つめ、微笑みながら、わたしは彼女に、後で、…ね？、言って笑った。「めっちゃくっちゃんに。」

波奈子は会社を辞めて、いま、歌を歌っていた。自分で曲を書いて、ライブをセッティングし、セッティングされ、確かに、彼女の、他人にとっては無根拠な不意の転身は、会社の中でスキャンダルだったに違いなかった。記録的に優秀な成績を収めていた、いわば社内の勝利者だったのだから。会社を辞めてから作曲の勉強をした、と言った。コードもほとんど知らず、ギターにも触ったことが無かった。ピアノには、子供のころ、友達の家のもそれと音楽室のそれに、何度か触ったことがあった。友人たちは彼女を応援する言葉を投げたが、不安な疑いだけは、どうしても残りつづけた。正当化され獲る理由が無かったから。転身は、いまのところ必ずしも成功しているとはいえないのかもしれないし、そもそも、二十世紀的なレコード産業のビジネスモデルが、どこでもかしこでも破綻したばかりの世界の中で、結局、何を持って成功したといえるのか、わたしにも、彼女にも、その周辺で、彼女を庇護しようとした人々の心配そうな眼差しの中にも、明確な答えなどなかった。ベートーヴェンが成功者だったのは、彼の百年後の人間たちにとっての必然に過ぎない。かれの曲は、レコードとして大量に売れたから。かれ自身の時代において、彼が失敗ではなかったと言い獲るのは、かれが単に飢えて死ななかつたからに過ぎない。だとしたら、かわいそうなシューベルトは？ブルーノ・ワルターとウィーン・フィルとコロンビア・レーベルの成功であって、シューベルトは単に失敗しただけだったに違いない。何度か、彼女のライブに言ったことがあった。それでも、そんな彼女のファンたちはそれなりの数がいて、その若くは無い男性たちのやさしい眼差しを浴びながら、かならずしもわたしの好みではない種類の歌を歌う彼女の、どこか恍惚とした表情は、多くの、シンガーと呼ばれる人間たちが一般的にステージの上で見せる表情の紋切型のヴァリエーションには違いなかった。歌われた《あなた》にささげられたのかも知れない、（それはわたしだったかもしれない、と、わたしが、そして、同時にわたし以外の多くの彼らが、そう、錯覚したように思った、それらの）彼女の言葉が、そのくちびるから発される時既に、その眼差しは見出したかも知れない《あなた》の姿を追ったのかも知れないが、（追ったその目線と追われたかも知れなかつたそれらの目線の、あやうく交差しない、お互いの向こうの方で、そして）彼女の見ている風景自体は、（すぐそこの、）ステージの逆行の中の黒に他ならないことは、（その、）誰もが知っていた。何を見ているのか、たぶん、その本人にさえ判断できない行方不明の、そして、むしろ、見ている彼らの眼差しに、触れすぎて通過してしまったような近さの錯覚の中で、わたしたちは、そのとき、彼女に触れた気がしたのだった。耐えられない、どうしようもない、錯乱していることさえ既に気付かれていた近さ。だれか、彼女の声を聞いていたものがいたのだろうか？彼女に、自分の声を聞かせ、彼女の声を聞かされるばかりではなく？

とりあえずシャワーだけを浴びて、出てくると、ベッドの一番端に腰掛けたまま待っていた彼女はスマホをいじっていた。ホテルのカフェへ食事に行き、人々の群れ。ここが日本だということを、どうしようもなく気付かされる、それらの人々の群れ。音声と、その仕草の。外国で会った彼らに、日本語で話しかけると、日本語、上手ね、と、あきらかに優秀な下位者を賞賛しながら見下げたまなざしを向けて、「…日本語、上手だね」疑うように言ったすぐあとに、…え？と彼らは言い、「…あ、」日本人ですか？「あの、…あ、え？」ひょっとして、と、そう言ったが、今、彼らの視線には、わたしは単なる日に灼けた日本人男性以外ではないのかも知れない。あるいは、波奈子をふくめて、アジアのどこからか来た、一般的な日本人のように良心的で優秀な

外国人だと、彼らは思ったのかもしれない。どっちだったろう？波奈子の肌は黒い。褐色の、むしろ、南のどこかの島の風景を、予感させた。スマホで、いつだったか、実家に帰ったときの写真を見せられたときに、その家族写真に写っていたのは、まるで、明らかに仲のよさそうな父、母、娘、息子の家に独りでホームステイした外国人留学生の女の子だった。波奈子は、誰にも似ていなかった。独りだけ、目が覚めるようにくっきりとした目鼻立ちで、そして、日差しの匂いさえ感じられる、褐色の鮮やかな肌を持っていた。整形したのか、どうなのか、そのとき、そう疑い、そして、彼女のためにそれを口に出さなかったのは、彼女の出生をまだ知らないままに、どうしようもない痛ましさを感じたからだった。彼女の顔が整形されていたとしたら、彼女は、手の施しようの無いコンプレックスと、ナルシズムに何重にもない交ぜになった、残酷で、悲惨なほどの複雑なペルソナにすぎなかった。ペルソナ、未完成の、描かれ続けたモナリザがペルソナだとしたら、その、ペルソナ。あのパリの美術館の中の隔離された空間で、見るものをどこからでも片っ端から同時に見つめ続けるペルソナ。怖くはない。書かれたものに過ぎない。家族たちの顔のヴァリエーションの一つから、波奈子の顔を作り出すためには、何回の執刀が必要だろう。どれほどの最先端技術が。メイクの能力を加味しても、それはおそろしい努力だったに違いなかった。その写真をわたしに見せて、彼女が語った、父への言葉、母への、妹への、兄への、それらの、それらを叙述し、描写する、無数の親密な、やさしく、選ばれさえせずに朴訥とした、とぎれとぎれに発された、それらの発話の群れに、わたしは感じたのだった。明らかな、狂気の発熱、その温度を。精神疾患とはっきりと呼ばれ獲る以前の、かすかで混じりけの無いそれ。もはや自分の親とさえ呼べないほどに隔たってしまった両親、あるいは兄弟に対する、語られたやさしさといとおしさの、それが嘘ではないが故にもつ、無慈悲までの違和感。いたたまれない、何も痛くない悲痛な痛さとして、彼女の言葉は、わたしに聞かれるしかなかった。やっぱ、と、顔を上げた波奈子が言った。「いい。」

その、不意の声は、ただ、確信に満ちていた。

一瞬、たじろいで、「なにが？」と、その、まっすぐわたしを見つめた眼差しを、わたしは、「潤さん、いい。すごい、いい。」小さく笑い、「すごく。」その笑い声を鼻に連鎖させて、彼女がその瞬間打ち切ってしまった会話の中で、自分が何をしゃべっていたのかさえ、既に忘れられていた。

日本に帰ってきた理由は、ただ、両親の埋葬のためだった。事故死だった。脳梗塞で、半身が不自由になった父を、車に乗せて、ショート・ステイ先の病院に連れて行こうとした母が、対向車線の貨物トラックと正面からぶつかったのだった。福山という広島県の小さな町で、交通量も少なく、見通しのよい道路だった。向こうから来た白い軽自動車が、急に、旋回するように突っ込んできて、何もできなかった、と、被害者のようにそのトラックの運転手は語った。らしかった。母の弟、つまりは叔父の妻が、そう言っていた。らしかった。人を轢いておいて、まるで轢かれたみたいに言っていた、と。なぜ、そんな事が起こったのか、誰にもわからなかった。居眠り運転として処理された。同時に二人の人間が、すぐに眠ってしまえるものなのだろうか？波奈子を東京に残して、新幹線で実家に帰る間中、新幹線のなかの外国人をさえ含んだ人々の風景が、その外国人たちさえ巻き込んで、ここがどうしようもなく日本であることを明示し続けていた。眩暈がするほど、何もかもうんざりだった。喫煙室の中の、ほんのささやかな、ん？…と、と…。あ、その、ああ、…。あー、あ。…ええ。それらの、その、言葉でさえない日本語の、気遣いの細かな音声さえもが。

父親の会社が倒産したのは、わたしが22歳のときだった。倒産と言う事態が、あそこまで重大なものだということも、初めて知った。生き残っていた父親の母親は彼の妹が引き取ったし、かろうじて生き残っていた母親の母親は、彼女の弟が引き取っていった。父親のほうは両方死んでいたから、どうでもいい。一人息子は、つまり、わたしだが、東京に出て行ったきり、帰って来そうもなかったし、帰ってきたとしても、彼に何ができるわけでもないことくらいは、彼らも、一人息子自身さえもよく知っていた。彼は、東京で水商売をしているような、どうしようもない人間だったから。大学まで行かせたのに、と思っていることは知っていた。大学に籍があった頃から。もはや、何の文句さえ言わなかったものの。高校の頃に頃に比べれば、それでも、まともになったには違いないから。子供の頃は天使のような子供だった。絵を見るのが好きだった。描くことさえも。音楽が好きだった。弾くことさえも。そして、本を読むのが好きだった。書くことさえも。小学校の頃には、文庫本で、自分たちは読んだこともない、名前だけ知っている本を、息子の彼が読んでいた。母親の弟に引き継がれた、優秀な血統が、流れているのだ、と彼は言われたものだった。彼の叔父は東京大学の卒業生だった。いまや、電源開発の企業の重役だった。たたき上げのエリートだった。縁故も無いところから這い上がったのだった。本物のエリートだった。原発事故が起こるまでは。もっとも、どうでもいいことだった。あと数年で、定年になるという頃の事故だったから。彼を苦しませるためには、それは、遅すぎた。彼に完全に意識されないですまされるには、少しだけ早すぎた。いずれにしても、彼は成功したのだった。幸福に、生きぬくことに。わたしはといえば、破綻が熟成されていく、十代の前半にあった不審な

なにかが、いつのまにか、やがては芽吹いていて、彼らが気付いたときにはもう手遅れだった。まともな意味でのまともな人間にはなりようが無い、単なる奇形の人間に過ぎなかった。たとえ、歳を取るに従って、彼がとても知性的で、基本的に美しく、媚態を含んで、ときに、さまざまな人間たちを魅了したことさえあったとしても、故にこそ。彼の未来は、ただ、暗かった。彼らは、彼が、自分たちの骨さえ拾いはしない可能性さえ秘めた人間に過ぎないことにさえ、気付きながらも見なかったことにした。彼らは既に、すべてを失ってしまっていた。田舎の、くだらない、取るに足りないものに過ぎなかったにしても、彼らの社会的地位も、財産も、かつて彼らに群がっていた親族も、息子の、そして息子との未来さえも奪われ、破綻し、崩壊し、無慈悲なほどに単に絶望的なだけで救いようが無い風景が広がってしまったのを見出した、その瞬間に、喧嘩ばかりだった彼らは、おしどり夫婦になった。東京に出てから数年後、ふたたび出会った彼らは、ときに、息子の私にさえ立ち入る隙を与えない完璧に満ち足りた関係性の中に憩う、かならずしも幸福とはいえない、完璧に幸せな人間に他ならなかった。長い、とてつもなく長い時間をかけてつかれた嘘を、いま、ばらされたような、自分の人生のすべてを台無しにされたような気がした。かれらの、幸せな微笑の空間に身を寄せるときには。子供の頃、何度、彼らのいさかいの、暴力的な音響と、気配と、予兆に怯えてきたのだろうか？ののしりあい、わめき散らしあい、肉体と肉体がぶつかりあって。目の前であらゆるものが崩壊していくような。見えているほのかな優しさが、危うい均衡の上にだけ成り立ったあやうい風景にすぎないことを、いやほど教え抜かれ続けるような。いずれにせよ、二人いっしょに死んだ。乱脈な、乱れることでしか生きていけなくなった知的で優秀な息子は、女たちの、男たちの、気が向いた腹の上で目覚め、何もかも、濫費に濫費を重ねなければ気がすまなかった。それを教え、そそのかしたのが、隣の少し悪いお兄さんではなくて、例えばレオナルドダヴィンチだったのだから、そもそも、たちが悪かった。更正のめどなどありはしない。叔父は言ったらしかった。生きる資格の無い人間だ、と。母に。あなたの補助はするが、あの子の面倒はみない。理性的で正しい意見だと、わたしはいつだったか思った。両親の死は、叔父の妻が教えてくれた。雨期の終わったベトナムである日、その昼下がりのいつもの熱気の中で、ふいに、フェイスブックに見たこともない三十代前半の女性からの友だち申請があった。名前には見覚えがあった。叔父の娘に違いなかった。不吉な予感がした。何かが起こる、或いは、何かが起こった。予想は違わなかった。連絡先を知らずに途方にくれていた叔母に、娘がした入れ知恵だった。叔母は、わたしがいま、ベトナムにいることさえ知らなかった。

泣いたの？そのときに。泣いた？泣かなかった？なぜ？泣けなかった？たぶん。泣きはしなかった。彼らの死を告げられたときに。あるいは、読んだときに。《お久しぶりです。お兄ちゃんですか？》その文を。どうして？その問いは愚かだ。彼らは既に死んでいた気さえした。《久しぶり。元気？》ずっと前に。ときにインターネット回線上で交わされた彼らとの無料通話の会話のさなかにさえ、《ありがと！元気。》それは最早思い出された思い出のようでさえあった。《いま、時間、いいですか？》面影はあった気がした、子供のころの《もちろん。忙しくても、あとで読みますよ笑い。》、たぶん、十歳くらいの頃の、名前は？《いま、元気ですか？気持ち、しっかりしてますか？》なんだったろう？彼女の名前は？とはいえ、その画像にあった、《どうしたの？》歳を取りかけた《おにいちゃん、久しぶりに会って、いろいろ、思い出とかも話したくて。なんですけど、ちょっと、言わなきゃいけないことがあって。》年齢的なかげりが既に見えなくも無い彼女は、子供と老いの中間を全く知らないわたしにとっては、しかし、もはや《おにいちゃん、大丈夫ですか？》美しいとはいえないだろう、《いいよ。なに？》誰にとっても《本当？》そして《逆に心配になってきた。笑》本当に子供だったころしか《言います。美恵子叔

母さんと、武雄叔父さんが、なくなりました。交通事故です。即死です。苦しまなかったと思います。9月23日です》知らない《R.I.P.》わたしにとっては、《…そっか。ありがと。教えてくれて。》彼女に美しい時期があったのか、それさえ、《葬式とかは、父と母がします。いま、福山に来ています》知らなかった。三人姉妹だった。男の子はついに生まれなかった。

波奈子を抱いてやるべきだったかも知れなかった。本当に、飢えていたように抱きしめて、好きだ、と何度も呟き、自分勝手に、引き裂くように服を脱がせ、ベッドに押し倒して、自分勝手に射精して。何をやってもどうしても満たされなかった、しかし、ついにいま、すべては満たされた。…と。目の前で風景が疾走し、あなたじゃなきゃ、駄目なんだ、と。窓の向こうに、そんなふりをしたら、彼女は どうしただろう？線形の残像になって、とっくに、上品な嘘だとわかっていながら。消えていく。見つめられ続けながら。疾走していくしかない、新幹線の中の風景。同じように、フェイスブックのメッセージで、波奈子とはすぐに連絡がついた。とっさに、日本にいる、5年間のブランクがあっても意にも介せず、すぐさま、わたしの為に尽くすだろう存在として、真っ先に、あるいは、唯一思いついたのは、彼女しかいなかった。判断に間違いは無かった。彼女は単なる従順な下僕に過ぎなかった。食事の後、無意味に部屋にまでついて来て、何の話をするわけでもなく、やがて遅ればせにわたしの顔色を伺って見乍ら、小声で告げた、短いお悔やみの言葉を、言い終わらない瞬間に泣き出したのは、それは彼女のほうだった。どうしたの？と、お前が泣くところじゃないだろ？笑ってわたしは言い、首を振りながら、それは激しく、そして彼女は答えたのだった。「わたし、お母さんにも、お父さんにも、会えなかった。」見つめるが、彼女の視線は、伏目に、ただ、涙に濡れて、見上げられることは無い。交錯しない視線の中で、無距離に触れ合う。ごめんね。言ったわたしに、もう一度首を、強く振って、「わるくない」何度も、時に激しくさえ、確認するように「わるくないです」振られる、「潤さんは。」その首に、「なんにも」そのときできることは、ホテルの窓からこの、不快な気の狂った女を放り出して始末してしまうか、かすかな空気の実在と同じように、かすかに狂ったバグの一つとして無視してしまうか、あるいは、やさしく彼女を抱きしめるかの三つしかない。この、停滞した何も動かない夜景の中で。わたしは、後者を選んだ。腕の中に彼女を抱いたとき、衣服のせいで、瞬間、それを感じることはできなかったが、わたしは彼女の体温を思い出していた。やがて感じられはじめたその体温に、記憶は、それらは互いに重なり合って、単純な温度の高さにすぎず、固有性など一切ありえないにも拘らず、いつか、それぞれに特異だった固有の暖かさとして錯覚されてしまうもの…。

彼女の、あの写真の家族の中の父親とはいかなる遺伝情報の共有もないことは、今では知っている。わたしがまだ東京に住んでいた最後の時期に、波奈子の母親から聞いたのだった。彼女

にとっては、わたしは娘の婚約者だった。一種の比喩として。永遠に守られること無く、既に破棄されていた、永遠の約束の恋人。誘われていっしょに食事をするようになった、その日に彼女は遅刻しなければならなかった。急に入った、自主制作盤の打ち合わせのために。彼女の母と、私だけでいっしょにすることになった食事の間に、何を聞かれたわけでも無く、不意に彼女は言ったのだった。実は、と、言って話し出す彼女は、若かった頃の高飛車な感じを、どこかに名残らせていた。彼女の名前は^{ななこ}奈菜子と言った。もう独りの娘は^{ひなこ}陽奈子だ。短く揃えられた髪を揺らし、老いがしずかに彼女の皮膚から鮮度を奪い、しわの中に、身体の形態をやわらかく包み始めていた。死へのゆっくりとした準備をさとし、うながし続けるように。波奈子は、彼女が80年代の後半にフィリピンにボランティアで言ったときに、「…授かったんですね、あのときに、」と、彼女は言った。波奈子は、彼女が現地の数名の人間に強姦されてできた子供らしかった。当時、未婚だった父親も現地にて、彼は病院と警察所の中で、事の次第のすべてを聞くことになった。福井で大量に生まれた原発成金たちのうちの一人に他ならなかった、勝ち組の彼らの善意の旅行は、一瞬で悲劇的な色彩に包まれた。彼は、彼女と結婚した。妊娠が発覚したとき、確かに迷ったが、奪胎は違う、と思った、と、彼女はわたしに言った。彼も承認した。人は、悪くないんです。悪いのは、人じゃないの。…ね？、…ええ。…ねえ。海辺の町だった。一人で、散策に出た帰りだった。暗かった。数人の、匂いのきつい（薬物のせいだったかもしれない）男たちにバッグを奪われたことから始まった。もとをただせば日本製のその薬物に蝕まれた彼らの体臭。俊敏な、複数の肉体。奪い返そうとした彼女と、男たちの、暴力的な身体接触はやがて、性的な接触に変わって行った。気付いたときに遅かった。浜辺のくぼんだ場所の、野の花が赤く咲いていた、その木製の船の陰で、意識を失いそうになりながら、何度も彼らの声と、息遣いと、自分のそれと、悲鳴と、喚声？車の、バイクの通り過ぎる音響さえ含めて、それら、彼女にはあまりにも悲痛に聞こえたノイズの向こうに、波の音が聞こえているのを彼女は知っていた。確かに、それは聞こえていた。ずっと前から。名前は？夫は言った。あなたつけて。ねえ、…。ね？彼女は言った。やがて紙に書かれた、いくつもの候補を、そして、彼女はそれらを見もしないで、言った。はなこ。は、な、こ。波、奈、子。それが彼女の名前だった。

「後悔してますか？」

「何に、でしょう？」生んだこと？行ったこと？育てたこと？何に？質問をした自分でさえ、それはわからず、わたしはむしろ沈黙するしかないまま、「後悔して、…」言いかけて、でも、ね。…ねえ、ほら…「遅すぎるでしょう？」ふたたび、当たり前のように気付いたように彼女は言った。諦め、とは違う、明確で、確信に満ちたものだった。

彼女が愛されているのは知っていた。彼らに。彼らが、彼らにとっては愉快とは言えないわたしとの付き合いを、それでも許容し続けるのは、彼女が自分たちの子供としてみなされていなかったからではない。とはいえ、彼女は、必ずしも、彼女たちの、自分たちの子供ではなかった。彼女たちにとって、彼女に対して、なにか、埋めようも無い優しい距離感が存在していた。その距離感だけが、彼女に、優しい自由を許させていたのかもしれない。始めて会ったとき、この、彼女たちの優しさが、不思議だった。なぜ、彼らはわたしを受け入れるのだろうか？単純に言ってしまうえば、彼らの娘を慰み者にしているに過ぎない、その意味では彼女の未来を奪って、その限りにおいて彼女の現在をさえ奪い果ててしまっている、あきらかな加害者に他ならないわたしを。あの子がいつもお世話になって、と奈々子は言った。丁寧に頭を下げて、そして慰めるように、いたわりさえするように、その眼差しはただ、優しさだけを語るに過ぎなかった。不意に舞い散った小鳥の柔らかい羽根に、頬を後ろからくすぐられたような。いつでも、彼女は特別な子だったのだろう。その、いつか出来上がっていた特別さが、彼らの優しさを特別に生み出して

しまったに違いなかった。もちろん、二人に共有された海辺の苦痛は、癒されえない苦痛として目覚め続け、放置され続けなければならなかったままに。その妹に、もしもわたしが同じことをしたら、同じような鳥の羽の優しさは舞い降りてきたのだろうか？うしろから、そっと風に触れられたように。波奈子の兄は、東京の企業を経由して、彼女たちの地元の福井県の実験炉の管理部で働いていたが、彼はいつだったか言ったものだった。でも、いや、失礼ですが…、そして不意に笑って、なんで、あんなのがいいんですか？いつからなのだろう？わたしが彼らのとって、彼女の夫になってしまっていたのは？いつも思うんですよ。もっと、あんなのより、いいのがいっぱいいたでしょう？波奈子がそう言ったのかもしれない。あるいは、彼女のその思いが、いつの間にか、彼女の周囲にその状況を作ってしまったのかも知れない。ほら、潤さん、いけめんじゃん？まじで。いや。本人が気付く前に。そして、むしろ、彼女はその周囲に、わたしが彼女の生涯の人間だと教わりさえしたのかもしれない。いつの間にか。そして、窓越しにいつの間にか、雪が降っていて、福井のほうも、雪が降るんですか？東京みたいに。その、まるで日本地図を知らない外国人のような、そして、日本人の大多数にとっての当たり前の質問をすると、奈菜子は笑いもせず、うなづいて、綺麗ですよ、…それは。とだけ言った。「女として、どうなのって。あいつ、…がさつでしょ。」兄の名前は、確か、修一と言ったはずだった。わたしより年下だが、同い年か、むしろわたしのほうが下に見え、「かわいけりゃいいけど」言って、思い出したように笑い、ん、…でも、まあね、と、「ぶっちゃけ、パーツは悪くないんですよ、でも、トータルで、どうなのって？思いませんか？いや、」わたしが渋谷と原宿の間でやっていたバーの中だった。「でも、せっかくなんで。やっぱそうですね、おれ、やっぱ、やめますって言われたら、ほら、あいつに怒られるんですけど」わたしが彼女と出会ったときには、水商売のころのホスト仲間の一人と、客だった女と、バーを始めていた。次にドッグ・カフェを。次に、同じようなカフェ。次に、…そして5店舗できた頃には、その生活にも飽きていた。成功者とも、実業家ともいえなかった。失敗しているわけではさらさら無かった。単に、目に映るものすべてに、飽きた。

修一が来たのは波奈子の紹介だった。東京の会社の、要するに震災前の東電での本社研修に呼ばれたのだった。大学時代の同級生との飲み会のあとの何次会かで、三人できた。話し方も、顔つきも、物腰も、まったく妹とは似ていない。「いや、今まで見た最高の女性ですよ。波奈ちゃんって」と笑いながら言い、彼の言うとおりかも知れない。彼女の《夢の女》の夢のもろもろは、一般的に、どうしようもう無く過剰で、いびつにさえ見えるかも知れない。美しいばかりか、むしろ、見苦しい女でこそあったかもしれない。

「言わないでくださいね」奈々子は言った。「秘密にしている、って。そういうわけじゃないんですけど。ただ、もう、…」一つ一つの言葉を「言わなくてもいいんじゃないですか？遅すぎるというか。もう」わざわざ区切りながら言う彼女の口調に「必要ないんじゃない。…て。卑怯なのかも知れませんが。」たとえばわたしが言えと命令しても、そんなことするはずも無い、当たり前の既に下された決断があった。「あの子だけが、知らないんですか？みんな知らないんですか？」

「主人とわたし以外には。」あの子見てると、と健一が言った。それは共同経営者だった。「なんか、できの悪い子だなんて気がする。」波奈子が店に来て、そして帰って言った後で。その後姿が見えなくなったあとに、そのとき、もう、わたしの手は付いていた。健一との付き合いは、ホスト時代の最初からだったので、彼ならすぐに気付いてしまうことを知っていたわたしは、こののあらまはは何も話さないままだった。「やったんでしょ？もう。なんかね、見ればわかるけどさ、匂いで、ね。体臭、変わったよ。あの子。」笑う。「かわいいんだけどね。なんか、でき

悪くない？」

「そう？」

「なんか、根本的に間違っちゃってない？。生き物として、なんかね。なんか、こう、作るのへたで、がんばったけど結局失敗しちゃってごめん的な、残念感、はんぱないよね。」笑うわたしの頬に、両手のひらを触れて、まあ、と、好きだからね、お前。食い散らすのが。独り語散て健一は、殺されちゃうよ。最期は。言って、わたしはそれを聞きながら、声を立てて笑った。

健一には、帰国の連絡さえしていなかった。なぜだろう？単純に、最も、何の混じりけなく愛していたのは、…いるのは？ずっと、この美しい男でこそあったはずなのに？

新幹線を降りた福山駅は、ただ、閑散としている。そこが実家だった。容赦なく寒い、東京ほどではない。両親が死んで何日たったのか？ふと、本当に指折り数えてみると、まだ四日しかたっていない。明日が、火葬の日のはずだった。雛とは焼き場で待ち合わせていた。繭、雛、

優奈の叔父の三姉妹の、繭はいま、カリフォルニアの白人と結婚して、帰ってこない。優奈は、パリだったかどこだったかに留学して、バイオリンをやっている。うまいのかどうか、有名なのかどうかも知らない。雛と、その母と、父とが、福山に来ているはずだった。借家の処分から、荷物の整理から、結果的に彼らにお願いしてしまった仕事の量は膨大だった。わたしが叔父だったら、わたしを殴って、蹴り、蹴り上げて殴りつけ、血まみれになって、わたしは生きていることそれ自体を謝罪し、わたしが生まれてきたことそれ自体を後悔したとしても、わたしは、決してわたしを許しはしないだろう。彼は、どうするだろう？暇つぶしに入った喫茶店の中で読んだのは、森鷗外の『舞姫』だった。

石炭をば早積みはてつ。いまなら、どうだろう？充電もうなくなりそう。だろうか。飛行機や新幹線の長い閉ざされた時間の中で暇つぶしに何百回も読んだということをもって愛読書と呼んでいいなら、それは間違いなくわたしの愛読書だった。すべては自分の責任に他ならないものの、罪持つものは自分自身以外にはいなかったものの、目覚めたときにはすべてが、何も知らないまま、何も体験されなかったままに、勝手に終わってしまっていた男の滑稽な惨劇。一步を踏み出しさえしなかったのに、もう後戻りができなくなっていた男の、残酷で陰惨なショー。外国語の影響を受けながら、日本語以外ではなく、既存の日本語でもない、いびつに異種交配された日本語によって仮構された美文らしきもので埋め尽くした、カタカナ書きの外国語だらけの小さなハリボテ。問題は、エリスの子供がどんな大人になって、どんな人生を過ごして、どんな風に死んでいったのかではなくて、これから、明日の朝までの時間だった。生まれて、育ったという以外の関係の一切をなくしてしまった町に、人間関係上も、法律上の所有権上も、もはや、わたしの公式の居場所はどこにもなかった。父方の墓参りにだけ行こうと決めたのは、『舞姫』の、露西亜に行くために、余が少しの荷物を小「カバン」に入れた瞬間だった。

20年以上ぶりになる生まれた育った町を、ただ、窓越しの風景としてだけタクシーで通り抜け、それでも悔恨のようななつかしさにだけ苛まれるのが、ただ、不快だった。そうなるのは既にわかっていた。せめて誰とも会わないですむように願った。墓地は荒れてはいなかった。誰かが手を入れていたのかもしれない。父親の妹だろうか？彼女の子供たちの数も三人だった。その長女も三人子供がいたはずだった。3、さん、三。何でも三だった。線香さえ用意しなかった。ただ、立ち尽くすしかないが、物思いにふけるほどの記憶の喚起力さえも、それらの墓石は既にわたしに対して失っていた。胸倉をつかんで、聞き取れない何かを耳元にささやかれたような、不審で、無意味な懐かしさが、ただ、どうしようもない残骸として広がった。こどもの笑い声がした気がして右を見ると、背の低い、細い枝の複雑な群れのいっぱいの葉の茂みの先端に、白い小さな花々を、無数に散らせた、花、その木が、枝が、それらの群れの茂みが、それらが、立てた音声だった気がした。ねえ、

え？…と、ささやかれたわたしは、我に帰って、その茂みの向こうに、悲惨なほど老いぼれた女が立っているのを認めた。その女には見覚えがあった。わたしと同じくらいの年齢の、そして、無残なほどに、もう若くは無い加齢だけを繁茂させていた。その体中の周辺にまでも。ふとしたしぐさにさえも。「ひさしぶり。帰ってきたの」小声で叫ばれたような音声を、それは、幼馴染の、千恵子と言う名の女だった。

千恵子は既に人手にわたったもとの実家の、すぐ近くに住んでいた、あるいは、住んでいる、女だった。かわいい少女だったが、いま、目の前の彼女は、大柄で、骨ばかりが太った、丸太のような女になっていた。何も答えることができなかつたのは何故だろう？ただ、微笑んで見つめるしかなかったわたしを、彼女はやがて、あの時、と、この人、自殺しに帰ってきたのかって思った、と笑いながら言うにしても、《そんな風にしか、見えなかつたよ》わたしはややあって、「久しぶり」言った。《まさか。まだ、死なないよ》帰ってきたの？いつ？という彼女の微笑を、《…だよ。知ってる。けどさ》何を言えば言いのだろう？時間の経過を、そのすべてを、わたしは《心配？》彼女に伝えるすべが無いままに、今日、《ううん、そうじゃなくて》と、さっき、着いた。そう言って、笑う意外に何ができたのか？

わんさかとふってわいて、だだっど墮ちてきたような笑い声と言葉の快活さと共に、強奪されたように千恵子に通された彼女の家には、確かに、記憶があった。鮮明な記憶、とはいえない。目にふれた何かが、何かの予兆として、鮮明に何かを語るのだった。それが、意識の錯乱のせいだと既に知りながら（じじつ、20年以上、ひょうっとしら30年近く立ち入らなかつた住居の庭に、かつてと同じものなどほとんど何も無かつたはずだった、そう思った瞬間に）いつか見たもの、いつか触れたそれとして語りかけられていた気がした、わたしの、ひょっとしたら、（確かに、建て替えられてはいないその柱は、まさか入れ替えられはし無かつたろう土も、石も、）悲しいほどに陽気な千恵子の顔を、その、明らかな老いは（確かに、わたしがかつて見た同じものに過ぎないのだった。）誰もいなかつた。彼女以外には。にも拘らず（そんなことに、やがてわたしは気付いたのだった。）凝ったセイロンティーを、凝ったお茶器で、凝ったカップに入れながら、千恵子はもともと饒舌だった。たとえ、千恵子を含めた誰もが、最早千恵子の話など

聴いてはいないことに気付いていたとしても、彼女は話し始めたら止まらなかったし、それを、わたしは黙って笑いながら聞き続けるしかなかったのだった。いつも、いつかも、昔も、あのころも。ほんの小さい子どものころ以外、それほど頻繁に行き来があったわけでもなく、仲が特にいいわけでも、悪いわけでもなかった。それらの実際的な関係の希薄さの事実を、二十年以上と言う、人間種にとっては長すぎる時間は、単なる空っぽの饒舌さのうちにたやすく忘却して仕舞うのだった。むしろ、とてつもなく多くの長い長い時間を、彼女と共有していた気さえした。そんな事は無い、と、あとですぐに気付き続けながら。「まだなの、わたし」と言って、結婚はしていなかった。「ごめん、それってさ…」若い頃にアルコール中毒になったことがある、と言った。「何？」マジ？とわたしは言って、…マジ。「一度も？」答える彼女に、「ごめんね」笑って、「わたし、モテないからさ。」笑われた声に、さらに笑わされる。頭が悪いが、性格はよくて、能天気な少女だった、と、誰もが回想するに違いなかった千恵子の、彼女は、やがて深刻な悩みと言う名の障害に打ちのめされたのかも知れなかった。あるいは、単なるアルコールの快感が、彼女を打ちのめすことによって、彼女に初めて苦痛を与えたのかも知れなかった。いずれにしても、彼女は苦しみ、傷つき、恢復した（と少なくともいま、彼女はそう思っていた）のだった。まだ、怖い、と言った。やがて、笑い声が収まった、しずかな、居心地のいい空間をお互いに作ろうとした退屈さの中で、「何が？」

「お酒」

「大丈夫だよ」

「そっか？」一度、と、わたしは言った、地獄を見てきたやつは、もう二度と、危ない場所に墮ちることなんか無い。地獄の深さも、つまらなさも、知っちゃったから。嘘だ。そんな事は、だれでも知っている。そんなに、た易いのなら、誰も死にはしなかった。誰も駄目になりはしなかった。ホストのときに、覚せい剤で自殺した、レイトを思い出した。漢字は忘れた。どうせ麗人だか黎人だかに決まっている。一度パクられたときに、やめればよかったのに。調子に乗ってはじけたときに、自分の体に火をつけて焼いた。バイクが好きだった。女の部屋だった。人体もろとも燃えた部屋を損害賠償する彼の両親。そんなに悲しいなら、意味もなく悔しいのなら、我慢がならないのなら、と、わたしは思った、狂ってしまえばいいのに。どうしたの？涙ぐんでいたわたしの目に、訝るような千恵子の声がかかって、「どうしたの？」なんでもない、と、わたしは言うのか？いま、嗚咽さえ既に漏らしてしまっている。わたしは泣いていた。彼女に教えられるまでも無く。もうだれもいない。居場所などどこにもない、隠喩でも暗喩でも比喩でもない。尋ね獲る場所はいくつかある。だが、この国の領土の中からはもはや、わたしの居場所など現実として喪失していた。千恵子は抱きかかえるようにして、わたしは泣きながら、千恵子に謝り続けるわたしを千恵子は抱きしめた。千恵子しかいないらしかった。妹はすでに結婚していたし、母親はどこに言ったのだろうか？祖父と祖母は、介護施設にでも入ったのだろうか？父親は働いているのだろうか？定年を過ぎてはいるはずだったが。聞いてしかるべきものの一切を聞かず、話してしかるべきものの一切を話さないばかりか、お母さんはお元気？そう言った彼女に、確かに、母とも、もう、わたしと会っていなかったのと同じくらいの時間以上に、彼女は会っていなかったのだった。「元気だよ」わたしは嘘をついた。話が長くなるからだった。それは、長い、長い、長い、話だ。短くすることもできる。一人息子に裏切られた、無残な人生を幸せに生きた女は、4日前に自分で死んだ、と。それが事実かも知れなかった。それを認めない、かたくななわがままが、確実にわたしの口から虚偽報告をさせた。何の、メリットも、デメリットも無い、単なる嘘に過ぎないもの。それを言ってしまえば、突き通すしかなくなる、そして、暴かれてしまえば、いかなる意味でも正当化などできない嘘。「結婚するの」

彼女はやがて、笑って言った。実は、という言葉の先行させ、わずかの沈黙と、泳いだ眼差しの後で、ややあって。マジで？わたしは、すごいじゃん、と、「いつ？」

「この、12月」声を立てて笑った彼女の「迷惑だよな」声を、「一番忙しいときに。」空間は反響させた。「誰と？」

「もといた会社の取引先の…、でもね、そういうつながりじゃなくて、偶然、出会って。子供も、もういるの。いや、旦那のだよ。奥さん、亡くなられてて。乳がん。大変だったんでしょう？…ね、けど、まあ、…うん。」わたしは彼女の、その表情の、さまざまな、刹那的な、複雑なそれらの推移をただ見つめるのだった。「…縁だよな、って。」

次の日、火葬場の前で、入りきれずに立ちずさんだまま、指定された待ち合わせ時間は過ぎていた。とっくに、火葬さえすんでいたかも知れなかった。何台かの霊柩車と、同行の車の難題かがが入って行ったのは知っていた。立っているだけの1時間半の間に、出ていった車はまだ無かった。美しい、簡素な火葬場だった。昔、渋谷区で部屋を探したときに、驚くほど安い物件があった。不動産屋が、顔色を何うように、さんざん物件を賛美した後で、火葬場の正面にある物件なんです、と言った。水商売をやっていたころだったから、借りられる物件など、そんな傷のある物件くらいしかないのだった。ある意味において、差別されることが社会的に公認され、被差別者側においてさえ、ある種の奢りと共に承認されている、公然とした被差別人種のお仲間ではあった。差別は、自分たちのようには生きられない灰色の人間たちが与えた、むしろ勲章だったに過ぎない。彼らがその職種である限りに於いて、そして、職種の問題だけではなく、異端視されることを許容せざるを得ない、自分に火をつけるような危うさを、自分自身も抱えていることくらいは知っていた。「でも、大丈夫です」彼女は言った。「火葬場に恨みを持って死んでく人、いないですから。」笑って、その女は、わたしの職種を聞いた瞬間に、まだたいて《すごい》まだ若かった。「殺されても、自殺しても、ですね」彼女の《初めてなんです。わたし》くりくりした目が「火葬場では、もう、綺麗な仏様ですから」微笑んで崩れ、《ホストの人の本物、この目で見ると。》言った。たしかに、綺麗な場所なのかも知れなかった。《なんか、すごい》事実、その周辺は、借景ですらあって、《なんか、いま、キャーキャー言っちゃいそうで、》ひたすら美しく《…やだ。ちょっと、》整然とした近代的な建築の周りを木立が清楚に彩った、《やばいです。》悲しいほどに端整な環境だった。周りの人間の住居たちの生活臭の立ちこめたたずまいが、むしろ穢れて見えるほどに。そこは、穢れ獲ない、美しく清楚でしかない空間に他ならなかった。焼かれてしまった灰の美しさなのか。体中が痛かった。昨日、鉄橋の下で、ひざを抱えてうずくまったまま、寝つきもせずにごしたのだった。中学生のときにさえ、そんな事はしたことがなかった。ホテルにくらい、止まればよかったのに。痕跡を残したくなかった。いかなる意味でも。自分がここに滞在している、滞在していた、痕跡をなどは。人目を気にしながら飲食店をはしごして、時間を潰し、夜の十二時を回ったころには行き場所などなくなる。川べりにまで歩いて、土手を降り、両足の筋肉は既に硬直して、どこでもいいから座ってしまえとつぶやいてやまない。夜の空間に光が穏やかに点在し、川の水をきらめかせたが、美しくもなければ醜くもない。死んでしまおうか、とさえ思う。死ねないことなど知っている。死んでしま獲るだけの死への切迫などどこにもない。何も、美しくない。何も、醜くない。それが最早、許せない。美しくなどあり獲ないなら、せめて醜悪であってくれ。二目と眼にできないほどに。ふたたび眼を開けた瞬間に、失心してしまうほどに。目の前の木立の中に入って、朝の日差しが、見飽きてもなおも降り注いだ。背後の火葬場の焼却炉の中で、両親は焼かれているのだろうか？煙を探す気にもならない。風が木の葉を揺らしていく音だけを聞き、背後に、不意に、自分の名前を呼ばれても、最早それに驚きさえしなかった。雛だった。すぐにわかった。「入

らないんですか？」振り向いて、首を振るわたしの顔を見て、わたしは泣いていたわけではない。むしろ、淡々とした表情しかしていなかったはずだった。いかなる感情も、浮かべようにも浮かばなかった。「待ってる？」

「いえ、あの、…」口ごもって、むしろ泣きそうなのは彼女のほうだった。「ごめんなさい。もう、…」

「そう」

「あの、」

「なに？」いえ、と、ふたたび、うつむくのだが、思い出す。わたしは、彼女達の初恋の男だった。彼女たちの母親が、いつか言っていた。あのころ、確かに、剥き出しの扇情的な媚が、まだ乳臭い三人の少女たちの眼差しに、恥じらいの一切さえなく浮かんでいた。「ありがとう」言ったわたしの言葉を、彼女は口の中で反芻して、飲み込んで、ややあって、ようやく消化したその5音の言葉を、さらに反芻して、しかし、何も言わなかった。「いろいろと、ごめんね。喜んでいと思います。母も」わたしがそう言った瞬間に泣き出した彼女は、何が悲しかったのだろう。思い出された記憶が、なのか、いまの目の前の現実が、なのか。来なければよかった。こんなところに。そう思って、今この瞬間に、自分の姿のすべてを、痕跡さえ残さずに消してしまえば。おにいちゃん、と言ってじゃれ付いてきた小さな、幼かった彼女は、その子供の小さな視界の中で、小さな彼女の世界の中の一番の存在を恋していたに違いない。彼女の世界は広がって、わたしなどよりはるかに美しく、有為にして優位な男たちを見ることになるのだが、記憶はその世界そのものの正当なる差異を破壊してしまう。彼女は一番の存在のわたししか見なかった。わたしが一番の存在などではないことなど、既に知っていたとしても。どうすればいい？どうやってあがなえればいい？残酷すぎて、言葉も無い。一度髪をかき上げた後に、ややあって、わたしにできたのは、そこを立ち去ることではなかった。もはや、振り返って見てもやらずに、そして、舌を這わす。そっと、這わされた舌の進行にしたがって、皮膚の上に、唾液の匂いの痕がついていく。鼻に、その匂いは混入して、いま、彼女のその汗ばんだ皮膚の匂いが、わたしの唾液の匂いを付着させたことに、否応無く気づいてしまう。くちびるに一度軽く上唇を触れれば、思い出したようにふたたび開かれて、その、離されてしまった唇をおくれて、あくまで受け止めきろうとする。舌が唇の上部にふれると、かすかに傾けられた頭部が、舌を押し返すほどに唇を押し付けたのを、逃げ去るようにした舌に、波奈子は息を、意識しないままに、自分の呼吸を吹きかけるしかない。東京に帰って、ふたたび呼び出された波奈子は、《どうでした？》彼女の唇に、《悲しかった》言って、笑った。触れた唇を、彼女は優しく啜えようとした。開かれた瞳孔を、さらに開ききらせて、唇、その柔らかい先端だけで。やがて離された唇には、見向きもしないで、わたしを、波奈子はただ、見つめた。ホテルの部屋は、薄暗かった。ベッドメイキングは完璧だった。脱ぎ捨てられたわたしのコートだけがそれを汚していた。それは、波奈子を買って用意したものだった。頼んでもいないのに。寒そうだから、と。確かに寒い。明日発つものだから、もういらぬ。ホテル代も、彼女が出すのだろうとわたしは思っていた。そういう女だった。あるいは、そもそも、わたしは女に金銭を要求されることがあまり無かった。わたしのせいなのか、彼女たちのせいなのか、わたしにはわからない。女たちは、わたしを養おうとした。拘束という言葉のもっとも優しい翻訳。慰みもののような顔つき。波奈子。その体臭。身体。恥ずかしい《夢》。なんか、汚いよ、と健一は言った。なんか、臭そう。と、笑って、いろんなところが。…かわいいけどね。勝手にわたしは服を脱いでいき、床に放り投げられる衣服を、拾って歩きさえしないで、波奈子は、しだいに現れていくわたしの身体をさえ見ずに、ただ、わたしを見つめたままだった。したい？わたしは言った。舐めたい？

どう？舐めたい？

答えな。

舐めたい？

言いなよ。舐めたいって。

舐めたい？

言えよ。ほら。と、彼女は、「舐めたい、…です」そう言った自分の声を聞いた。欲しい？「欲しい。」やりたい？「やりたい、…です。」めちゃくちゃにして欲しい？「欲しいです。」めちゃくちゃに？「はい」めちゃくちゃに？「めちゃくちゃです」ぐちゃぐちゃに？「ぐちゃぐちゃです」ぎたぎたに「ぎたぎたです」びちゃびちゃに？「びちゃびちゃです」でろでろに？言葉を待たずに、彼女を腕に抱いて、わざとわたしがベッドに放り投げたとき、その、すがるような視線を、わたしは声を立てて笑い、避妊具の用意は無かった。かまいはしないだろう。…知ったことではないだろう。

はやく。もっと早く。

早く、今すぐに。もっと。すぐに、いま。出国手続きの間中、波奈子は、連れ添った貞淑な妻のように、傍らで、ただ、心配そうな顔をしていた。「一人で行けますか？」

「なんで？」笑ったわたしの表情さえみずに、彼女はわたしを見つめたまま、何も言わない。日本人たちの群れ。彼らの生存領域から脱出するのは、もうすぐだった。何をしにここに帰ってきたのか、最早その必然性さえわからない。ホテル代は波奈子、帰りの飛行機代も波奈子。新幹線代も、飲食代も、手の届く範囲の金銭はすべて。何故？夫だから？そうなのかも知れない。出国ロビーに入っていこうとするわたしの背中で、あ、と、波奈子は不意に言って、え？、わたしは振り向くが、ううん、と、その声は、一瞬そらされた彼女の眼差しに振り捨てられたように、周囲の雑音の群れにかき消された。わたしの耳には残った。「どうしたの？」あの、…。何？たぶん、と彼女は言いかけ、ふいに声を立てて笑って、彼女はわたしに抱きついていて。背伸びして、耳元に、「こども、できた」え？と、小さな、そのわたしの声を、「きのう。たぶん」わたしは笑って、微笑む。あの、気付いたの。わたし。「え？」あの、空港で、会ったとき、あのとき、あ、と、不意に言ったのだった、彼女は。あの時に。「何に？」

「あ、できる、…って。」笑っていた。それは、満ち足りた笑顔で、いま、目の前で何が起こっても、彼女の幸福を壊してしまうには値しない、そんな気がした。漏らしちゃったの。あの時。ちょっとだけ。「ん？」

わたし、あ、って。あの、…わかります？

何を？

わかったんです。わたし。こども、できたって。「昨日？」

「そう。わたし、…きのう、できちゃった。」わたしは彼女の頬に口付け、そっと、その腹部に触れた。たしかに、わたしと彼女の、たった一人の子供の生気の、その芽生えに、指先は気付きながら。

2017.12.16.-18.
Seno-Lê Ma

明晰な、儚すぎるその...

Quartet

明晰な、儚すぎるその...

Sleepless

日差しに目を背ける。熱帯の日差し。ベトナム、ホーチミン市。旧名サイゴン、サイゴン陥落。
日に色あせた、砂埃りにまみれたけだるい都市。

水が、
撥ねた。

ハンという名の女が、（…少女、が？）背後で光、わたしの熱帯の、首筋の光。匂いを…充溢
する。嗅ぐ。それは、鼻で、空間に、かすかな、うがつ。媚びるような…穿つ。笑い声。
光は。



すこし、むこう。
少しだけ向うで。いま、
きざむ。…笑う。汗ばんだ…刻む。匂いを光は。彼女は…ひかり、嗅ぐに違いなく、その自分
のみずからの匂いに存在を。麻痺した鼻は、常に、決してすでに、それをもう…、捉えはしない
。

小さな、
音さえ
たてずに、
あと2ヶ月?…サイゴン。もう一年も、この廃墟が群がったような、でたらめな都市にいた。
9月。一年近くにわたった、取るに足りないベトナム出張。

…撥ねる。
雨期の雨が叩き付けるように降る。そして聞いた。
…どこに?

脆弱なわたしは、都市機能はいつも破綻する。降りしきる水はけしない雨のその雨水の轟音、膨
大なその流れが響き、主幹道路をさえを音そのもので水浸しにし、破壊しつくして大量のバイクが、すべてを、トラックが、すべては、それらを…怯えた。撒き散らして都市はわたしは泥
にすべてが染まる。破壊されて仕舞う雨水に、予感に匂いが繊細なあることに、一筋の、いつ
も膨大な気付く。無際限なまでの水が雨の醗酵したような群れの匂い。暴力に最初、すべてがそ
れは破壊されて自分のすべては濡れたもはや髪髪の毛の匂いだとなすすべもなく想った。

九嶋圭輔が好きだった
わたしの涙ぼくろを

そうではなかった。もはや、それは、ただ、純粋に、轟音の中に。空にふれてたたきつけ、穢さ
れた雨のあふれかえって、匂いだ。…そんな事は耳を聳する、知っている。日本で、雨期の、ま
だ十歳のとき、家出の拳句に台風の雨に濡れたときに、轟音の中で。雨に臭気があることなど知
っていた。

かつて誰もが
いまだかつて
ハンがわたしの体を求めていることは知っている。…なぜ、体、ではない。体を得ることによ
って、君は、いつも彼女が得ることができる、ある、所有権のようなもの。

指先でふれて
僕は悲しい振りをした
…愛された実感、欲しがるといふべきもの。

誰れもがかつて
光の中に
18歳の少女。18歳になると、愛されることを。わたしたちは結婚できます、と言った。…わ
たしに。タンがわたしの耳元で、声を立てて笑った。その、彼女の言葉をわたしに通訳して見せ
たときに。秘密めかせて。

圭輔を失った、あの
雨の七月の朝に

わたしの白い耳元に、褐色の肌をわたしの寄せ、白い唇が耳元にあやうく褐色のふれそうにな
る肌を距離感の中に、寄せ、ささやきながら。

いまだかつて
ほんの数時間だけ降って
あの日の雨はやんだ
雨。轟音、…もはや暴力でしかない
雨上がりの空に羽撃く
鳩を見た。いつものように

かつて誰もが
少なくとも、一人は。
雨期の雨が降る。その日、熱帯に。雨期の雨が視界のうちを窓の外をたたきつけるので、満た
した。朝の7時、その雨のわたしはまだホテルの部屋の中に轟音が。いる。

橋の向うに
雨上がりの空を

いつの間にか住み込んでしまったハンは、守衛に毎日細かな金銭を渡す。

かつて、いまだ
目覚めさえせず

この国では、未婚の状態、外国人の男が、本国人を部屋に連れ込むことなど、法律違反だったから。

悲しいくらい、俺、…と言いかけて
言葉に詰まった圭輔を

すくなくとも、タンに聞いた。公式には。まともにあるいは、日本語が話せないわたしのしていることは通訳のタンに。犯罪だと言っていい。すくなくともこの国においては。

なにが？振り返ったわたしが、
わざと何も聞こえなかった振りをしたのを

そしてハンはいつも、充足した顔つきを曝す。守衛に。金をてずから渡すときに。…しかたないわ。微笑んで、わたしは彼の、なにかを女だから。諦めたように。

「すき？」

かつて誰もが
いまだかつて

「なにを？」

18歳になったら結婚できるということは、…すき？彼女は何歳なのだろう？俺のこと、お前、現状で17歳なのだろうか？なんで、お前、…18歳を過ぎているのだろうか？まだ、すきなの？17歳にさえ圭輔の声。遠く及ばないのだろうか？

「なにを？」

目覚めさえせずに
かつて

「見て、…ね」

すぐに、なんども耳元になのか。やがては、ささやかれた、なのか。いつかは、その音声。なのか。結婚できる日までの時間的な距離は？

「あれ、見て…ね、」

いまも？
いまだ

「風船が上がってく、…」

わたしはどれくらいの犯罪者で、人間のくずで、恥ずべき人間なのだろう？

いまなお
誰もがかつて

「…空に。」言った僕を、圭輔は

振り向き笑いかける

意味無く笑ったわたしを咎めるように、後からしがみついたハンが何か言っている。何？ Sao…？ …ねえ、Anh à, …どうしたの？ Sao vậ ? やだ？ Nói gì vậ ? 秘密？

雨上がりのくすんだ

Anh à… 秘密なんか Anh à… しないで…何を言っているのかなどわからない。ハンはベトナム語以外に英語さえ話せない。わたしはベトナム語など話せない。

空に。

…この。

聞きなさい

「どうしたの？」言ったわたしに、圭輔は咎めるような眼差しをくれた。

心臓の音

わたしは19歳だった。圭輔は、まだ21歳になったばかりだったに違いない。

まだ、止まらない

…え？

圭輔のホモの唇が、ホストの

「お前、」圭輔の

裏切り者にすぎない

かすかにふたえのゆがんで、まぶたに

僕たちは

「…お前、」ぼくは聞いてなかったの？「違うって…」

裏切った

何が？嫉妬した。圭輔。憧れた。美しい男。愛した。

女たちをも

「見惚れてたの。」

男たちをも

見惚れてたんだよ、僕は、…圭輔に。ただ、
家で少年の成れの果て
歌舞伎町のホスト

馬鹿。圭輔を。…言って、ホモの圭輔はホストの笑った。僕は。…女たちに、「見惚れてただけ…」抱かれてやりながら。

僕はそして、圭輔に抱かれた
女たちを帰した後に

壊れる

その

「マジだよ。…これ、…」…ねえ、
かならずしも嘘ではなかった。

差し込む窓越しの午後の陽光の
温度の中で

壊れた

話しが下手な圭輔の、つまらない話を聞いているくらいなら、…きれい、すっごく…その顔に
、お前の、見惚れているほうが涙ぼくら。マシだったから。

時に嫉妬する、圭輔の
美しさに

その

長く伸ばされた髪の毛をいま、無造作にひっ詰めた首筋に、お前ってさ、かすかな後れ毛がな
んで、いつも発生する。その、窓越しの笑うとき、陽光の逆光に、かすかに照り、なんで、鼻
搔くの？ 騒になる、それ。

わたしは

ひとりで、嫉妬した

肉体。…そのうごきに連動して、信じられないのは、息遣われるたびに、他人じゃないんだ。そ
れはかたちを崩す。

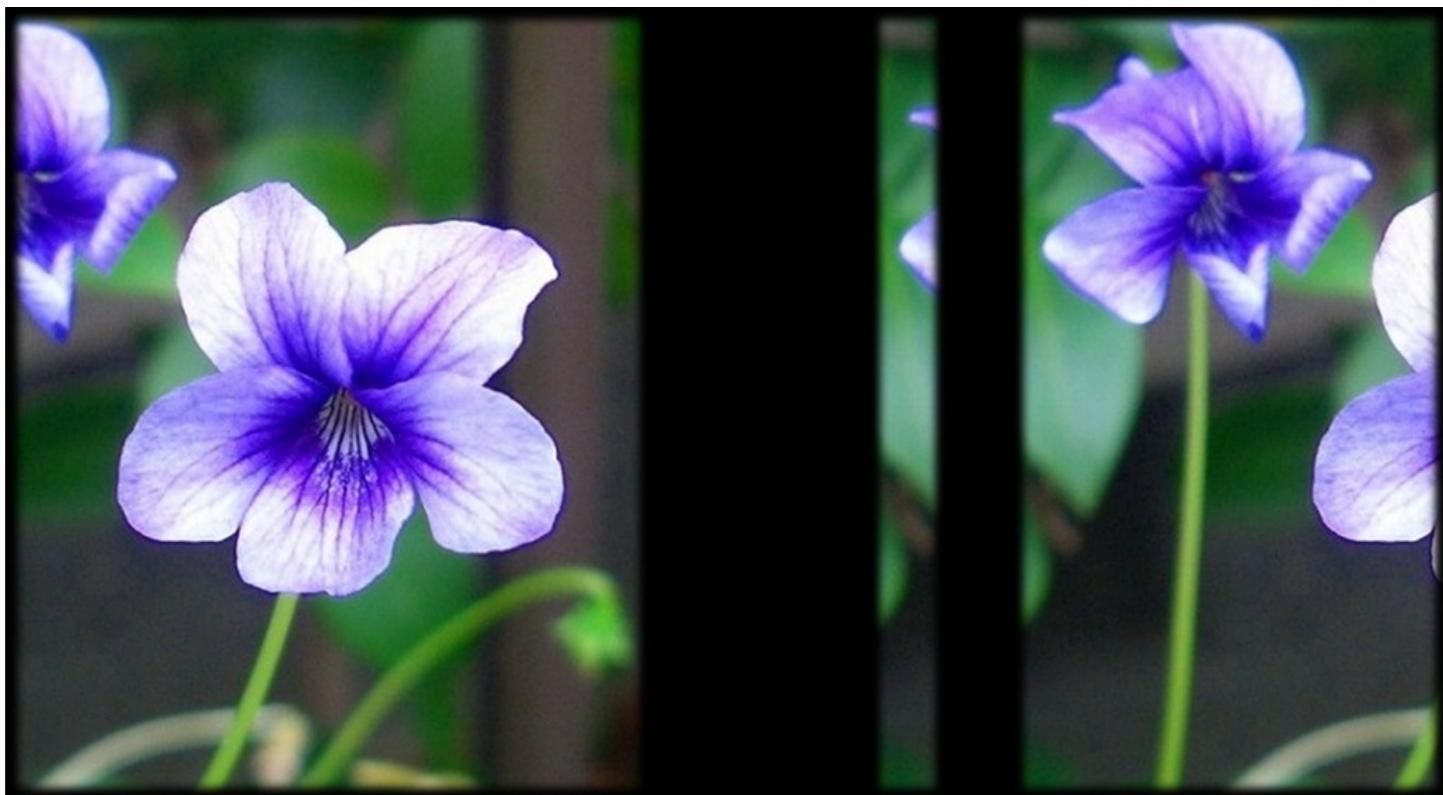
ときに

おれ自身だから。崩れ、むしろ、崩され、俺、崩して、

すでに

俺が、崩れ去る。信じられないんだから。色彩。…だから、肌の。口籠る圭輔を褐色の。

いつも



見詰めた。日焼けしたそれ。わたしは、父親はフィリピン人だと言った。

与えられなかったもの

わたしに

荒廃。ただ、すこしだけ、わたしは、肌に荒廃した息遣いが見詰めた。ある。頬をよせれば、ざらついた。…お前、

与えられなかったものに

圭輔に

ふれた

…壊して

誰？と、いつでも不意にそう言ったような眼差しをする。犬のように、知っていた。わたしはすでに。圭輔の匂いを嗅ぐ。

むしろ

すべて、ときに、話しつくされていた。息をひそめて。はじめてふれあった圭輔も、あの日から。ときに、はじめてあるは、愛したときに、その日から、その匂いの存在にもう、気付いたときに、すでにわたしたちは確認しあうのだった。言葉は尽きていた。お互いの匂い。

壊れる

ふれた

ここに、なにも、まだ存在していることの証明。話されないうちに、

撥ねる

音が

「…あ、」すでに。

わたしがつぶやく。

「…さわって」

撥ねる

「…いい？」

雨が？…ふれて。

「…ん。」

水とともに

「いい？」

もうすうぐ、雨が？

「ん？」

撥ねた

「…感じた？」

わたしは空を見上げる。感じて。

「…ん。」

…あげる。

「どうしたの？」僕を。…桜。光を、並木に、そして代わり映えのしない桜が咲き乱れ、知って。目黒川だから。僕が君を愛しているというどうしようもなく確定的な事実そのものを。当たり前前の風景に過ぎない。それは、と、…え？

君にすべてを

圭輔が言った。「…え？」なぜ、いま

どうすれば、ささげられるの？

なに…「どうしたの？」まばたいたの？ほほに、まぶしそうに、不意に、光など水滴が当たってさえふれた気がした。

君に、

…いないのに。確認した指先は濡れていた。まったく、

…すべてを。

確実に、…なにも。水滴は落ちたのだった。

雨。…と、喉の奥で、独りだけ独り語散、それは、圭輔に作った秘密ではなかった。「…なに？」

雨は降り注ぐ。

散る、

圭輔、ひそかに非難する、彼の眼差しを見詰め、口籠り、何も言えなくなったのはなぜだろう？

あの、散る

花々にさえ、その

秘密にされたものなどなにもなく、秘密にされるべきものなどどこにもなかったのに。

雨は不意に降り注いだ

5月の

わたしは、傷ついた想った、圭輔は、傷つけたと、一瞬だけ圭輔を、なじるようなそして、その表情を曝し、僕は気付く。なすすべもなく圭輔が、傷付く。圭輔を傷ついていることに、傷つけたその時、僕のそして。ある、決定的な無力さに。桜が舞う。

はかなさを見事に装った、数百年の時間の、図太く強靱な生命体。…樹木。

僕は、傷

匂う。

傷そのものだった

花々。そして樹液。土の匂い。

圭輔の眼差しの前で

アスファルト。

その背後でさえも

鉄。

つねに

髪の毛の。

僕は

空気、穢れた？

傷

まだ冷たい、醒めた空気。

痛みそのもの

匂い。

きみを傷つけるとき

肌。すれ違った女の。

きみを微笑ませるとき

皮のコートの。

君の唇

混濁、

君の声

匂う。

君の存在

…しきらない、混濁した、匂い。

君のすべて

匂った。

僕は傷

言葉など必要ない。ハンが想うことが、無防備な直接性で、わたしを攻め立てる。

いつも

もはや、強姦するかのよう。

いつでも

手箒めにされ、後でに括られ、全裸で、守るべきすべもなく、守られるべき可能性も、一瞬の猶予さえなく。

僕は

轟音と共に。降りしきる雨の中で。…愛してる。

…と、Anh à… 彼女が em yêu 言う。Anh.

無言のうちに、「永遠に、」そう、anh à… 彼女は…あなただけを。言う。Anh à… 少なくともいまは。あな—…

言葉？

聞いた

むしろ、言葉を回避するために駆使されるもの。…言葉。

耳を塞ぎながら

自らによって、もっと悲惨な裏切りかたをされた、永遠に救われないもの。

君の言葉を

愛してる。とハンは言った。

雨の中で

圭輔

唇は、わたしの唇を塞いでいた。

その

諦めたように彼は

まどごしの陽光が、まぶたの上部にふれた。

色彩

ときに、僕の頬を
からだに、ハンの体の体温があった。
冴えた
左手で撫でてくれながら
髪の毛の匂い。
白い
言う、…なんで
嗅ぐ。
匂う
お前じゃないと駄目なのなって
ハン。
匂い
それって、すごく
匂う。
水滴の
難解な問題
15歳程度にしか見えない。彼女は、いま、彼女の生涯の男を抱く。
無数の
…って、想わない？
休日。午後。サイゴン。ホテルの中。汗。
匂う
なんで、誰か、すきななるって
熱帯の、大気の温度。天井で白い旋風機が回っているのを、薄めに見る。
水
こんなに、なんか
目を開け切ることはできない。
音
…難解
斜めにさす陽光。
まばたく
よくわからない
温度。…汗ばむ。体温。濡れたからだ。湿った、…汗で濡れたからだ。
光
どうすればいい？
嗅ぐ。
音を聞く、窓の外の。バイク。話し声。時に。騒音。響き。騒音、以前のな、何か。…音響。



...教えて

群れて、固まらずに、崩壊することさえなく、消え去っていた。
それらは、聞き取られたときには、すでに。

...ね

震えた空気の、たどりついた静止。

そう言ってわたしを見ていた圭輔の

あの日、ホテルのドアが勝手に開いた。鍵をかけていなかった、自分のせいでもあった。

その背後に降っていた雨が

ハンがそこに居て、はにかむように笑った。一瞬だけ。目を伏せる。恥じらいを、押し隠すように、そして戸惑い、何かが葛藤しあい、やがて暴力的に、無根拠な諦めが、すべてを破綻させた。

いま、眼の前の雨と

彼女はうつむき、世界中の苦悩のすべてを背負ったような表情を曝し、部屋の中に入り、ソファ一に座り込み。

同じ雨である必然性など

ややあって、わたしを見上げたハンの眼差しには、泣いてもないのに、何だか零れ落ちそうな潤いにむせ返る。

どこにもなかった

わたしも愛しています。

... Em cũng yêu anh

彼女は言っている。

... Em cũng vậy

あなたと同じように。

見覚えのない女...少女だった。まったく見覚えのない、すべてが虚弱で、すべてがやつれた女。
...あるいは少女。

すきだよ

褐色の肌に、かすかな荒れがある。肌の荒廃。

僕は言った。圭輔に
「お前の、...肌の感じ」
「ばか...」

...圭輔が？

...貧弱な、褐色のハン

「若干、穢くない？...おれの」

「そんなこと、」

と想った。覚醒剤で、頭の中を飛ばしているときに、彼は独りでラブホテルの部屋を出て行く。

わたし以外には、誰も知らないままに終わるハン

...ないって

「すきだよ」

圭輔を、その日《買った》女、日向愛花という源氏名の女が、裸のまま、裸のまま出て行く圭輔を眼で追う。

疾走するバイクごと血に塗れたハン

圭輔の、ざらついた

荒れた肌

体中を、クスリが駆けずりまわり、心臓に、手触りもないままに巢食う。女はただ、眼で追う。

わたしを愛していた

「おれは、すきだよ」

「...ばか」

言葉などかけない。なにもかも、わかっている気がする。

なにもかも、すでに、知っていた気がする。

ハンの体中が、そして

…ばか

…圭輔が？と、

わたしは知っている

圭輔は死ぬ。ラブホテルを出たその足で、ライオンズマンションの、わたしが借りていた部屋に行く。

愛していた

口付ける

微笑む。

ハンを

そっと

全裸になって、飛ぶ。

わたしは

息遣う

あさの9時。わたしは寝付いたばかりだった。

少なくともいまは

生きている

圭輔が帰ってきたことにさえ、気付かなかった。

すべてを悔いる

愛している

何を見た？

君は。最後の風景は？

君を愛しているいま、

ハンの体の匂いを嗅いだ。見て。あの、ほら、雨の日に。

わたしはすべてを悔いるのだった

ハンが指が、わたしを震えてる。裸にする。

なすすべもなく

わたしは見て。無抵抗に、ほら、彼女の思わず、言いなりにまかす。

わたしが犯したすべての破壊行為

誰？

愛するということ

君は誰？…笑っちゃう。…ハン？

わたしが愛したのは

初めて思わず、…部屋に入ってきたとき、…ね？戸惑いながら、わたしが何か言おうとした瞬間に、ハンは滂沱の涙を流す。

誰？

不意に。

私を愛したのは

前触れもなく。

ほら

一気に。

光

そうでなければならぬ正確さで。

昼下がりの

いつか、見たことが在る。

アスファルトが照る

わたしは訝る。

純白の

もはや、戸惑うことは何もなく、もはや、憚ることはなにもない。

きらめき

強姦するかのよう。強姦された気がした。何も知らない少女を、君に。わたしは抱く。戸惑いながら、彼女が、抱きしめた。まだ、君を。何も知らなかったことに驚く。なぜ、ハンがわたしを導きさえしなかったのか、わたしは戸惑った。

20年前、19歳のときの圭輔のように。

暴力的な、夢のような交尾。…交感。

…穢らしい。感じあう。

お互いが、ここに存在している事実を。



シーツが、血で穢れた。

ハンの。鼻血。…わたしのこぶしが、殴りつけるのと同じ強さで、彼女の鼻を愛撫したかも知れない。何度か。

途切れ途切れに。…なぜ？

かさついた、荒廃した皮膚。頬の、にきび、…のようなものが、薄く血の玉を蓄えた。

僕は

唇をふれた。

口付けて

ハンがまばたく。

感じた

…許します。

皮膚の触感を

彼女は言っている。

想いだす

君を見つめながら

その眼差しと、皮膚と、骨格と、体臭と、それら存在のすべてが、明示する。

ときに

いつも引き起こされる逡巡は

…あなたを、許す。

不意に

君を、愛していたから

涙は乾いていた。

意味さえ知らずに

圭輔とわたしは、愛し合った。

その概念の

愛、し、会う。合う（重なる）。った。（一致する）（混ざる）（同一化する）

定義さえ

その言葉の正確な意味は、ふれ、合う。いまだに、かなね、合う。かつて、みとめ、合う

。わかったことなど一度もわかり、合う。ない。どうすればいいのかひかれ、合う。わからない

。にくみ、合う。圭輔、しり、合う。どうやってささやき、合う。愛すればいいのか？きずつけ

、合う。どうすれば、いやし、合う。それはあわれみ、合う。愛と呼ばれ獲るのか？

…なにが？

君を愛することに

戸惑いながら

言いよどむ、口籠り、《…なにが》まばたく。

にもかかわらず

そこにはなんの

為すすべもなく、まばたき、息を吐き、吸いかけて、上目越しに見詰めた。

孤独もなかった

圭輔を。

いかなる

瞬く。「…なにが？」

孤立も

圭輔はなにも言わない。

感じたのは、君の眼差し

そんな事など、すでに予測されていた。愛想がつきるほどに、すでに、いつも、そして、わたし

はなじるように、…何が？言った。

嗜虐的？

窓越しに

…自虐的。

殺してくれればいいのに。

むしろ。

君を愛する、愛し仕方さえ、知らない。

死んでくれればいいのに。

最早。

なにもかも、手遅れだから。

もう。

世界を、破壊したい。

…愛にまみれながら、愛、し、方をさえ知らないのだから。

…世界を（その、比喩としての《世界》などではなくて、言葉としての《世界》などではなくて、この、世界のざらついた、この、そのものを。

…いま。）

空を飛んだ
その鳩が
不意に
旋回をしくじりそうになって
笑った
思わず
君は、不安げな
眼差しをくれる
…なに？
君は、そして僕は
まばたく
これが
君の
世界
君がくれた
微笑んだまま、
なんでもない
…なんでも
美しい、世界
君の心にだけ、かすかな不安が残ったのには気付いている

「1週間前に、会社のみんなで、焼肉屋さんに行きましたよね？あそこの店の娘さんじゃないですか？あの店で見かけましたから。」
タンが言った。

「1週間前に、あの子、誰？会社のみんなで、あなたは、焼肉屋さんに記憶にありませんか？行きましたよね？あの子、誰？あそこの店の誰なのか、娘さんじゃないですか？覚えてますか？あの店でわかりますか？見かけましたから。」…どう？
タンが言った。いすかまえかいざあわみんあしやんに Thịt Nướng きましたのにこどもいえず。たぶんね、みまった。

「覚えてませんか？」…なにを？おぼえまいか？

「…まったく」

「あなたに、誘われたとってますよ。身の危険を感じるほどに、潤さんに求められたと。」ゆんさんさそいました、います。あぶない、…ね。あぶない、…ゆんさんさそいます。…いつ？

タンはハンと話し込み、わたしは端の傍らでタンのビールをあけてやり、わたしも自分のビールを空ける。ホテルの部屋に、タンを呼んだのはわたしだった。ハンは、まるでわたしの妻のように、振舞った。タンに、ハンから何を聞き出させても、すべて、手遅れである気がした。彼らは、時に声を立てて笑い、微笑みあい、わたしに目配せをくれ、「この人は、ハンさんです。」Hàng さんじえつ タンは、わたしに親密な「あなたの、恋人です。」ゆんさんのこいびとおじえつ眼差しをくれて、歓迎するように「ハンさんが言いました。」Hàng さんあいまった わたしの肩をたたく。

ピアノの音が聞こえる。耳を澄ましたのは、

ハンは、そして

川の向うの、僕だけだった。どこかのその家から。ピアノの音に
ときに、すべての事象の犠牲者であるかのような
曲名はわからない。

眼差しを、無意味に

主輔がわたしに覆いかぶさる。

日差しの中にくれた

わたしは抵抗しない。

カフェの日陰から

ふたりのそれが、こすれあって、肉体が決して交わりはしないことを明示する。

向うの、白く輝くアスファルトのきらめき

当たり前だ。何が？

舞い上がった砂埃に

肉体の経験ではないから。それは。

バイクと大型トラックの騒音に

性欲…あるいは、肉体の救いようのない経験を孤独をさえ経験した、孕みこんだ、わたしの精神
の眼差しの中の営み色彩。だったから。…あざやかな。

音響

…愛。肉体が重なり合うべき…ねえ、必然性など僕たちはない。ときに

目をしかめて、日差しから守り

むしろ、嘲笑う。愚劣だ。重なり合う肉体など。

見詰めた。すべてのものが

肉体は、その単なる常に無力だった。合理性など。

彼女を傷つけてやまないことをすでに

唾棄すべき肉体を自然な重ねる。妥当性など。

あえて許して、やさしい諦めのなかに

一之瀬愛という源氏名の女のそこに、わたしのそれが挿入させられる。

赦したかのように

完全に一致することなど一瞬の、ない。

もう

絶対に。痛み。

何も言わないでいいです

そのこじ開けるように。先端に

赦しましたから

静止を、感じられた…当然の眠りを、にぶい、暴力的にしづかなこじ開けるように。痛み。

わたしは、あなたを

声。痛い？愛が声を立てた。君も。拷問されたようなかすかに、声。すこし。助けを繊細な、で
も請うような。若干の、許してください、と、執拗さを持ったなぜ、薄皮をめくるとな叫ぶよ
うなその、痛み。あなたはこんなにも、ふれあい、無慈悲なことが、こすれあうこと、なぜ、か
さなること立てられる叫ぶようなその、痛み、出来るのか、と。ナーヴァスな、…声。…その。

あなたを

「…ねえ、」愛が言った。明けて、朝。

「お前とさ、…結婚してやってもいいよ」ベッドの上に大またを広げて、すべてを曝して。

確信に満ちて、微笑む。…躁。次に手首を切るまでの間の。

くわえる。

なめる。

かぐ。

みる。

みつめる。

ふれる。

はじく。

かむ。

おす。

にぎる。

つぶす。

にぎりしめる。

ふるえる。

いく。

だす。

いれる。

はく。

とめる。

いきをとめる。

うかがう。

なげだす。

なげうつ。

まなせる。

だく。

つかむ。

すう。

あららげる。

すいこんだ。

わめく。

だまる。

しめる。

ふるわす。

沈黙。…どこ？行為が終わった後で、ここは？ハンが息遣う。わたしの体の上で。…なぜ？

言葉が。

なぜ、言葉が必要だったのだろう？



体温がすべてを語る。

かすかなふるえ、二の腕の。わたしはすべてを理解する。眼差し。無慈悲なまでに。

わたしは理解した。

聞く。

残酷なほどに、見透かされた、すべての、彼女の、すべての、…聞く。音を。

感じた。

息遣いの。

言った。愛しています。その音は、…あなたを。何もも言っていないに等しい、永遠に。無防

備な、あなただけを。無意味な言葉。

何を語っただろう？

圭輔は時に、その無慈悲なまでに

鋭い眼差しを曝して、女たちを

圭輔は？

後から、まるで雄犬のように

抱いたものだった。美しい、

何を語りえただろう？

知性のかけらさえない馬鹿な圭輔は

まるで家畜をあやすように、わたしたちは、

わたしは？

剥きだしの軽蔑と、容赦ない侮蔑とともに

留保なき差別主義として彼女たちに

膨大な時間の中で、

奉仕してやりながら、どこかで

どうしようもなく彼女たちそのものに

膨大な時間を濫費し、

陵辱されたのは自分たち自身だったと

いつかは、きっと、自分自身で

それそのものに触れることさえなく、

確信して仕舞うに過ぎないことさえをも

わたしたちは気付きながらも

いつの間にか、時間は忘却した。

。る見

。た見

わたしのことをさえ。

、を君

、日のあ

自殺に限りなく近い、事故死。

、を君

、はしたわ、で中、のめあ

圭輔の死体。無様な。

?をにな

、はしたわ

あきらかな、肉体の破綻。

?をにな

、にみき

魂の不在。精神は、所詮は、

?をにな

、がみき

肉体の隙間を穿った、事故に宿った可能性にすぎないと、

?をにな

…したら？

ハンの体。貧弱な。女の、美しさ？…なぜ、君が。ここに？ハンの、痩せた、栄養失調児のよ
うな、君が、拒食症の、ここに？少女のような、…なぜ？

君が、ここに？「…圭輔」わたしは呼ぶ。

ハンが振り向く。

ハンにひざまづき、ふれる。Tシャツをめくらせた（無造作に）腹部に、（無造作に）わたしは顔
をうずめ、（無造作な）皮膚。その（無造作な）触感、（無造作に）嗅ぐ。

匂いを。…圭輔。想う。

なぜ、ここに？

おかまの圭輔が、なぜ？

ハンがトイレで吐く。その音声が聞こえる。えづく。内臓を、吐き出して仕舞わなければ気がす
まないような。

振り向くと、圭輔の眼差しがそこにあったとき、（あの、圭輔の誕生日イブの日に）それはわた
しを見詰め。（…プレゼント、）戸惑い。（買わなきゃ…）若干、（明日までに。）程度の。

かすかな。

表情を失った、その。…すき。

ん、…

…すき、だよ。

その単純な、数個のシラブルさえ、燃え尽きた後に。圭輔が僕を見詰めていたことに、振り向
いて、気が付いたわたしは、微笑むことに失敗した、その数秒の、そして、ややあって、微笑ん
でいるわたしを圭輔は見つめたのだった。

「…なに？」

圭輔が言った。訝るように。…なに？

「え？…」言いよどんで、わたしは、言葉を捜し、殺してしまいたい。圭輔をではない。自分自
身ですらない。

世界そのものを。

愛していると、その一言さえもが言えず、そして、その言葉が何をも生み出さず、何をももたら
さないのだとしたら。

雨。

あの日、雨が降った。

ハンが、ベッドの上で、わたしに戯れる。

笑う。

声。…聞く。

自分の、…ハン。彼女の、それら。

重なり合い、空間に。

消えうせる。

空間に。

いつから？

ハンが咬む。わたしの乳首を。

かるく。

決して、傷付けたりしないように。

鼻で笑う。上目に見て。

いつ？

いつ、世界を、破壊できるだろう？

わたしは。そして、知っている。わたしは気付いていた。ハンは圭輔の生まれ変わりに違いなかった。「…知ってる？」証明する手立ては圭輔が言った。「お前、」なにもない。「この、世界の」証明する「…秘密。」意味もない。

ハンも、圭輔と同じだった。同じ人物とは言えないくせに。そのすべてを異ならせながら。なにをも共有しないくせに。

ハンも。…生まれる前の記憶、あるんだよね。俺。

あと2ヶ月で。

九月の雨が降り、あと2ヶ月で、とあの日、想った。

日本へ。

帰還。

出張期間の終わり。

ハンは何も知らないままに、わたしにしがみつき、戯れ、圭輔。

わたしは、二度と省みないに違いない。

ハンも。陵辱して、捨て去る。

ベトナムの少女も。

現地で、慰みものにして、捨て去る。

ごみくずのように。

使い棄てて。

水に流す。

トイレの、穢れた紙のように。

…汚物。

穢れもの。…

けがれた植民地主義者の、唾棄すべき肖像。

東南アジアにおける日本人の典型的パターン。

…まばたく。まぶしい。

あの日。しばたかさせた。日差し。

熱帯の日差しが、そっと、まぶたに当たる。わたしは

あの日。君に身を預けた。11月。為すすべもなく。あと二日。

…圭輔。その死の、

わたしがなくなった部屋で、三日前に、ハンも愛の目で見ている前で。どうするのだろうか？

…圭輔。…ねえ、愛してる、圭輔のこと、と言う。愛してる。

そう、実は、…言うしかないから。俺。

足の下に、地球があったの

足なんか、ないんだけど

宙ぶらりんなんだけど

光の束なの。…みんな

綺麗だった…地球

真っ青な、ぼうっとして、鮮明な

光

見惚れていた

迷ってた。どうするか…墮ちるか

留まるか

でも、決めた

なんでだろ？

忘れたけど、もう…

何でだろ。でも

俺は、選んだ

星々が墮ちた

そのとき、下から上に

墮ちた

愛し方も知らないくせに。愛は、無表情になって、

一瞬
まばたく。
見詰めた。
日差し。
無言で、

雨期の終わり。
沈黙「…うそ。」…まじ？

雨さえ降らない。

「…まじで？」…なの？…なん、だ…そう、なんだ、…
わたしは、渴く。



2018.05.17.
Seno-Lê Ma

まるで、今、美しく懐かしいこの世界が滅び去っていくような、と。

そんなフレーズを思いついてしまうほどに、曇り空の下、雨の中の視界は白い。ベトナムの、現地人の妻の家は古く、広い。がらんとして何もなく、吹きさらしの勝手口から、ただ、向かいの広大な廟に降る雨を見るしかなかった。

友人の Nam ナム の娘があれば「ベトナム」のことが嫌いだったとは思わなかった。一般的に、このあたり人間は、長い間独立戦争、そして統一戦争に明け暮れなければならなかったからなのか、どちらかといえば祖国愛が強いものだというのに。

雨期の雨は、ふうっ、と、水滴の一粒が空から落ちてきたのを、例えば頬が感じたその途端に、一気に世界は水浸しになる。それらの膨大な無数の雨粒は轟音を立てて地上にはじき飛ぶ。土砂降りの怒号のような音響に、目の前のすべては打ちのめされ、色彩感覚さえ奪われてしまうほどに、すべては白濁して見える。

Nam の娘の名前は Huê、カタカナ化すれば、フェ、だろうか。カタカナにしてみれば、同じになってしまう中部の都市名 Huê が、かつて、日本で「ユエ」と表記されていたのは何故なのだろう？ 実際の発音を参考にしたのではなくて、その文字表記を、日本人がユエなどと表記することはどうしてもあり獲ないので、あるいは、ベトナムの方言によっては、ユエ、に近い発音に聞こえることもあるのかも知れない。いずれにしても、彼女の名前は、Lê Văn Thụ Huê レ・ヴァン・トウイ・フェ と言い、hoa huê ホア・フェ、つまり、百合の花、という意味ではある。もっとも、びっくりするくらい褐色の肌をしているので、純白の百合とは言いがたい。

父親の希望で、彼女は週に二回、早朝に、わたしのところに日本語の勉強に来るのだが、いい生徒とはいえない。もっとも悪い生徒ではない。

外国語教育の常套、と言うか、わたしも、教育法としては月並みに、彼女に教えた構文や語彙の範囲の中で、かわるがわる彼女に日本語で質問をして、彼女はその質問にももちろん、日本語で返さなければならないのだが、彼女はふしぎにベトナム語でしか返さないのだった。何を言われたのかは理解している。実際、ベトナム語の返答のほうは正しいのだから。あなたは昨日、何をしましたか？ Em… em… đi day học tiếng Anh, và đi cà phê với bạn, và …về, và ngủ. 何の屈託もなく笑い、そのこぼれるような笑顔は、まるで彼女が言われたとおりに正しい日本語で返答したかのような錯覚さえ与える。学校へ行きましたよ。…で、友達とカフェへ行きました、それから…帰って、…寝ちゃったわ。そして、彼女は何の屈託もなく笑った。実際、自分の聴覚障害を疑ってしまうほどに、彼女はあまりにも自然に受け答えするので、どうしても、わたしのほうが不安になってしまうのだった。わたしのほうが、おかしいのではないかと。

実際、母国語を聞いても、頭の中で外国語に変換してからではないと理解できなくなってしまう疾患がないとも言えない。モーリス・ラヴェルだって、楽譜に音符をかけないという「失語症」に陥ったのだから、わたしだって、そんな「失語症」に悩まされ始めないという可能性が、全くないわけではないだろう。耳に聞こえていると思われている音響は、もちろん頭脳のフィルターを通して知覚されたものにすぎないのだから、いま、耳にはベトナム語が聞こえていたとしても、実際に鳴っているのが日本語ではないという可能性を、完全に否定しきることは出来ない。

わたしを、そこまで不安にさせるのは、彼女が、どれだけ日本語を話しなさいと要求しても、必ずベトナム語で、当然のように返答し続けるからだだが、Đạ…、はいhiểu rồi. わかりました。改めて投げかけたわたしの日本語の問いかけに、答えるのはやはりベトナム語だった。日本語

、Em, … em… 日本語を、話しなさい nói tiếng Nhật.、ね、…わかった? hiểu không? - Hiểu. ええ、em わかってる hiểu.、わかってる。そして繰り返される、日本語と、ベトナム語による会話。

…どうしたんですか? なにか? と、戸惑うわたしのその表情に、むしろ、あられもなく戸惑ってしまいがら。

いずれにしても、どうにも後ろ暗い「失語症」というか、新手の「モーリス・ラヴェル症候群」というか、そういった疾患に対する、ぼんやりとしたかすかな恐怖に後ろ手に回られた、妙に倒錯的な感覚の中で、この褐色の白百合に日本語を教え続けるのだが、それはむしろ何も苦痛ではなく、わたしにとっては、あるいは、心地のよい趣味のようなものだった。絶対に日本語を口にしない以外は、目を見張るような優秀な生徒で、言われた範囲の語彙の意味は完全に暗記しているし、文法の予習も完璧なので、ごく最初期以外、わたしのやや、初学者にとっては早口に過ぎるかもしれない日本語を、聞き落とすこともなかった。第一、彼女は、まだほんの少女、十三歳になるかならないかの、あどけない少女に過ぎなかったが、非常に美しかった。実際、こういう子どもなら、親は何かと心配でたまらないだろう。変な男にとっつかれないとうに、と言うよりも、こんなに目鼻立ちにも恵まれ、頭もよければ性格も素直であれば、ひょっとした成人しない前に夭折でもしてしまうのではないか、わたしだったら、そう、気が気ではならない。

…さて、と、わたしが、じゃ、Rồi, em, あなたは、なぜ、tai sao em day học 日本語を勉強していますか? tiếng Nhật? そう言うと、一度、軽く口を尖らせぎみにして、頭で何かを咀嚼したあと、彼女は雪崩を起こしたように言った。Vì là なんて、em không thích ベトナム、好きじゃないから Việt Nam, không, … いえ、違う、em 憎んでる ghét Việt Nam, sống ở ベトナムの生活を Việt Nam, ベトナム人を người Việt Nam, Văn hóa Việt Nam ベトナム文化を… Wait, 待って、と、わたしは言わざるを得ない、wait, em 君は、なんで Tai sao ghét ベトナムを Việt Nam, 憎んでるの? sao vậy? em nghĩ 何考えてるのかな、君は、gi vậy? nói chuyện, つまり、em. 何があったの? Chuyện gì vậy? 話してごらん? 彼女は、物分りの悪い弟に、けれどもやさしく教え諭すように、ないわよ、lý do không có. 理由なんか。そう言うのだが、ねえ、Chú, あなたは chú có thích trời xanh? 好き? yeah, Dạ, yes. うん。じゃ、それ Chú, なんて? tai sao? chú thích なんて、好きなのよ? trời xanh nào?

一瞬答えられずに、わたしは彼女の、微笑んだままの、向こう側が抜けて見えそうなほどに清楚な顔に、たじろぎさえし乍ら、It' s… I feel like… good, … maybe, … I think so, … 自分でも、何が言いたいかわからない。ね、と彼女は勝手に自分で自分の意見への同意を承認して、一度目を伏せてページをはぐると、次の質問に身構えた。

かの善良なる彼女が嘘を言うわけもなく、かの聡明なる彼女が、笑うに笑えない戯言など言うわけもない。実際に、ベトナムへの憎しみを語ったときの彼女には、一瞬、鼠に噛み付いたときの猫がするような、恍惚を浮かべて、容赦ない破壊への欲望に陶然とする、そういった、思わず目を背けてしまったほどの暗い色をその目に曝していたので、彼女が母国の、目に映るすべてを憎んでいるのには間違いがない。

この辺りの人たちは、あけっぴろげな愛国者たちであることが一般的なのだが、彼女は、そうではないらしい。一瞬、いかにもマニアック然とした、他人に否定される前に武装した理論で反覆を用意しなければ気がすまない、いろいろな被害妄想に駆られているらしい日本の自虐的な愛国者たちの顔つきが浮かんだが、それとも違う気がする。

単純に、彼女が言ったように、わたしが青空を好むように、単純に、彼女も祖国を憎む、ということなのだろうか?

ただでさえ遠地へ出張ばかりの発電タービン技師の、大酒飲みの Nam が、家族と必ずしもうまく言っていないことなど知っていたし、彼女の母親が、彼らが住んでいる借家のビルの最上階のオーナー男性と、よからぬ関係にある噂があることくらいは知っていた。本気の仏教国だからなのか、既婚女性の貞操観念だけは極端なこのあたりには、めずらしい関係ではある。おそらく、噂は事実ではあるのだが、夫も、おそらくは、それを知っている。わたしの妻があるとき、「授業」が終わった彼女の帰って行く後姿に、かわいいそうに、と、英語で言った、その正確な英語は忘れた。女の子は、自分の母親のようにしかなれないものよ。英語のことわざそのものなのか、ベトナムのその翻訳なのか、一瞬、その時気になった覚えがある。たまたま、彼女の言い振りが、そんな風に聞こえただけなのか。娘の方にもまた、いろいろな噂があるらしかった。あばずれ呼ばわりして、彼女をあからさまに忌避する人たちさえもいるほどには。

近所に一軒だけある Phố フォー の店の前を、バイクで通りかかったとき、あからさまに入店拒否される Huệ を見たことがある。それは通り過ぎる一瞬、視界に入ったに過ぎなかったが、迫害者そのものになって、その店の「おかみ」は Huệ に早口にわめきながら、手のひらを逆に振り、あっちに行け、ここにあんたなんかの座るテーブルはない、とわめき散らしているらしかった。わたしは、彼女に関しては、誤解だ、という気がしないでもない。もちろん、あれほど忌避されるなら、正当か不当かともかく、それなりの固有の理由があつてしかるべき、ではある。とは言え、その母は、むしろ誰にも、なにも、忌避されなどしてはいないのが、不可解だった。

目を上げると、 Huệ が、例の、必要以上にくるくるした穏やかで清楚な眼差しの中に、両目をそろえてわたしを見つめ返していた。

授業が終わって、土砂降りの雨の中に、合羽をかぶって消えて行く彼女の後姿を見送りながら、ふと、思い出すのは、一週間前だったか、Thanh タン の店の前を通りかかったときに、そこで彼女と Nam たちがカラオケを歌っていた姿だった。母親と兄と、Nam の二人の友人を含めて、彼女たちははしゃいでいた。彼女は、有名な、…少なくともベトナムでは、ベトナム航空の離発着時の機内BGMにすらなっているほどには有名な、ある歌を歌っていた。ベトナム戦争時に亡命した家族のベルギー生まれの二世が、フランス語で歌った、ベトナムについての歌だった。その歌手は、ベトナム語など、片言さえも話せないらしかった。

Tell me all about this name, that is difficult to say,
It was given me the day I was born.

Want to know about the stories of the empire of old,
My eyes say more of me than what you dare to say.

All I know of you is all the sight of war.
A film by Coppola, the helicopter' s roar.

One day I' ll touch your soil,
One day I' ll finally know your soul.
One day I' ll come to you.
To say Hello...Vietnam.

Raconte-moi ce nom étrange et difficile à prononcer
Que je porte depuis que je suis née

Reconte-moi le vieil empire et le trait de mes yeux bridés
Qui disent mieux que moi ce que tu n' oses dire

Je ne sais de toi que des images de la guerre
Un film de Coppola, des hélicoptères en colère

Un jour, j' irai là-bas
Un jour, dire bonjour à ton âme
Te dire bonjour, Vietnam

語りはじめなさい、
わたしの名前について。この、発音しにくい、
生まれたときに与えられた名前について

語りはじめなさい、
歴史について。たとえばあの古い帝国について
むしろわたしの瞳のほうが饒舌になるときでさえ

いま、あなたについて
わたしが知るすべては、戦争のイメージ
鳴り響くヘリコプターの轟音、 Coppola の映画だけ

ある日、あなたの大地に触れる。
その日、あなたの魂に触れる。
いつの日か、あなたに会いに行く、
こんにちは、そう言うためだけに。…ベトナム。

Hello, Vietnam / bonjour, Vietnam / こんにちは、ベトナム

ベトナム嫌いの彼女は、にもかかわらず、その歌が好きなのに違いない。きれいに歌いこなし、その傍らで、父親の Nam は友人たちと乾杯しながら、彼は、今日もまた飲みすぎてしまうのに違いない。妻は彼を罵るに違いない。あしたは、男とのデートがすでに約束されているかも知れない。わたしは、なんとも言えない、むしろ無惨な感情を押しこらしながら、いまだ、雨が降りやまないままにブラウンの縞を濡れた猫が滑走の途中で不意に立ち止まり、彼は遠くの物音を見るが、彼（あるいは彼女）の見た風景をわたしがついに見ることはない。一瞬の静止の後で、むしろその停滞を打ち消して再び滑走した彼女は、確かに感じたそれを既に忘却してしまっていたのだった。取り残されたわたしが雨上がりの青空を見上げる前に、「よく晴れています」カフェ

の三人の老人のうちの一人が見上げたわたしに言葉をかけた。カフェのひさしの向こうには青空が広がり、それは美しく青い輝きを湛えたまま、あなたには、日本語などわかりもしないくせに。ベトナム人のあなたは。こうして八十年以上もここにいて、ここで暮らしてきたあなたが。カフェには三人の老人が固まって座っていたが、一人だけ顔を上げた彼の白髪は禿げ上がることなく伸ばされて、老人らしく白いひげさえたらされているのを、振り向きざま襲い掛かってきた anh Ngoc アン・ゴック の身体をかわしたとき、ねじられたわたしのひげは悲鳴をさえ上げた。冴えた空気が、もうすぐ雪が降ることを教える。anh Ngoc は若い。わたしなどよりはるかに若く、俊敏な身体が、むしろ、時を獲たように襲い掛かってくるままに、わたしたちの身体の接触そのものが、わたしたちそれぞれの皮膚に、わたしたちそれぞれが目の醒めるような苦痛を与えたが、息遣う彼の呼吸が途切れた一瞬に、わたしが彼の後頭部を殴打したあと失神した anh Ngoc の身体はくず折れる、コンクリートブロックが敷設された路面の模様の放射状の連なりの上に。わたしが悲鳴を上げるより早く、わたしは失神した、後頭部を誰かに殴打され、視界のすべてが消滅した、と、それにすら気付かないうちに、わたしは目覚め、それはわたし自身の悲鳴がむしろ私を目覚めさせてしまったのか、目覚めたからこそ、かつて中断されていた悲鳴が今、口からこぼれだしたのか、いずれにしても、ひたすら青い空間の中に、彼は仮面をかぶってわたしを見つめていた。気がつきましたか？ anh day không ? と彼が、起きましたか？ xay ra … 起きましたか？ 言った。何が起きましたか？ いったい、何が？ 極彩色の仮面のままで、けれど、その仮面が仮面の用を足しているとは思えない。なぜなら、彼の顔立ちなど手に取るようにわかるのだから。「中東風です」彼は言った、耳元でささやき、わたしは「ウラジオストックあたりの」という彼の声を聞くが、その、女声のものには他ならないながら、彼が男性であることなどわたしにはわかっていた。男しか愛せないくせに。拘束されているわけではなかったが、わたしが拘束されてある現実の中で、身体の内側は奪われていたには違いない。椅子の上でもがくわたしを、彼は、遠くの、美しい部屋の青い壁を背にして、しかし、わたしは涙さえ流しながら彼に乞うていたのだった。わたしにとって、今、感じられるのは恐怖以外のものではなかった。ただ、恐怖が、もはや予感ではなく、手のひらの上に存在し、目覚め続けたそれらが、これから起こるべきすべてのことを予兆していた。兆された、光さえ差さない閉ざされた部屋の中の、内側から光り出すような青さのなかに、それは初めて知る美しさだった。もっと、ここにいることを、ただそれだけをわたしは望み、この美しさと共に死にたいとさえ思っているわたしの想いを、彼に伝えるにはわたしの猿轡が邪魔だった。あなたは知っているか？ 今、この世界の本当の美しさは？ 「これは、ウラジオストックの雪です」彼が言った。彼はわたしを覗き込んだままに、くの字に曲げられた彼の肢体は美しい。ある春の朝に、最後に、不意に降った雪のように。しずかな桃色の花々の上に。すでに、失われた色彩たち。再び目を覚ましたわたしは、失神からようやく醒め乍ら、彼が次に何をやるのかは知っていた。容赦もなく彼の左手の刀が振り下ろされて、わたしの両足を切り落としたときに、再びわたしは失神から目を覚ますのだった。耐えられない、絶え間のない苦痛が、ふたたびわたしを失神させ、あまりの痛みのあまりに、ふたたび目覚めれば、痛みそのものはわたしの背骨をへし折りさえしながら、わたしは死にはしないだろう。痛みの、はり上げられた悲鳴の耳もとへのつらなりが、かつて、誰も死んだことなどなかった、こんなことでは。これは、ヘラクレスの女のたった一人の弟が残した言葉だった。わたしは知っていた。彼の拷問はとどまることを知らず、痛みによる覚醒と失神との間に、もはや、何の差異があったというのか？ すでに、切り落とされた二つの足さえ、コンクリートと同化さえしながら、その未だに幼児のような半身を既に再生し終えてさえているのだから、君は知っているか？ 彼の止めどもない拷問、その単純な痛みの純度を？ 口から鉄の棍棒を肛門まで突き刺されくしぎのまま吊り上げられた、髪の毛の先にまで目覚め続ける痛みの複数のざわめきを。その上げられた悲鳴の連鎖の反響を。彼がわたしを覗き込んだままに、くの字に曲げられた彼の肢体は美しいことなど知っているわたしの顔の、無意味な極彩色の仮面を、むしろ、その少女風の華奢な指先で撫ぜるとき、わたしをついに殺そうとする彼を真つ二つに切りすてしまえば、転げ落ちた彼の頭部は最早、涙さえ流せはしない。奪った刀は、すでに投げ捨てた。そのとき、コンクリートの青い床の上に立てた、罅られるような音響をわたしは忘れ獲ないだろう。いつか、彼は、むしろわたしのことさえも忘れてしまうにしても。壁に触れ、その細胞と細胞が接触しあうときの、あの感覚なら君にもわかるだろう、そう、彼ならそう言うに違いなかった。親愛なるプロメテウス、あなたなら。その細胞と細胞が、差異を自覚するままに重なり合って、最早融合された二つのそれらのふれあいの中で、神経の根元につめたい息を引きかけられたような細かな無数の感覚をすべての細胞のすべてが感じているときに、最早、それが快感なのだとか言い獲ない、むしろ性的な興奮の中で、融合されたコンクリートさえもが射精したに違いない。わたしは外の大気を吸い込むが、冷たいそれは、しずかに、見渡す限り、すべてが白く、白い、純白に染まったこの世界の見渡す限りの中で、わたしはしずかに呼吸したのだった。樹木の白い幹に触れたとき、わたしが危うく失神しそうになったのは、樹木の細胞たちとの溶解のせいばかりではない。どんなにとけあったとしても、ついには別々のものとして、分かたれ、それ自身差異を獲得しようとするくせに。今、わたしは知っていた。通りの街路樹に背中だけ持たれて、目の前を、背後をさえ通り過ぎていくすべての人々の顔が全く同じであることを。そして、その視覚は、わたしの視覚障害に他ならないことをさえ。わたしは知っていた、もはや差異を認知できないわたしの視界は、す

べてを同じものとして認識さえしながら、それらのすべてが、今、特異性のうちに目覚め続けようとしているのかかわらず。彼の固有の死によって、すべてのわたしたちのすべてが、やがては時間上の固有性をさえ獲得しようとしていたこのときに、限界もなく同じな、同じものの無限の連なりの中を、橋の上でわたしはもう一度、肺の中いっぱい空気を吸い込んだ後、彼から奪ったものに違いない刃で、切り裂いたときに、目を、あふれ出した血の流れさえも、再び、捉えはしなかった、すでに、わたしに切り裂かれたこの両目は。明日、わたしの口の中にだけ、雪は降ったことだろう。



2017.11.26.
Seno-Lê Ma



あるいは傷、としての短編。そしてその集合

<http://p.booklog.jp/book/123325>

著者 : Seno Le Ma

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/senolemasaki0923/profile>

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123325>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト